

329
155



始



血氣時代乃井上侯

痴遊 伊藤仁太郎著

東京堂發行

329-155



血氣時代の井上侯

大正
1.11.12.
内交

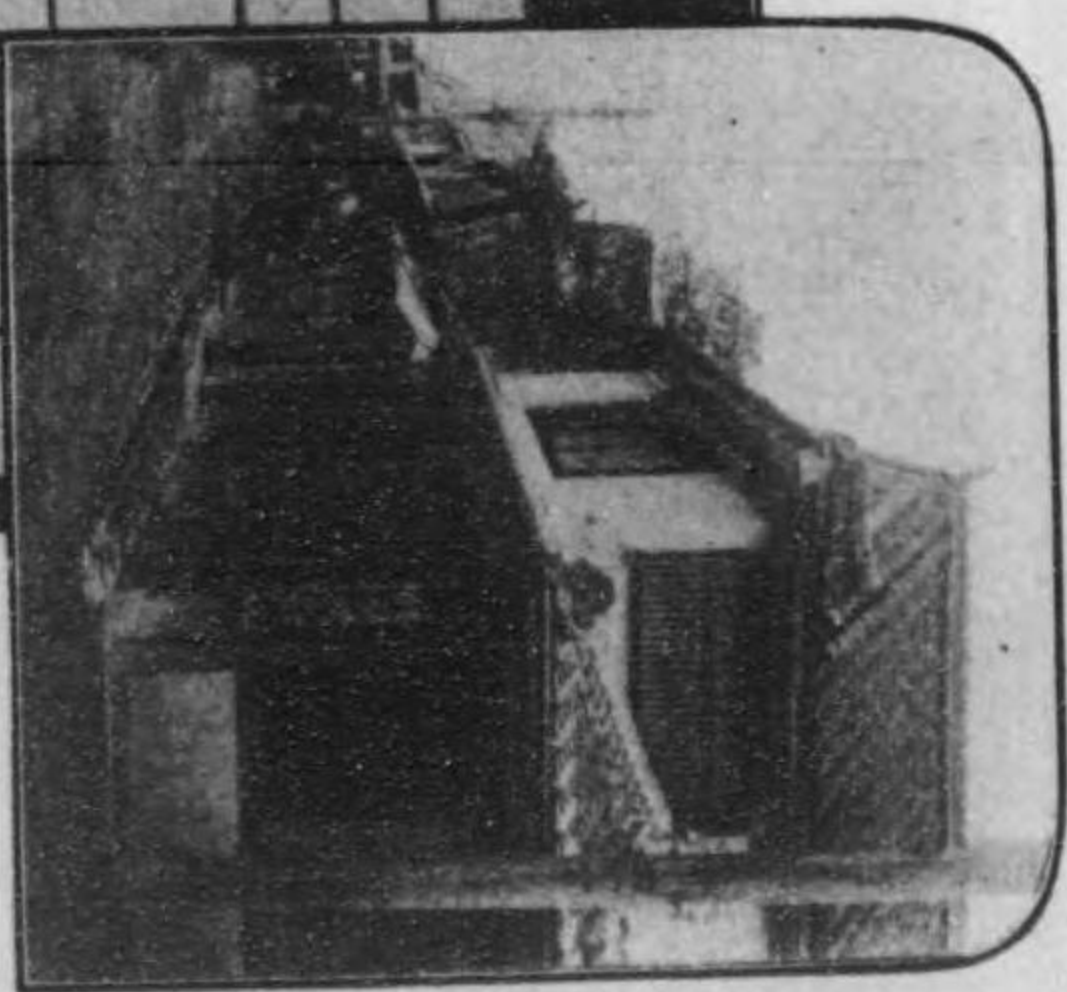


血氣時代の井上侯



最 近 の 井 上 侯

松家旅館全景



井上侯爵の伏せしめ別荘松家の一室と同一家の族



- 右ヨリ
- (一) 松尾サダ
 - (二) 松尾數馬
 - (三) 松尾彦七
 - (四) 松尾トシエ
 - (五) 松尾ハツ
 - (六) 井上侯爵
 - (七) 和田キマ
 - (八) 松尾トシエ
 - (九) 松尾トシエ
 - (十) 佐藤ハツ

額扁の念紀候上井るけ於に家松若府別

敬令子之奉考
以松若府松尾
不誤得主人
妙法不品不有
不之特別府松本
書之特別府松本
字之為世外
圖印

中身若之揚

松尾主人
氣佐世
圖印

序文

回憶すれば昨年九月秋風新涼を送る頃、事を以て井上老侯を内田山邸に訪ふ。時に侯予に謂て曰く、昨今中央新聞紙上伊藤痴遊が『別府潜伏中の井上侯』を連掲す、之を読む、但一二事實を誤るものあり、痴遊に傳へよと。乃ち予は伊藤君に告ぐるに侯の言を以てし、翌日君と共に再び内田山邸を訪ふ。侯は歡んで君を迎へ、君が爲めに諄々として當年の事歴を語り、且つ親しく往復書翰其他貴重の文書を示して君に教ふることに頗る詳か也。而して今回君が之を訂正裨補し、『血氣時代の井上侯』と改題して上梓するや、予は本書の爲めに侯の最近撮影と筆蹟とを請ふ。侯之を許諾す。以上は本書と予と因縁淺からざる次第にして、伊藤君が予に囑するに序文を以てせる所以茲に在り、予が不文を顧みず君が囑に應じたる理由亦た茲に存する也。

抑も侯は吾元勳の首斑にして、國家の柱石なり。夙に勤王の志篤く、至誠公

に奉じ、赤心事に當り、功績愈々顯はれ、聲望一世に隆し。洵に萬世の龜鑑たるを失はず。殊に侯が五十年以前、慨然發憤して國禁を犯し、故伊藤公と共に海外に航し、歸來攘夷の非なるを論じ、勤王開國の議を樹て、内訌の爲めに暗夜要撃に遭ひ、萬死に一生を得、能く艱難を排し辛酸を嘗め盡して、終に宏猷を賛襄し、皇基を恢弘したるは、其壯烈聞くものをして肅然襟を正さしめ、懦夫亦た爲めに起つゝの慨あり。即ち本書は此間の顛末を描寫脚色したるものにして、敘事精細、文章明快、侯が當年の面目精神躍如として紙上に生動す。伊藤君曩に『西郷南洲』を公にするや、人争て之を讀み、忽ち數版を重ね、洛陽の紙價爲に高からんとせり。蓋し本書は『西郷南洲』と異趣にして同工なるもの、必ずや又た世の歡迎を受けん。

今や吾讀書界は日に月に墜落して、卑猥の稗史小説盛に跋扈し、健全なる讀物は寥々として曉天の星の如し。是れ心あるもの、常に痛恨長大息する所にして、人を害し世を毒する、蓋し測知すべからざるものあり。昨年文部省に通

俗教育調査委員會の創設せらるゝや、通俗圖書の撰定審査を以て、其重要事項の一に數ふ。想に茲に大に見るありしが爲めにして極めて機宜に適ふたる措置なりと信す。而して本書が侯記傳の一部たるは勿論、侯に直接間接の關係ある志士の事歴をも併記すれば、紆餘曲折波瀾多き維新活歴史の側面亦た之に依て眼前に髣髴たるべく、通俗平易の史的讀物として、上乘なりと云ふも過言にあらず。而已ならず、本書は侯が當年艱難刻苦の状況を詳叙せるを以て其裡自ら幾多の教訓、規箴、暗示を含み、春花秋月暖衣飽食、艱苦の何事たるを知らざるものを興奮發揚せしめ、世道人心を維持するに庶幾らん。是れ予が本書を以て坊間に行はるゝ普通の稗史小説と玉石混淆同一視すること能はず、特に江湖に之を推奨せんと欲する所以なり。

明治四十五年七月中央新聞編輯局に於て

原田豊次郎

巻頭に題す

本書の出版に際し、僕が著者として、本書に對する感想を一應述べて置く必要がある。僕は常に好んで維新前後の志士や、浪人の事績を講演して居るのであるが、殊に防長二州の人士が、幕末の革命に關係した事績を、最も興味を有つて調べて居る一人である。今や、血氣時代の井上侯と題して、侯が維新前後に於て活動した顛末を、此小冊子の中に概略ながら納めて了つたのだ。然し、特に井上侯の事績のみを引離して、一冊の書物と仕たといふのは、些さか次第があるので、夫には二つの理由があつて左様なつたのであるから、この理由を述べて置く必要があるのだ。

第一は、侯が慶應の末年に於て、豊後の別府方面に漂流して居た時代に、不圖した縁から二三の町人に幾分の世話になつたといふ、其僅かな事を、如何にも大恩なるが如くに自から重く見て、五十年の後に其人々の跡を訪ひ、或は展墓の禮を行ひ、或は遺族に對して先人の恩を謝したといふことがあつた。其事は極めて小さいこと、このやうではあるけれども、今日の如き薄ッ筈な教育に依て、薄ッ筈な人間の出来て居る時代に、斯の如き事であつたといふことは、廣く世に傳へて人間の心掛は、將に斯なればならぬといふ事を、今の青年に深く會得さ

せたいと思ふ考へが起つたから、其願末を書うといふ氣が出たのである。既う一つは、明治四十三年の三月二十
九日に、木挽町の田中家といふ符合から、是非僕に講談を仕に來て呉れといふ頼みがあつた。然るに僕は翌三
十日を以て、九州へ出發すべく、既に旅裝も調ふて居た時であるに依て、其の事由を以て折角の招聘ながら之
を拒絶した。所が翌日の朝になると、博文館の編輯員某が是非面會を仕たいといふて訪ねて來たので、會
ふて見ると、夫は坪谷善四郎君の使であつた。其口上を聞けば「今晚の五時より濱町の常盤といふ料理店に
於て、是非一席の講談を頼みたい」といふのであつた。僕は答へて「實は九州行の準備が出来て、今晚の汽車で
東京を立つのである、昨日も田中家の使に對して其旨を以て斷つた位であるから、君の方へも行く事は出来な
い」といふと彼の人は「いや田中家からお願ひを仕したのと、私の來たのが同じ事柄なのです、實は井上侯が
病氣全快を仕てから、未だ誰とも會飲しないからといふので、今度九州の炭坑主が出て來たのを幸いに常
盤に於て會飲する事になつたのである、然るに井上侯が是非君の講談を聞きたいといふ注文であつて、夫を室
田義文君が、容易く引受けて了つて、今日の小宴を聞く事になつたのである、處が昨日君から斷られたといふの
で、室田君が坪谷君の所へ來て、此の内情を打明けて、坪谷君は長から伊藤君を知つて居るから、是非伊藤君
に頼んでくれと斯う言はれたので、私が坪谷の代人として來た譯でありますから、是非御承知を願ひたい」と

いふのであつた、僕も事情を聞いて氣の毒とは思ふたが、然ればとて九州行は今通れ難いのであるから、然らば
他に相當の者を選んで講談をさせる事に仕やう、と答へると、彼の人は「いや夫では困るのです、井上侯の注文が
君に自分の傳記を演て貰ひたいといふのであるから、他の者には逆も出来ない事である、是非枉げて此の儀は御
承諾を願ひたい」といふのを聞いて、僕も考へた、是は頗る面白い話で、抑々講談といふものが世に現はれ
て以來、未だ嘗て本人の前で、その人の履歷を講じたといふ事はなからう、亦本人に聽かれて困るやうな話
を、他人に聞かせるといふ事は不都合な次第であつて、僕は自から信じて、僕の調べた物に誤謬はなく、僕の講
談は本人に聞かれて困るやうな、そんな詰らない物でないといふ確信があるから、頗る興味のある事であると
いふ考へになつて、即座に出演する事を快諾して、その人の見て居る前で、九州へは出發延期の電報を發し
た。其晩彌々常盤家へ罷出て、井上侯の前に井上侯の傳を演すべく自分は覺悟を仕した。
然るに、常盤家へ行て見ると、井上侯の他に、席に列なつて居る人は原敬、鶴原定吉、貝島太助、麻生太吉、中
野徳次郎、野田卯太郎、永江純一、高橋義雄、室田義文等の人々であつて、何れも面識ある人ばかりであるから、
狭い座敷の中に、此人々を列べて置て講演をするといふ事は、頗る困難であるとは考へたが、來た以上、今更退
くにも退かれないので、僕は第一に井上侯の袖付襦袢の第一節を演じた。夫が終つて歸らうとすると、原君が

額りに引止めて、兎に角侯爵が話したいと言はれるに依つて、話を行つたら何うであらうかといふので、僕も席に復して侯爵と對座した。其談話の間に於て、僕の得た感想を述べて置きたいのだ。第一が僕の講演中に井上侯が斬られて、伊藤高杉の二人が見舞に來た所を演べて居る中に、井上侯が顔を掩ふて泣いたから、夫を買れた一聞下は不甘の講演を聴いて泣いたやうでしたが、何ういふ御感じをお有になりましたか」といふと、侯は「いや實は評判には聴いて居たが、いかゞはしい者だとのみ思つて居たが、意外に細い事を調べて居るのに實は驚いたのであるが、話を聴いて居る中に、伊藤と二人で列んで之を聴いたら、猶一層面白い事であらうと考へて、昨年の哈爾濱の事に思ひが及んだから、最早忍耐が出来なくなつて泣いたのである」と言れた。此一言は實に侯の人情に厚い人であるといふ一證にもなつて、頗る興味のある事柄だらうと思ふ。又第二は侯を初め毛利の若侍が攘夷勤王の議論を唱えて、若りに異人館に火を放つたり異人を斬つたりした、其攘夷といふ事は、如何なる次第であるか、又其攘夷を爲したならば、天下が何ういふ風に變化を仕て來るといふ考へであつたか、當時の感想を訊きたいものであるといふて、問掛けると、侯は顔を押へて「莫迦な事を言へ、文久年間には我々の仕た事が、今更説明が出来るものか、異人館を焼いて異人を斬れば、即ち攘夷の實行を仕た事であつて、夫が天下の御爲になると考へたが、惜これが爲に天下が何う變る、といふやうな事の考へのあるべき筈はないぢやな

いか、明治の教育を受けたものから、其當時の事を訊かれては、何と答へやうもない」といふて呵々大笑せられた。之が當時の人には鳥渡言へない事であつて、侯の確かに偉い點であるといふ事を僕は認めた。維新當時に働いた人に付て、當時の感想を訊くと、十人が十人まで、明治の今日の頭腦を以て、種々理窟を付加へて、さも偉さうに物語をするといふのが一般の状態である。然るに侯は左様でなく、只天下の御爲になると考へたまでの事で、其先の事は判らなかつたといふ、此正直にして淡泊な答へといふものは、侯にして始めて言へる事である、僕は深く感に打たれたのである。此二つの事は唯に今の青年に對する、或教訓を含んで居る答であつたらうと考へる。

夫から更に侯の希望に依つて、御殿山の英吉利公使館を焼打した一節を講じて、其晩は十二時近くまで談話の交換を仕て別れた。僕が侯に知られたのは此時からであつて、其後も一兩度はお目に掛り亦お話を何かつた、斯ういふ關係から僕は急に本書を著す氣になつて、遂に出版の運にまでなつたのである。

所が侯は親切にも、此原稿を一々眼を通して、種々助言を與へられたのみならず、一書生の著述に對して、侯が自から進んで、題字を寄せられる約束まで爲られたのであるが、それは今回の大喪について、初版の間に合はぬことになつたのは、甚だ遺憾千萬である。

猶一言附加へて置く事は巻頭に掲げた寫眞は、切て侯が本書の出版に際して、特に寄贈せられたるを復寫したのであるから、此位正確にして新しい物はないのである。猶夫に付て中央新聞社の原田豊太郎君が種々幹旋の勞を執れた親切は、又深く僕の感謝する所である。

大正元年八月一日

東都橋場の石濱川岸に於て

痴遊生

血氣時代の井上侯 目次

誤解されたる井侯……………一

侯は情の人である……………三

外船砲撃と交渉……………四

毛利藩の應戰準備……………五

世子侯の説諭……………六

藩論改新の壯圖……………八

由縁多き姫島……………九

攘夷不可の辯論……………一〇

藩論又一變……………一一

會薩の聯合成る……………一二

毛利藩京都を退く……………一四

長藩歎願の趣旨 一五

武裝的入京 一六

早馬の注進 一七

前後に敵を引受く 一八

井侯三田尻に赴く 二〇

藩中でも評判の男 二二

重要會議中に居眠 二三

説出す一奇策 二三

翻弄された重役 二四

藩公直接の御沙汰 二七

各隊勇士の意氣 二九

萬事休矣愈々開戦 三〇

敗報踵を接して到る 三三

侯の友誼と高杉 三五

高杉が介錯しやう 三七

勝手に切腹は爲せぬ 三八

初一念を貫く分別 四〇

武士道に内外なし 四二

君命より重きもの 四三

交渉の適任者 四四

大役を引受けた武士 四五

唯一つの頼みは通事 四七

英軍艦へ烏帽子直垂 四八

解らぬを承知で國體論 四九

剛情の勝利 五〇

美事なる高杉の談判 五一

伊藤俊輔へ大命 五二

斯の如き大功績ありや 五三

君命を辱しめず 五四

敗者が攻勢 五五

下之關と霞ヶ關 五五

幕使來つて毛利藩へ難題 五七

非戦論と開戦論 五九

臣子の執るべき道 六〇

松陰の松下村塾 六一

早朝から夜迄の論戦 六二

懊惱不爲眠 六三

意外の御沙汰 六七

天晴なる抱負 六八

愈々時節到來か 六九

論議の劈頭は侯 七一

御家の一大事 七二

恭順派へ大刺戟 七四

直言喝破満堂動く 七五

眞に空谷の登音 七六

兵糧攻の會議 八〇

四時間の舌戦勝利 八一

大事の前の小事 八三

外其侮りを招かず 八四

味方警戒の兵 八五

猫眼の如き藩命 八六

尖戸備前の仲裁 八七

聞捨にならぬ一言……………九〇
 歸途を待受けた三人……………九二
 例日と違ふて、油断はならぬぞ……………九三
 寂しき町の夜……………九四
 待受けたる三人武士……………九五
 袖付橋の暗打……………九七
 春を拒む兄の情……………一〇〇
 疊針で創口を縫ふ……………一〇二
 祇園の花……………一〇六
 瀕死の枕頭……………一〇九
 親友の聲……………一一一
 苦しき息の下に遁の字……………一一三
 武士の意氣地……………一一五

未だ生きて居る……………一二五
 検視の役人……………一二七
 晋作の博多着……………一二八
 亦英雄の一癖……………一三〇
 長襦袢の前で獨酌……………一三〇
 一片の俠氣……………一三一
 金で買へぬ氣合……………一三三
 石藏屋の蟄居……………一三四
 女傑望東尼……………一三七
 棘の中の蓮花……………一三八
 至誠未だ天に通ぜず……………一三九
 高杉嬉しさに泣く……………一四〇
 長州征伐の遠巡……………一四三

日本武士の龜鑑	一三四
直ぐ歸國致さう	一三六
望東尼に訣別	一三九
餞別の旅装束	一四二
生命長かれ櫻花	一四四
獄中から月見	一四五
月の世界が見える	一四九
出任せの法螺	一五三
一奇策	一五四
騎兵隊の奇襲	一五五
困難なる長州再征	一五九
勝海舟の達識	一六〇
桂窮地に陥る	一六一

祇園の幾松	一六四
桂を知らねば名折	一六五
小五郎の修業	一六七
安藤要撃事件	一六八
祇園に可愛い者	一六九
白刃の下	一七三
斬り下した一刀	一七六
縁の糸	一七九
新徴組桂を追ふ	一八三
匕首閃めく	一八六
隠家に突然の客	一八九
白刃の前で慍氣	一九二
貴下の首は何うなさる	一九六

10

幾松遂に捕はる	二〇〇
幾松伊藤に邂逅す	二〇一
桂の行衛	二〇五
疵の痛み	二〇九
手に入つた秘密の物	二二二
別府行の相談	二二五
お静御件を仰付けらる	二二九
別府行の船	二三三
別府の湯の香	二三六
若松屋彦七	二三九
不審の晴れぬ刀痕	二三三
浴槽の飛沫	二三六
届けるに及ばぬ	三三九

11

今日こそは談判	二四二
何うした疵です	二四五
伊藤からの書面	二四八
灘龜へ頼みたい	二五一
脆きは人の生命	二五五
普通の少年と違ふ	二五八
喧嘩好きの龜吉	二六一
親子の情	二六四
若彦自身の訪問	二六八
乾兒か客分か	二七一
下之關の町人と偽る	二七四
有繫は親分の眼	二七七
親分乾兒の盃	二八一

金を召上げる工夫……………二八四

面と背部の疵……………二八七

奇怪な春山の舉動……………二九一

博奕の神の庇護……………二九五

勝逃は酷からうぜ……………二九九

遺恨の盃……………三〇三

面目ない叱責……………三〇六

小遣取に土方稼ぎ……………三〇九

湯の中の武士一人……………三一三

天の助けた生命……………三一六

有繋は武士の眼力……………三二〇

汝は土方ぢや無いか……………三二三

適中た觀察……………三二六

井上を呼戻さんとす……………三二九

高杉晋作の使者……………三三二

尊公が井上聞多殿か……………三三五

鬼の眼に涙……………三三九

井上の嬉し涙……………三四三

藝藩の首鼠兩端……………三四六

毛利藩へ難題……………三四九

備後介の働き振り……………三五二

言出しては却々肯かぬ氣の井上……………三五四

井上の主張徹る……………三五七

三日以上の猶豫はならぬ……………三六〇

外交上の辭令なるもの……………三六三

津和野藩の印物が證據……………三六五

一四

遂に長谷川を引渡す……………三六九

休戦を利用して藝州藩を操縦……………三七一

西郷吉之助と黒田了介の奔走……………三七四

徳川慶喜の將軍後見職……………三七八

幕末の偉人勝海舟……………三八〇

勝海舟の御役御免……………三八三

坂本龍馬の斡旋……………三八六

西郷來らず坂本の困惑……………三八八

龍馬南洲を逐ふて來る……………三九一

黒田、田中、中岡の長州下り……………三九二

彼ア言はんことには戰にならんからな……………三九四

西郷の巧妙なる外交策……………三九七

いよく新政府の組織……………四〇〇

一五

聞多を改め馨と稱す……………四〇一

多士濟々たる新政府……………四〇四

尾去澤銅山事件……………四〇五

精力と至誠と而して天運……………四〇七

人を引付ける一種の魔力……………四〇八

炭鑛界の四傑……………四〇九

岡山行き夜行列車……………四一一

關ヶ原！井上侯爵……………四一二

別府潜伏時代の舊恩人……………四一四

己れは土方も仕た事があるよ……………四一六

當年を追憶して轉た慨然……………四一七

博徒灘龜の乾兒……………四一九

舊恩報じ了つて馨風肌に治し……………四二〇

血氣時代の井上侯

痴遊 伊藤仁太郎著

△誤解されたる井上侯

侯爵井上馨といへば何となく剛情で悪人の如く思はれて、一も二もなく面白くない人のやうに言はれるが、その實は存外に熱烈な情を有つた人で、能く他の世話も爲れば、屢々友人の危急も救ふたことのある、真に美しい情を有つた人であるのに、世間からは全く其美しい點を認められないで、無暗に悪く言はれるといふのは、全體何ういふ次第であらうか、僕は竊かに思ふ、この人の世話好といふことが、却つて誤解を爲れる原因になつたのではあるまいかと、何故なれば、一度諾といつて受込んだら根から葉から世話を仕通すといふ風で、所謂片意地な所のある、それが世話好の人の通有性であるから、何うかすると誤解を爲れて、悪くも言はれることになるのだらう、それから火のやうに熱す

血氣時代の井上侯目次終

附録

井上侯別府行の由來……

毛里剛軒記……一五

る性質の人である爲めに、自分の事と他人の事との區別が無くなつて、世話を仕掛けた事に、少しでも反對するやうなものがあると、サア大變だ、雷は一時に落ちて来て、肝腎の御本人よりか、自分の方が上熱せて了つて、誰れでも構はぬ、向ふへ廻つたものは、呼吸の根の絶まるまで、叩きつけて了う、といふ所から、さて其事は終りを告げて、年月は過ぎてても、叩きつけられたものは、一生その怨みを忘れない、左様いふやうなことが、幾度も重なつて来ると、終には有ること無いこと、尾に尾を添へて振廻る、それが妙に人氣を得て、想像に想像を冠せ、臆説が臆説を生むで、果は根もないことに迄、彼の人なら左様もあらう、と言はれるやうになつて、全く誤解されて了うものだ、斯ういふ風の人には世間に幾何も在る、井上侯の如きは則ち其一人であつて、而かも、今日のやうな身分になると、更に猜忌と嫉妬が加はつて来るから、一層その美點は見ないで、悪い所ばかり數へるやうになる、寔に此人の爲めに惜む可きことだと思ふ。

その代り、よく其性質を呑込むで、永く接近して居る人は、いづれも普通の關係でなく、皆な親分と乾兒のやうな間柄になるのだ、些も例の役人流の薄つべらでなく、たとへて見れば、博徒や俠客の間に行はれる、親分と乾兒のやうなものになつて居る、是れ丈は現時の政界に多く見ることの出来な

い點であつて、強ひて其の類を求めたら、行く道や流儀は全く異ふが、頭山満と星亨、それから此人、まア斯んなものであらう。

△侯は情の人である

是れは近頃のことであるが、大分縣の別府といふ所へ、態々出かけて行つて、五十年前に世話になつた人の遺族を捜して、舊恩を謝して来たといふ美談がある、こんなことは人間として、當然のことを盡したので、何も珍らしいことではないのだが、その人間なるものが、甚我儘な奴で、殊に、今日のやうな輕佻浮華の世の中に在つては、却々五十年前の恩返し杯、薬に仕度くもないことで、昨日のことは既う忘れて居る、といふほどに心細いことになつて居るのだ、その薄情な人間の充滿して居る中に、五十年も経つた昔を忘れず、恩といへば恩、知らぬといへばそれでも濟むほどの微細なことを、自ら恩に着て、その遺族に叩頭して謝した、といふ、斯ういふ美談は、今の所謂上流社會に多く見ることの出来ないことだ、侯に對する平生の非難と、この一事と、餘りに違ひ過ぎて居るではないか、要するに侯は、情の人であるといふことが、今度の一事で、充分に證據立てられたのである、併し之れと同じやうなことは未だ在るのだ、それは追々に述べることに爲る。

別府潜伏中のことを述べるには、袖付橋の遺難から始めるのが順序である、則ち侯の顔に大きな疵がある、その由來から述べて、別府入りになるのが物語りの順序である、事は侯の一身についてだが舞臺は幕末の長防史の半面であるから、興味は頗る深いものがあらう。

△外船砲撃と交渉

毛利の藩論は攘夷であつたが、果して精神からの攘夷であつたか何うかは、まさに疑問である、想ふに、關ヶ原の失敗者たる毛利は、假りにこの問題を捉へて幕府を苦めやうと仕たので、之れを以て飽迄も、日本の國是と仕やう坏、そんなことは考へたのではなからうが、兎に角表面からいへば毛利は攘夷論の間屋であつて、當時の桂小五郎(孝丸)が京都に詰切で、朝廷の方を巧く取込んで居たのであつた。

朝廷の御真意は、固より攘夷論であるに由つて、毛利の入説は壺へはまつて來たのだ、同時に幕府の方では、安政條約の御勅許を願つて來た、それを遂げ爲せては、今迄の苦心が何の甲斐もないといふ所から、この時の毛利の活動は、實に目覺しい者であつた、初めから資本をかけて公卿を抑へてゐるのだから、其連中の働きも在て、終に毛利の思ひ通り、攘夷の内勅が、二十四藩に對して下ることになつた、攘夷と開港の兩立する筈はないから、この内勅の下つた以上、開港の條約は認められないことになるのだ。

その結果として、文久三年五月十一日に、下之關を通過する外國の商船を砲撃した、思へば無法なことを仕たもので、英米佛蘭の四ヶ國の商船が、條約に基づいて貿易に來た、それを何等の掛合もなく、

不意討に砲撃したのである、さア夷人が承知しない、横濱に公使が集つて相談の上、幕府へ嚴重の談判に及ぶと、幕府の答辯が。

『そりや、毛利藩の致方が可くない、併し、一應は毛利へ對して掛合つて呉れ、その上で、毛利が何と申すか、その答辯の次第に由つては、當方からも談判して、相當の處置をつけることに爲る』と、いふのであつた、未だ日本の國情に疎い時分のことであるから、公使は幕府の答辯に従つて、是れから毛利へ掛合に及んだ、所が、毛利の方では。

『砲撃したことが悪ければ、朝廷へ掛合つて貰ひ度い、我藩に於ては朝廷より申付けられて致した事だ、決して私しの宿意を以ての所以ではない、苟も勅命を奉じて致したことは、我藩に何等の責任もない』

といふ答辯であるから、朝廷へ照會に及ぶと、朝廷に於ては。

『日本の政治向は徳川に任せて在るから徳川へ掛合つて呉れ』

と答へて更に取合はない、これちや何時まで経つても結局の決きやうがない、此に於て、公使は本國政府へ報告して、その指揮を待つことになつた。

△毛利藩の應戰準備

四國の政府の間にも段々と相談があつて、終に毛利へ對して開戦と決した、斯ういふ風に、無法なことをいつて居るものには、兵力を以て相對するの外はないといふのだ、之れは無理もないことで、當時の事情から考へて、この外に執る可き道はなかつたらう。

文久を改元して、元治元年の夏になつてから、四國の聯合艦隊十八隻が、いよ／＼横濱へ乗り込んで来た、毛利へ對して開戦しやうといふのだ、然るに幕府が是れを視て黙つて居たのが面白いやないか、毛利藩では此報を得て砲臺の手入れを爲るやら、大砲を据付けるやら、さかんに應戦の準備に着手する、といふやうな譯で、今にも關門海峡には砲聲の轟かうといふ、この際に、英吉利から歸つて来たのが、伊藤俊輔と井上聞多の二人であつた。

その前年、即ち文久三年の春、毛利の世子長門守から、内命を受けて英國へ密航したのだ、この二人の外に、遠藤謹介山尾庸三野村彌吉(井上)も一途に行つたのだが、下之關で戦争が始まると聞いて、五人は相談の上で、伊藤井上の二人丈けが歸ることになつたのだ、それは藩侯に拜謁して開國の意見を述べて、この戦争の和睦を謀らう、といふ所から歸つて来たのであつた。

△世子侯の説諭

井上も伊藤も、最初は極端な攘夷論であつたから、随分思ひ切つた亂暴を働いて居る、横須賀の附

近に金澤といふ土地が在つて、却々景色の美しい所から、横濱の夷人が、土曜日から日曜日へかけて、多くは金澤に遊んで居たものだ、是れを襲撃して大に攘夷派の意氣を示さう、といふことになつて、高杉晋作久坂玄瑞寺島忠三郎等を始めとして、井上聞多も無論その一人であつたが、(この事件には伊相談が悉皆出来て、愈々押出すことになつた時、之れを土州の武市半平太に謀つたのが失策であつた)武市は固より攘夷派であるから、立ちに賛成して共に事を爲すことにはなつたが、武市は是れを山内容堂の御側用人小南五郎右衛門といふ人に、漏らしたのだ、所が、この人から容堂侯に申上げた、侯は當時の諸侯中に於て、最も賢明なる御方であつたから、『それは一大事ぢや、放棄しては置けぬ』とあつて、早速毛利侯へ此事を知らせた。

この時は三條實美姉小路公知の兩卿が勅使として江戸に来て居られた際で、攘夷論の最も旺盛な時代であつた、されば毛利侯も藩士の舉動については些の油断もなく、充分に注意して居られたのであるが、今ま山内侯からの知らせを得て、始めて知つた藩士の暴舉、すぐに容子を捜らせると、その連中は、既う藩邸には居らなかつた、さア斯うなると一刻も猶豫はならない、世子長門守定廣(元)侯は、唯單騎で鍛冶橋の藩邸を乗出した、根來上總寺内外記山縣半藏(幾)の三名も、跡から續いて馬を煽りつ駆け出す、品川も過ぎて鈴ヶ森を背後に、蒲田の邊まで来ると、その一列に逐つた其所で梅園の中へ引入れて、世子侯から切に異見をされたので、終に不得止この事は思ひ止まることになつた、

井上の如きは、神奈川迄先乗を仕て居たのを、引戻された上に中止の御沙汰であつたから、大不平で却々承知を仕なかつた、それを世子侯から懇々の御説諭。
『お前達の決心は實に立派な者であるが今は其機會でない、實行して可い時分には、余が第一に始める、その時こそ、お前等を頼みとするのちや』
と、一ぱい浴びせかけられたので、高杉と井上が、一番先きに泣き出して、この事は結局はついたのである。

△藩論改新の壯圖

その歳の十二月十二日、この連中が、高輪御殿山の英國公使館を焼討したのだ、これには伊藤俊輔も關係があつた、閣老の安藤對馬守が、幕府の御用金を以て、各國の公使館を造營にかゝつて、第一に出来上つたのが、英國公使館であつた、それを焼討して、一と晩に灰と仕て了つたのである。
そのうちの一人、山尾庸三が今では子爵になつて、御殿山全體の地主になつて居る、文久の昔に焼いて置いて、明治の世に地主となる、思へば面白いことだ。
その他、此連中の暴れ廻つたことは、尋常でなかつたが、伊藤と井上は、英國へ密航して倫敦生活を、半歳餘りつゞけて見ると、今迄の攘夷論は實に愚なものであつた、といふことが解つて来て、可

笑しいやうな氣耻かしい様な、何ともいへぬ悔恨の念に驅られて、何時か知らず、今でいふ所のハイカラになつて了つた。

折柄、下の關の戦争が始まると、聞いたので、いよく大決心を以て、日本へ歸つて来たのであつた、當時のことであるから、夷國へ密航したことが知れたら、重ければ縛首で軽くも切腹である、それを覺悟で歸朝したのは、藩侯へ拜謁して世界の状態を物語り、攘夷の思想の根本から間違つてゐるといふことを申上げて、藩論を開國に傾かせ、同時に四ヶ國との談判を引受け、而して戦争にさせまいといふ覺悟なのだから、この時の兩人の意氣込は、實に素晴らしいものであつた。

△由縁多き姫島

英國密航の歸朝者としては、幕府へ對して憚る所もあり、藩へ對しても大手を揮つて歸ることの出来ぬ身の上である、三百里の長い道中を何うして歸つたものか、殊に途中で逡巡して居るうちに、戦争の方が始まつた日には、何の爲めに態々歸つて来たのか、その趣意さへ消へて了う道理で、是れについては、伊藤も井上も、尠なからぬ苦勞が在つたのだ、然るに幸ひにも英吉利公使のオールコックが、和睦を謀る爲めの歸朝と聞いて、頗る同情した結果、終に軍艦を以て送つて呉れる、といふことになつたのである、が、それについて、第一に困つたのは、軍艦を那邊へ着けるか、といふことで

あつて、その場所を選ぶについての相談が、豊後の姫島といふことに決したのである。
この姫島は幕末史については、何うしても缺くことの出来ない、深い由縁を有つて居る、この事件の關係と、猶う一つが、高杉晋作を隠匿した博多の野村望東尼が、その罪に由つて流されたのが、矢張り姫島で有つた事と、幕末の長防史を彩る可き、二つの事件に關係のある島で、近頃になつてから、有志の者が、是等についての記念碑を建てる計畫を仕て居るさうである。

却説、姫島へ着いた二人は、すぐに小舟を雇ふて向岸へ漕付けた、其處は周防の富海といふ土地で、現時の停車場の在る所だ、それより微行して三田尻へ出たが、山口へ行くのには關所も在るから、この儘では通過することが出来ない、幸ひ井上が、代官の湯川平馬と謂ふ人と、特別に懇意に仕て居たので、この人を尋ねて、事情を打明けて頼み込んだ、是非山口まで無事に入られるやう盡力を頼むといふのであつた、湯川も迷惑だとは思つたが、其所が武士の交際で、無下に謝絶もされず、湯川は不得止、二人の頼みを引受けて呉れた。

△攘夷不可の辯論

毛利藩の城下は、萩に定つて居るのだが、萩は長防二州の首府としては、餘りに僻在つて居るので、山口の方へ御殿をつくつて、政治向のことは多くは山口で決するやうに仕て居た、世子長門守侯も當

時山口に居られたのである、井上の親戚に萬代利助といふものがあつて、此家へ一時落つて、それから世子様へ拜謁を願つて出るので、普通のことでは至難しい、何うせ人手を借りなければならぬのだ、折柄、米國へ幕使の御供を仕て歸つて來たばかりの、杉徳輔(孫七)が居たのは此上もない好都合で、而かも杉が井上の親戚であつた杯は、實に二人の爲めには僥倖であつた。

杉の盡力で、直目附の毛利登人が、二人の爲めに心配して呉れることになつて漸く世子様へ拜謁の儀は許された、併し、それは井上二人丈許されたので、井上は必死の智辯を揮つて世界の太勢を説いた、攘夷論の愚説にして取るに足らざること、攘夷は決して行はれざること、その他、自分の見聞したことに意見を添へて開戦の不可を述べたが、このことは終に開流しにされて、戦争は飽迄も致すといふことになつた。

△藩論又一變

藩論の斯く決する以上は、もはや致方がないから、その旨を、姫島沖で待つて居る、軍艦へ通告しなければならぬ、横濱でオールコックに向つて、立派に引受けた言責に對しても、頗る面目の悪いことではあるが、今に至つては何うも仕やうがない、黙まつて放棄して置くことは無論出来ないのだから、二人は耻を忘れて、藩論の開戦に決した旨を答へたので、軍艦は直ぐに横濱へ引返して了つた、さア

斯うなれば戦争になるの外はないのだ。

何うせ開戦になつても、毛利の方は負けるに決まつて居るから、復び和議を講ずる時は来るに違ひない、その際になつて、自分等が居らなかつたら、到底その運びはつくまいから、兎に角、一時身をかかして、それは待たうとなつた、同時に起つたのが、京都九門の戦闘で、久阪玄瑞寺島忠三郎久江九市來鳥又兵衛真木和泉等の傑物が、枕を並べて討死する、その上に、毛利は朝敵の汚名を受けることになつた、之れが爲めに藩論は又た一變して、伊藤井上の活動を要することになるのだ。

△會薩の聯合成る

前へにも述べた通り、文久二年から三年へ跨けて、毛利藩が京都に於ける勢力は、實に素晴らしいものであつた、朝廷のことは手一ぱいに掻廻して居たもので、桂小五郎の最も全盛を極めたのが、その時代であつた、前には大原三位重徳卿、後には三條中納言實美姉小路少將公知の兩卿が、關東へ勅使として下向し、將軍を苦たり、幕府を困らせたり、攘夷の朝旨を楯にして、様々の手段を廻らした、それは皆な桂の智囊から割出したことで、之れが爲めに毛利藩の朝廷に於ける信用といふものが、非常に重きを爲したものである。

然るに、この勅使一條については、薩藩の島津久光侯も、毛利侯に劣らぬ働きを致しては居つたが

京都に於ての勢力が遠く毛利藩に及ばなかつたので、何日も爲ることが後手になつて、到底比べ物にはならなかつた、疇癖の強い久光は、終に事に託して薩摩へ引上げて了つたから、毛利は倍々羽振が良くなるばかりであつた。

京都の薩邸を預つて居たのが、奈良崎喜八郎(繁)と高崎佐太郎(正風)の兩人である、如何にも毛利の我儘が癪に觸つて堪まらない、何とかして蹴落して呉れやう、とは思ふが、更に手の出しやうもなく残念ながら其爲すに任せて置いた、諺に待てば海路の日和といふことがある、その待つ甲斐の在つて、嬉しい日和が漸く來た、といふものは、薩藩と同じ思ひの會津藩が、是れも毛利に對して、不平満々で居るけれども何としても乗す可き機會の無いので、弱り切つて居たのだ、この同じ思ひの同じ境遇の二藩は、何時とはなしに漸々接近して來て、終には相携へて毛利藩に衝らう、といふ約束が出来たのである。

勤王攘夷の薩藩と、佐幕開港の會津藩と、それが聯合の出來たといふのも、單へに毛利が憎いから、何とかして之れを倒し度いの一念からであつた、會津藩の代表者ともいふ可き、秋月悒次郎と廣澤富五郎の兩人が、また不思議の才識を有つて居て、巧みに薩藩の奈良原高崎を説きつけ、此に會薩の聯合は成立つたのである。

△毛利藩京都を退く

實に油断は大敵、桂ほどの才物が、此秘密を些しも氣がつかずに居た、京都の事は自分の心一つで決まる、陪臣の身を以て朝廷の御沙汰に迄立入るといふ、絶大の勢力を握つて居るのだ、那處に何ういふ鼠が、その隙を窺つて居るか解からない、其處に心の注かぬ桂でもなかつたのだらうが、未だ漸く廿六か七の壯年で、この位地に立つたので、幾分の慢心もあつたのだらう、人間といふ奴は少しも慢心したら最早駄目なものだ、一寸前は闇になるから、その隙へ魔の神が飛込んで來るのだ。

只ツた一晚に、朝廷の形勢は變つて、會薩の二藩が毛利に代つて、九門の堅守は申す迄もなく、内外の事すべて二藩の心の儘まになつた、三條實美東久世通禧壬生基修西三條季知錦小路頼徳四條隆調澤主水正の七卿は、毛利派の公卿であつたから、官位を褫奪れて謹慎を命せられ、毛利大膳太夫は禁裡守護職を罷免されるといふ騒ぎで、洛の内外は非常の混雜を極めた。

事が餘りに急であつたのと、朝廷の御沙汰が峻酷ざたのとで、一時は大變にもならう、としたのを、桂と吉川監物が、頻りに一同を宥めて、至極靜穩に藩臣を率ゐて、國元へ引上げて了つた、三條以下の七卿も、この時に京都を立退いて、長州へ落延びたのであつた。

この事變について、毛利藩では何と仕ても不平に堪へられない、朝廷の御沙汰は一つとして背いた

ことなく、今日迄の勤勞は尋常でない、それを何の罪もなきに、此御處分は甚だ其意を得ない、是れといふも畢竟は、會薩二藩の爲す所である、この儘まに引込んで、毛利藩の冤罪は何時解けるか知れぬ、且は天下の御爲にもならぬから、寧ろ京都へ乗込んで哀訴嘆願に及ばうといふことになつた。

△長藩歎願の趣旨

表面からいへば、朝廷の御沙汰で止むを得ないやうなもの、その實は、會薩二藩の密計が成て、事の此に及だものであるから、毛利藩としては何うも黙つて居ることが出來ない、殊に、三條以下の七卿が、その捲添を喰つて、今日の身上になつたについては、飽迄毛利藩が脊負て立たねばならぬのだ、單に御世話を爲る、といふ丈では、その義務を果したものはいへない、假令その官位こそ舊の通りにならずとも、せめては京都の住居丈は許して戴き度い、之には毛利藩へ對して、何とか寛大の御沙汰を願ひ度いものだ、仰も元就以來、勤王精忠の家柄として、朝廷よりも特別の御待遇を受けて居たのだ、加之らす近年に至つて朝廷より屢次の御内用、何日として御斷り申上げたことはない、御沙汰の都度に必ず御用を達して居る、その攘夷についても、諸藩の爲し得ざることも、忍んで成して居るのだ、御賞の御沙汰こそあつて然る可きに、却つて何等の御取糺もなく、突然この度の御沙汰は、如何にも其意を得ない所である、依つて、是等の事情を具申し、勅勘の御宥恕を嘆願に及ばうといふの

が、愈よ決まつたので、屈強の藩士を選抜して國老の福原越後益田彈正國司信濃の三名が之れを率ひて上京といふことになつた。

△武裝的入京

朝廷へ歎願を致すといふ、その裏面には、會薩二藩の排斥が、主なる目的となつて居たのだ、されば二藩に於ても、充分に準備を整へて、その妨害を爲るに違ひない、或は入京するのさへ拒まれるかも知れんから、それに對する覺悟も必要とあつて、久阪玄瑞寺島忠三郎入江九市來島又兵衛等の勇士が、四百餘名の藩士を指揮して、三國老の護衛を爲ることになつた、銃砲武器の準備を仕ての上京だから、哀訴嘆願も斯うなると、大層威勢のよいものだ。
久阪は松陰門下の俊才で、高杉晋作と併び稱された人物、強いことは無論であつたが、その強いうちに優しい雅た所のあつた、といふ立派の武士である。

龍田川無理に渡れば紅葉が散るし

渡らにや聞へぬ鹿のこゑ

この俗語は、久阪の作つたもので、その當時の志士の境遇を詠むたものだ。

今日も亦知らぬ露の生命もて

千歳を照らす月を見るかな

それとして咏むたのではなかつたが、この歌は最後のもので、自然と辭世の咏になつたのである。

寺島忠三郎は男爵寺島秋介の兄、入江九市は子爵野村靖の兄である、來島又兵衛の強かつたことは、また格別であつた、江戸藩邸の御留守居も勤めたことがある人で、斯ういふ人物が、枕を並べて此事變の爲めに死んだのは、實に惜む可きことである。

眞木和泉守は、有馬の水天宮の神官であつた人だが、夙に勤王の志を抱いて、東西に放浪した末、桂と深く交はつて今は毛利藩の客分、その縁故で、此同勢のうちに加はり、終に潔い討死を遂げたのである。

△早馬の注進

この連中が長門を出發して、既う着京したらうと思ふ頃、世子の長門守は是れも充分の支度を整へて、上京の途についた、三國老が入京しても、矢張り自分が居なければ、事の運びが思ふやうには行かぬといふので、さては、御自身の出馬と相成つたのであつた。

備後の尾之道まで来て、降雨の爲め一日の御滞在となつた、折柄、京都より早馬の注進、その述べるところに由ると。

『三國老の伏見へ到着するや、入京差止めの御沙汰が下つた、兼ねて覺悟のことであるから、散々押問答の末、何としても御許しがない故、同勢を三手に分つて、入京の支度にかゝつたが、多分は開戦になるであらう』
とのことであるから、其處で、左右の老臣が評議にかゝつた所へ、またもや、早馬の注進が来た、今度は何であらうか。

△前後に敵を引受く

二番の早馬に續いて、三番四番の早馬が来た、いづれも敗報を齎して来たのである。
『會津薩摩の二藩を始め、佐幕の諸藩が充分に戦備を整へて、入京を拒むとあるに由り、我藩兵も其心構を以て總勢三手に分れて入京することに決したれば、此に於て、各所一時に開戦となり、蛤御門と堺町御門の戦鬪最も激しく、朝來呼吸をも入れずに攻め寄せる、新士の兵を打破り、鷹司關白の玄關までは進むだなれど、衆寡の勢ひは如何とも致し難く、哀れ、寺島久阪入江來島を始め、我藩の勇士は、枕を列べて討死仕り、三國老のみは僅かに身を以て逃れ、敗兵を集めて引上げの途につきました』
といふのであつた、引續き来る早馬の注進は、その口上振にこそ多少の相違はあるが、敗北して三國

老の逃げ歸るといふ、それに違ひはないのだ、左様なつて見ると、長門守の上京も無用といふことになり、それは可いとしても、此に困つたことは必ず今度の一條から徳川幕府は好機失ふ可からず、といふ勢ひで、朝敵とか何とか、動きの取れない悪名をつけて、責めつけるに違ひない、場合によつては、之れが爲め一戦を試むることにもならう、然るに、下之關へは英米佛蘭の四國が、十八隻の軍艦を以て攻めに来る、それは既う定まつて居て、今日にも始まるか知れないのだ、この際に、朝敵呼はりで幕府から押して來られては、前後一時の戦鬪では、如何に武門の名家として誇つて居る毛利藩でも左様はついくものでない、これは何れか一方と和睦して、戦鬪を一つに仕て了はねば、とても遣切れないといふことになつて、さて何方と和睦しやうか、それについて、またもや一揉あつた末、兎に角、三田尻まで引上げやうとなつた。

三田尻の宮市の天満宮、これは評判のものだが、伊藤公の死に由つて、一層世間に知られた、それは公が、幼少の時、この天満宮の祠官に親戚があつて、手習ひの世話を受けた、といふことが知れたので、土地丈に知られた天満宮も、今では世界に知れ渡つて居るのだ、その直ぐ隣に大きな寺が在る、此寺へ一先づ引上げて来て、再び相談になつた結局が。

『夷人の方と和睦するのが、順當である』といふことになつた、その次第は
『徳川との争ひは、いづれが敗けても、同じ國民の間のことだが、夷人は左様參らぬ、敗れば國土を

奪れて了うのだから、先づ夷人の方を和睦して、それから徐ろに徳川の方へかゝるのが、最上策である』
と、虫のいゝことを考へて、夷人へ和議を申込むことに決したのである。

△井侯三田尻に赴く

さて、それは可いとしても、夷人へ此事を申込むについては、第一に伊藤井上の必要がある、所が、先日兩人からの申出を拒むだ後は、兩人の行衛が不明ない、之れは何としたものかと、一同に困つて居ると、幸ひにも杉徳輔が、少し心掛りがあるから尋ねて見やうといふので、それでは杉に頼むとなつた、杉は之れから馬に乗つて、萩の城下を指して飛ぶが如くに駆けつけた。
伊藤井上の兩人は、英國から歸朝の目的が間違つたのみならず、今は一身の置場にさへ困つて、萩の山中へ匿れて居るのだ、併し、杉一人丈けには、その場所を明示してある、萬一和議といふやうな時には、自分等が居なければ、とても駄目なのであるから、杉が駆けつけたら、直ぐに出かける約束が出来て居たのだ。
待つ身になると長いもので、毎日のやうに、頸を延ばして何とか沙汰があるだらうと、そればかりを待つて居る、所へ杉が駆けつけて、始終の物語を仕た。

『今度は下相談のやうなものであるから、井上一人丈けに御沙汰があつたのだ』
といふ、これには少し異見もあつたが、マア兎に角、行つて見やうといふことになる、井上は杉に伴れられて、三田尻へ出かけた。

△藩中でも評判の男

松島剛造山田右衛門を初め、家臣の銘々、いづれも御前に打揃ふて、今が評議の眞最中である。

『ハッ、申上げまする』

『何事か』

『杉徳輔殿、井上聞多召連れしました』

『左様か』

執次の役から、順に申上げる、長門守は。

『是れへ通せ』

『ハッ………』

やがて、杉に伴れられて、井上は御前へ出て遙かの下席に平伏した。

聞多の父は五郎三郎と謂ふて、長男が幾太郎、その幾太郎の子が、現時の井上家の嗣子勝之助、そ

の次ぎが伊藤家の嗣子博邦である、されば今日では井上伊藤兩家は兄弟の關係になつて居るのだ、聞多の家系は、毛利の家臣でも譜代格で、食祿は三百石であつたが、却々幅の利いた方であるが、聞多は長く君側を勤めて居て、世子とは御馴染であつた、洋行前に志路といふ家へ養子にやられて居て、其姓を冒して居たのだが、國禁を犯して密航であるから萬一のことでも起つて、養家へ患を及ぼしては相濟まぬ、といふ考へで、洋行の際自分の方から離別を申込んで置いたので、歸朝の後には、矢張り舊姓の井上を稱して居たのである、藩中でも評判の男だつたが、例の疝癩と剛情動もすれば、喧嘩腰でかゝるといふ、それが多くの人に憎まれる原因になつて、殊に、攘夷思想の旺盛な時代に、夷人の國へ渡つて、頭髮まで夷人と同じやうに剪つて來た、といふのが、聞多を憎む情の一段と深くなつて、國賊の如く思つて居るものもあるのだ、世子の御沙汰に由つて、この席へ招いたのについても甚だ不快に思ふものが多かつた、けれど何分にも、夷人を對手に和議の掛合、これには聞多を待つの外致方がないので、じつと胸を押へて居るのだ。

△重要會議中に居眠

夷人へ掛合を始めるに就て、一番に恐ろしいのは、此方から和議の申込みを爲るのであるから、必ず何か要求をされるに違ひない、一切それを斷はるとなつたら、和議は破れるであらう、果して何ん

なことを申出るか、想像の上の水掛論に、時刻を移して居るのだ、末席に列んで居る聞多は、是等の議論が耳へはいらないのか、頻りに、コクリ／＼居眠りを仕て居るので、杉が袖を曳いては注意する、その容子を見て居た、重役の松島は。

「アイヤ、聞多殿……」

この松島は、毛利藩の海軍大臣ともいふ可き位地に在る人で、攘夷倒幕に就いては、充分盡力したものであつた、文久二年の正月十五日、閣老の安藤對馬守を、水戸の浪士が坂下見附に於て斬付けた、彼の事件は、桂小五郎と此人の計畫から、水戸浪士を煽動したのであつて、伊藤公は當時俊輔と謂ふて、その密謀の使役を仕て居たのだ、従つて松島は藩中の利物であつた。

△説出す一奇策

聞多は再度聲をかけられて、漸く眠りから覺めた、といふ體で、松島の方をデロリ、見た。

「聞多殿、些と御尋ねを致し度い」

「何事で御座るか」

「只今も聞及んだであらうが、夷人と和議を謀るについては、如何様致して可いか、また夷人方に於て、如何なる難題を申出づるか、それ等について、御手前の考へもあらば、承はり度く思ふが、何う

「であらう」
洋行歸りの聞多が、果して何んなことをいふか、定めて立派な意見を述べるであらう、と何れも耳を傾けて居ると、聞多は如何にも無造作に。

「意見杯は更に御座りませぬ」

と、答へて頬の邊りには冷笑の皺を寄せて居る、その態の憎々しいこと、殴りつけ度いほどである、松島は些さか顔の色を變へて、ぐツと膝を進めた。

△ 翻弄された重役

聞多は豫め覺悟して、松島へ愛嬌の無い返辭を仕たのだから、松島が顔色變へて詰寄つても、一向平氣でケロンと仕て居る、松島は少し焦込むで、その調子も荒々しい。

「夷人へ和議を申込むについて、お手前の考へが無いと申さるゝか」

「左様……」

「然らば、何故に此席へは參られたか」

「君命に由て參りました」

「何御用と御座つて……」

「夷人へ和議についての御用と承りました」

「然るに、考へが無いと言はれるは、如何なる次第か」

「これについては自分の所存も御座る、和議についての見込みも充分に御座ります、君命……」

御沙汰と御座りますれば、申上ぐる儀も御座る」

最前とは變つた、この答辭に松島も些さか力抜けの體で。

「ふふーむ、考へもあれば意見も御座るとか、然らば、それ承り度い」

「否、重役の方々へ申述ぶる意見といふは、さらに御座らぬ」

「何と申す……」

今度は聞多の方で膝を進めた、松島の蜂谷には、疝癢筋の太いのが五六本、何となく事は面倒になつて来た。

「自分等兩名が、危きを犯して態々歸國いたしたのは、何の爲めで御座らう、單へに祖先以來、永年の君恩に酬ひんが爲め、此處一時の御奉公と思ひたればこそ、然るに、彼れまで申上げたる意見も御採用なく、和議謝絶と有之り自分等は止むを得ず、夷人共へも其儀申渡したので御座る、今更に何の口實を以て夷人共と對談がなりまするか、それも君公より直接と御座りますれば格別、重役御方の御尋ねとありましては、一向に御答への致しやうも御座りませぬ」

「思ひ切つて能く是れ迄に極めつけたものだ、現今と違つて舊幕の其頃は、未だ士民の階級も甚太しく、同じ武士のうちでも、重役と平武士の間といふものは、實に懸隔の酷かつたものだ、聞多が松島に對する、この答へは生命の大切なものには、鳥渡言ひ出し兼るほどの痛罵である、それを平氣でスラスラと遣つて退ける、聞多の特色は其處に在つたのである。」

「重役には答へを爲ぬとか」

「左様……」

「そりや、私事の儀ぢや、今は御家一大事の場合、それを論ずるの際でなからう」

「その御家の一大事は誰れの醸したもので御座らう」

「や……」

「重役の御方が、藩政の執やう悪くして、此に至つたもので御座らう、我等不肖のものながら、御家を思ふ一念に至つては貴下にも譲らぬ覺悟ぢや、何故に先般和議について申上げた時、我等意見を御採用なされず、今日に相成つて、その御挨拶もなく、權柄盡くの御沙汰では、何と申上げやうも御座らぬ、重役の御方は、御先祖以來、高祿を戴いて居られるのぢや、御家を危きに引入るゝばかりが能でも御座るまい」

是れまでの痛罵を加へられては、松島も最早勘忍は相成らぬ、思はず膝を立直して。

「ふ、ふ、不埒千萬な、そ、そ、其雜言の舌の根、引き抜き呉るゝ、其所動くなッ」

「こりや面白い、御家の危急さへ救ひ得ぬ、重役の御手並拜見いたさう」

飽迄も輕侮めた口調は、松島の疔癩玉を破裂させて、今にも争鬭は起らんづ有様、之れを見て長門守は。

「控へろ、見苦しい」

鶴の一聲にも均しい、之れで双方控へた。

「途中の議にも相成るまい、一先づ山口へ立歸る、その上の事ぢや」

「ハッ」

此に於て供揃への支度が出来、山口指して歸つて來た。

△藩公直接の御沙汰

平生から重役の爲ることが癪に觸つて居た上に、今度のこと聞多の不平は一層酷くなつたのだ、京都の政變は暫らく措いて、夷人と和議の一條は、無論容れられると思つて居たのに、却つて拒まれたのみならず、之れが爲めに、自分等の身を置く場所もないといふほどの、迫害を受けたのであるから、非常に不快の念を有つて居たのだ、所へ、和議についての迎ひが來た、喜んで御前へ出ると、重

役の權柄に、例の疝癰の蟲が収まらず、思ひ切つて突ツかゝつて見たのだ、何も君命に背くの意は少しも無いのである。

山口の城内には大殿も来て居られて、聞多は御前へ呼出され殿様から直接に御沙汰を受けた、是れは喜んで御受を申上げる、その時に、聞多から願ひを出して、伊藤俊輔も御目見得が叶うやうになつて、萬事は兩名に頼む、との御意であつた、伊藤は元來が百姓の出身である、祖先は何物であらうとも、生れた家が百姓であつて、武家ではなかつた、父の信吉が伊藤といふ足輕の家へ、夫婦養子に入つて、その時の連子がこの俊輔であつた、武家時代の足輕は、金槌の川流れて頭の上る瀬がなかつたものだ、けれども俊輔が偉かつたから、安政の歳に士分に引上げられた、併し士分にはなつたが、御目見得以下だから、何事についても頭が上らない、今のことに比べると、軍曹と曹長とかいふもので、兵士に對しては幅も利くが、固より將校ではないのだから、本當の士とはいへない、殊に、昔の御目見得以下は情けないもので、殿様の前へ出て、御挨拶さへ申上げることが出来ないのだ、それが兎に角、聞多の願ひで叶うやうになつたのであるから、俊輔の喜びは尋常でなかつた。
この二人の外に、杉徳輔と毛利登人の兩名が、その使者を申付けられた、其處で四人は、急ぎ急いで下の關へ乗込んで来た。

△各隊勇士の意氣

下之關には奇兵隊を始め、諸隊の兵士が、澤山に詰合つて、彼れから環の浦前田三田尻の方面へかけて、砲臺を築き陣を張り、それはく豪い威勢で控へて居る、奇兵隊には赤根武人山縣狂介(有朋)、御楯隊には山田市の丞(顯義)、その他佐世八十郎(前原一誠)も居れば、野村和作(靖)も居る、聞多の一行が下之關へ着くと、斯ういふ連中が、各所から集つて來て騒ぎ立てるのを、聞多は徐かに制して、『君命に由つて和議の爲に參つたのだ』と、告げたから一同は承知を仕ない。
『そりやア怪しからんことだ、未だ夷人の首一も斬らないうちに、和睦を爲るとは甚だ其の意を得ない、兎に角、一戦を開いた上ならば格別、今日に相成つて、當方より和睦を申込むやうのことがあつては、武門の耻辱此上もない、我等は何と仕てもその命には従はぬ』
といふて頑張る、如何に説き諭しても承知を仕ない。
『宜しい、それでは勝手に仕る、拙者には別に考へがある』
何んな考へか知らんが、聞多の舉動が穩かでないから。
『まア左様怒らんでも、相談の仕やうもあらう』

杉や伊藤が頻りに仲裁役を勤める、間多は仲裁がはいつたから、倍々怒つて。

『否、拙者は考へ通りに爲るから宜しい、捨て置いて呉れ』

『何う爲るつもりか』

『片ツ端から、打ち斬つて了うつもりだ』

『ゑッ、ぶち斬る』

『苟も君命を蒙つて来た以上、我等は殿様名代ぢや、然るに、我等の申す所を用ゐぬとあつては、止むを得んから斬つて了う外はない』

その時分に、君命の一言は、實に大層なものであつた、この間多の怒鳴つた爲めに、漸く一同の不服も収まつた。

△萬事休矣愈々開戦

和睦に不平を唱へるものは漸く抑へつけて、是れから小舟に載つて、壇の浦の海峡へ出て来た、その刹那に、前田の砲臺から敵艦へ、一發の砲聲、それと同時に、各砲臺より一齊に砲撃を始めた、敵艦も亦た之れに應砲して、海と陸との戦闘は開られ、砲煙の爲め彼の邊の海岸は全く包まれて仕舞つた、伊藤や井上は、事の意外に驚ろいて、頻りに白扇を揮つて之れを制さう、としたけれど、砲撃

は倍々はげしくなるばかりで、如何とも手のつけやうがない、船夫は縮み上つて、動もすれば水中へ飛込んで逃げようとする、もはや、敵艦へ乗付ける見込はないのだ、此に於て止むを得ず下之關へ引返した。

昔の戦争は今の戦争と異つて、何事にも不自由な時代のことであつたから、井上は各砲臺へ對して、暫時發砲することは相成らぬ、といふ旨を傳へる手續を仕立て、それから乗出したのであつたが、電信や電話のやうな便利なものがないので、厭でも馬でかけつける、舊式の陣中使番なるものが、幾組にも別れて飛び出した、それが間に合はないで、この開戦となつて了つたのである。

使者の一行は、かくて空しく山口へ引返して来た、御前へ罷出て事の始末を上申に及んだ、一同へ休息の御沙汰が下つて、さらに井上丈け御前へ召された。

『和議の運びの届かざりしは、眞に残念であるが、是れも成行にて致方がない、ついては此上何と致したものであらうか、其方所存もあらば申述べて見よ』

長門守の心配は、顔の色に現はれて居る、井上は、

『かく相成りました上は、極力戦ふの外御座りませぬ』

『而て、勝負の見込は何うちや』

『無論、敗北て御座りませう』

「何ッ、敗北とな」

△敗報踵を接して到る

敗北の豫言に無論とは、些さか心細い、長門守も不快に思つた、じつと井上の顔を睨んで居る、井上は恐れ氣もなく。

「敵味方が咫尺の間に迫つての、接戦と相成りましたら、勝敗の數、容易に斷じ難く存じますれど、海陸と立別れまして、砲戦ばかりとありましては、到底勝算は相立ちませぬ、その儀については先般歸國の砌り、委細申上げて御座ります、先づ此の度の一戦は、敗北と定まりました」

「ふーむ」

長門守は甚だ不服であるが、さればとて、必ず勝てるといふ確信もないのだ、夷國の事情を心得て居る、井上の説を信するの外はない、併し、武門の名家たる我藩のことであるから、豈夫井上の言ふ通りむざとは敗けも仕まい、といふ自惚も幾分は在る、折柄、バタ／＼と廊下に荒き足音が聞へた、やがて次の室で、

「ハッ、申上げまする」

御側執次のもものが、これを受けるのだ。

「何事で御座る」

「只今、前田の砲臺、敵の爲に破られましたとの御注進で御座ります」

「ふーむ」

遙かに之れを耳に仕た長門守は、不味い顔を仕て居られる。

續いて、またの注進、今度は壇の浦の砲臺が破れた、とあるので、我慢の強い長門守も黙つて下を向いて居る、井上は冷笑を浮べて。

「如何に御座ります、私の見込は……」

「余が悪かつた」

「御解り相成りましたか」

「うむ」

「この上は、御家の瑕瑾に相成りませぬやう、最後の一策……」

「そりや、何ういふ策か」

井上は嚴と世子の御顔を見上げた。

「事茲に致りましたる上は、最早致方も御座りますまい、が然し、戦ひは味方の不利で御座りまする

に依つて、遠からず當御城下へも敵兵は押寄せらるものと相考へまする、夫に付て小臣へ一大隊の兵を御授けを願ひたい、然すれば小郡に陣を構へ、敵兵の來襲を待つて、一戦さ仕つりまする、遠く離れての砲戦は、假令及ばずとも、陸上の接戦と相成りましたら、多年鍛へ上げし日本固有の武術に依つて、一度は大勝利を得ること必定と存じまする、其の勝利を得て敵兵の怯む隙に乗じて和議の申込みを致しましたならば、確かに和議は行はれる事と相考へまする』

三四

熱々聽いて居た長門守は。

『宜し、萬事に其方に任せる、一大隊の兵を小郡に引連れて參る事は、予に於て確と許す、其方指揮を取つて事の運びを付けて宜からう』

『夫に付きましてお願ひが御座ります、餘の儀でも御座りませぬが、此の兵を指揮する者を一名御推舉申しまするに依つて、御採用願ひ上げまする』

長門守は怪訝な顔を仕て。

『は、ア、其方自から指揮を執るのではないか』

『否、小官には其のお役は勤まりませぬ』

『左様か、予は其方自から指揮を執るものと心得て居つた、而て何者を推舉すると申すか』

『高杉晋作に御座りまする』

『いや、そりや成らぬ』

『何故で御座りますか』

『其方英吉利へ參つて不在中ゆゑ能くは存じまいが、彼は藩法を紊り、予の命に背いたる廉に依つて今入牢中である、左様の者を以て指揮を執らするといふ譯にも相成らぬぞ』

『仰せには御座りますが、今我藩の危急に關はる場合、左様な末節を論じて居る時ではありますまいかと存じまする、殊に高杉に犯せる罪がありましたも、夫は君命に依りまして謹慎を命せられたるもの、従つて君命に依つて其の罪を許すといふ事は、別に難き事でもないやうに心得まする』

言出したら利かぬ氣の井上が、飽までも高杉を押立てやうといふのである。

『否、夫は何と申しても相成らぬ、左様な事を致しては、之より先の賞罰が相立たぬ、他に然るべき者もあらうに依つて、他の者に命じたら何うぢや』

『否、此外には此お役の勤まりまする者は御座りませぬ』

遂に毛利侯も家が潰れるか立つかの境であるから、我を折つて萬事井上に任す事にして、其日は夫で相濟んだ。

△侯の友誼と高杉

前回に述べた京都の政變といふのが、文久三年八月十八日のことで、下之關に於て、夷國船へ砲撃を加へたのは、その歳の五月十一日である、それから、九門の戦ひで長州兵の破れたのが、元治元年七月十九日のことであつた、僅かに二年越して正味一年の間のことだが、毛利藩の之れが爲めに苦心したことは、實に非常なものであつた。

高杉は先きに、藩命に抗して脱藩したり、その他、反上隨意の處行が多く、それが爲めに罪を得て、親戚の大澤といふものゝ家に、禁錮の身になつて居たのだ、京都の政變にも九門の戦ひにも、また下之關の攘夷實行にも、更に關係がなかつたのである、只だ牢のうちで空しく此大切な機会を逸して、徒らに腕を撫しては天を仰いで嘆息するばかりであつた。

所へ、突然藩命が下つて、牢から赦されると、小郡の陣屋へ詰める、との御沙汰であるから、少し變だとは思つたが、快く御請けを仕て、小郡へ來ると井上が待つて居て、始終のことを物語る、それを聞いたので、始めて顛末が判明つた何日に變らぬ井上の友誼には、高杉も感謝の外はなかつた。

二日餘り經つと、重役の山田右衛門といふ人が訪ねて來た。

「この所に於て、敵兵の上陸を待ち、一戦の上にて和議のつもりであつたが、既に征長の幕軍が來るといふことであるから、一刻も速く夷人とは和睦いたした方が可いと思ふ、それについては聞多を召連れ參れとの御諚であるに由つて、拙者その使命を請けて推參いたした、早速同道して貰ひ度

い』との旨を傳へる、之れを聞いて居た井上は、何を思つたか不快の顔色で、すつと立ち上ると、その儘ま次の室へはいつて了つた、山田も井上の容子が變であつたから、密と立つて來て襖の間から窺いて見ると、井上が今ま將さに切腹を仕やう、といふ場合である故、驚いて駆け込んだ。

「これッ、井上、何を爲るか」

「切腹致すのぢや、其手を放して呉れ」

「いや、放すことはならぬ、全體何故の切腹か、拙者が傳へた君命に對しては何の御答へも申上げず、拙者を待たせて置ての切腹は、如何にも其意を得ざる次第、何故の生害か、その理由を聞き度い」

△高杉が介錯しやう

折柄、高杉もはいつて來て、山田と共に一先づ切腹は押し止めた。

「聞多ッ、貴様は何で死ぬといふのか、己には其仔細の語れん筈もなからう、さア打明けて呉れ、何うぢや」

「實は山田氏から君命を傳へられて、俄かに死ぬ心になつたのぢや」

『ふふーむ、そりや何ういふ譯で……』
 『拙者と伊藤が、遙々英吉利から立ち歸つて御異見申上げて、和議を御勸申した時は飽迄も戦ふのぢや、との御沙汰で、終に開戦と相成つたのぢや、然るに今度は拙者の申上げた意見に御同意下されて、この陣屋を御預け下された、それから三日目の今日になると、またもや君命の御異變とあつて、この御迎を受けたのぢや、斯く君公の御思召の、朝に夕に變るやうなことでは、最早毛利の御家も是れ迄ぢや、前途のほども思ひやられる、寧ろ生きながら君家の滅亡を見るよりは、一步お先へ御免蒙つて、草葉の蔭の御先君に拜謁して、この現状を申上げるの覺悟で、切腹と決めたのぢや』
 慨然として語る聞多の意見に、山田も何と答へやうがない、全くそれに違ひないのだから、聞多の怒るのも無理はない、と思つて黙つて居る。
 『そりや面白い、己れも同意ぢや、さアはやく切れ、己れが介錯してやる』
 威勢よく高杉が立ち上つて、長い刀を抜きかけた。

△勝手に切腹は爲せぬ

藩主の意見が朝變善改では、何事にも充分の働きがならぬ、其處で鳥渡狂言を行つて見たのだ、何

も是れ丈けのことで切腹しやうといふ心はない、それを高杉が看破つて居ながら。
 『さア切腹を仕ろ、己が介錯を爲る』
 と、極めつけたので、流石の井上もギューと參つた、けれども、剛情と我慢の強い人のこととして。
 『宜しい、然らば美事に切腹するから、介錯は頼むぞ』
 前に在る短刀を再び取上げたので、山田は之れを見て驚いた。
 『まア、御待ちなさい、高杉氏何とかなるまいか』
 『井上が切腹するといふのは、熟々考へての上のことぢやらう、強ひて止るにも及ふまい、が併し、拙者にも少し考へがある、それを極めてから切腹させることに仕やう』
 『はア、そりや何ういふことか』
 『少々お待ち下され』
 高杉は井上の方へ直つた。
 『オイ、貴様何うしても死ぬか』
 『うむ』
 『左様か、實に立派な覺悟ぢや、武士は左様なけりやならぬ、が、貴様の死ぬ前に、己の軀を何とか處置して、それから潔く死んだら可からう』

「えッ、そりや何ういふことか」
 「己が牢へはいつて居たのを、無理に引出したのは全體誰れか、貴様ぢやないか、未だ己の罪は消えて居らんだ、牢から出させて、此陣屋を預けられても、己は君公に拜謁して御沙汰を受けたのぢやない、而て見れば、罪は未だ消えないが、上の都合で此陣屋を預けられたものだ、それを取計らつたのが、即ち貴様ぢやないか、然るに貴様は今立派に此場で切腹する、貴様の武士道は立つぢやらうが、跡に残された己は何うなる、そんな得手勝手な切腹は爲せられぬから、先づ其前に己の身の處置をつけて、それから死んだら可からう、さア何うぢや、その返事から聞かう」

△初一念を貫く分別

最初から留ると却つて剛情を募らせるし、理屈で頭から抑へつけるのも不可、井上の性質を能く知つて居るので、高杉の持ちかけやうが巧い、これには井上も我慢の角を折つて、何とも剛情の張やうがない、高杉は言を和らげて。
 「貴様と伊藤が、態々英吉利から歸つて來るのは、下之關一條を無事に治め度いと思つてぢやらう、今度の御沙汰は、その目的を果すには此上もない機會ぢやないか、そりや少し位自分の心に許さぬ所があつても、其處は君臣の間柄ぢや、家臣の方から負てかゝるのが、固より當然のことぢやな

いか、貴様が一人死んで伊藤は何うなるのぢや、まア今度は耐忍をして勤める丈けは勤め、最初の目的を遂げるのが、第一ぢやらうと思ふが、何うぢや」
 井上は黙まつて考へて居る、山田も高杉のいふたことを繰返して、頻りに切腹を留めるので、井上も終に屈して。

「イヤ、よく解つた、左様いふ話なら宜しい、是れから山口へ行かう」

「えッ、然らば同道下さるか」

「何うも仕方がない、併し、必ず御請を爲るか如何かは、豫め言ふことは出来ぬ」

未だ悉皆解けては居ない容子だが、山田は何でも伴れて行けば、自分の役が済むのだから、井上に威張られる位は何でもない。

「高杉、貴様も行くか」

「うむ、己も行く」

「それぢや一途に……」

「サア出かけやう」

三人は是から山口へ急ぐ、伊藤は山口に在つて、井上の來るのを待て居るのだ。

△武士道に内外なし

井上は山口へ着いてから、直ぐに殿様の御前へ出た、世子ばかりでなく、大殿も萩から来て居られて、種々と井上へ御頼みになつた、所が、井上は容易に引受けないうで、例の調子を以て頻りに殿様へ迫るのであつた。

『御沙汰に背く次第では御座りませぬが、這般の和議は、誠意誠心を以て致しまする和議か、それとも一時の權謀を以て致しまするの和議か、兩様のうち孰れに御座りまするか、豫め伺ひ置き度う存じまする』

長門守は熟と考へて居られたが。

『その議は、無論のこと一時の權謀に過ぎぬ、幕府との押合の定まる迄のことぢや』

『然らば、この御役は所請致し兼ねまする』

『そりや、何故か』

『先般歸國の砌り、我等の一存とは申し乍ら、和睦の儀引受けまして、一時にもせよ、戦争手控へ致させましたにも拘はらず、飽迄も開戦との御沙汰に、餘儀なく夷人へ其旨を通じまして、和談は手切れと相成りました、我等の心に偽りはなくとも、自然と夷人を欺きました外見に相成り居ります』

る、然るに、今又た一時の權謀にて和議を申込みますることは、如何に對手が夷國の人でありませうとも餘りに偽り多き御役にて、私に於ては御引受け仕り兼ねまする、武士道は實に自國のものばかりでなく、他國の人に對しても在らうかと存じまする』

何の恐れもなく判然と、御断りを申上げたので、長門守も烏渡行詰つたが。

『イヤ、其方申すは無理もない、固より予の心は其處に在るのぢや、が併し只今の場合、斯く申さずば藩臣の鎮撫がつかぬでう』

△君命より重きもの

流石は長門守、巧く切抜けやうと仕たのを、井上は透さず透究めた。

『猶ほ一應御伺ひ致しまする、愈よ和談の運びましたる場合に、朝廷より引續き開戦の御誼下りますやうのこと、萬一にも御座りましたら、その際は如何遊ばしまするか』

『朝命とあつては止むを得ぬ、和議も破るの外はあるまい』

『その御思召に依りますると、矢張り誠心誠意の和議では御座りませぬな』

『否、朝命は致方がない』

『たとへば、朝命で御座りませうとも、天下の御爲に相成らぬこと迄、御請致すには及びませぬまい、』

飽迄も諫争して臣民の誠を盡す可きものか、と心得まする』
是れで長門守は口を緘ちて了つた。

井上が何故斯んなに拗るのかといふに、是れ位に押付けて置ないと、またも思召の違つて、和談の最中に、妙なことを言はれると因るから、ぐつと突込んで置いたのだ、併し井上なればこそ殿様御前で、是れ迄に言張ることも出来たのである、大概のものに出来ることではない。

△交渉の適任者

大殿敬親公の御辭の在つたを幸ひに、井上も理屈を控へて、この御役を引受けることになつた、長門守も凹まされたが機嫌よく、彼是れと御沙汰を下される、相談は進んで、談判使節の任命のことになつた、普通のものでは到底駄目だ、井上伊藤は前面の行掛りから、正面に立たうといはぬ、人撰についての苦心は、兩公で於ても尋常でない。

『聞多、何うちや、其方見込みは……』

『相當のもの一人御座ります』

『そりや誰れか』

『宍戸東馬と申しますもの、元御當家の家臣、今は浪人の身の上、なれども斯様な談判事につきま

しては、恐らく此の上に出る者は御座りませう』

兩公は幾ら考へても思ひ出せない、宍戸東馬といふ名は、何うも聞いたことがないやうだ、兎に角、井上の保證が強いから、召んで見やうとなつた、井上は御前を引下つて、宍戸を迎にゆく。

△大役を引受けた武士

宍戸といふ姓は、毛利藩に澤山在る、家老の宍戸備前を始め、それからそれへと續く縁の宍戸家も少くないけれども、東馬といふものは餘り聞いたことがないから、井上が推挙するのに、豈夫空なものを申上げる筈もない、これほどの大役を引受けさせやう、といふのに、左様平凡なものでもなからう、それにしても、全然耳にしたことがないから、必ず小身者に相違がない、何んな男であらうかと、毛利公は不審の眉をよせて、聞多の來るを待つて居られる。

そのうちに、井上が東馬を引連れて來た、といふので、殿様は早速御出座になつて、遙かに下席を御覽になると、果然一人の武士を伴れて、井上が平伏して居る。

『おう、聞多か』

『ハッ』

『其者か、東馬と申すは……』

「左様に御座ります」

殿様が平伏して居る、その東馬なるものを熟々御覽になると、何となく見馴れて居る容姿だが、頭を下げて居るから分らない。

「東馬と申すか、苦しうない頭を上げい」

御辭に連れて静かに頭を上げた東馬、見れば高杉晋作である。

「やッ、其者は……」

聞多は俄かに口を挟れて。

「宍戸東馬に御座ります、御召に由つて罷出でました、新知御召抱の上、かねての大役仰付け下さり

まするならば、難有く存じまする」

晋作は今猶ほ御目通の叶はぬ身の上、宍戸東馬ならば何も差問へはないのだ、聞多は追に偉い所があつた、藩命に由つて罪を得て居るもの、それに此の大役は申付けられない、其處で鳥渡遺算段を仕て、人間の融通とは面白いじやないか、殿様も聞多の心が能く解つたので。

「うむ、此者が東馬か」

「御意に御座ります」

是れから改めて、和議の使節を命する旨の御沙汰が下る、高杉の東馬は。

「有難き御沙汰、謹んで御請け仕りまする」

「我藩の存廢に關する儀ぢや、その心得にて致せ」

「ハッ、不肖には候へ共、美事 夷人を説き伏せ、御家の耻辱に相成りまするやうの和議は、斷じて仕りませぬ故、御安心下さりまするやう」

「うむ、大丈夫の一言、予は其方よりの吉報を待つぞ」

「ハッ」

△唯一の頼みは通事

藩命に由つて處分された、その處分には多少の不服もあつて、幾分の怨みも有つて居たが、さて殿様から斯う言はれて見ると、そんなことは消へて了つて、只だ君命を辱め度くないの一念より外にはないのだ、晋作は難有涙に暮れて御前を退つた。

毛利主計といふ家老次席が、全權副使といふ格で同行することになつた、伊藤井上杉の三人が従

てゆくのである、晋作は一時家老格に取立てられて、是れは全權大使である。

伊藤井上は、事實に於ての仲介人で、殊には通事をも兼ねるのだが、この通事が頗る怪しいもので、とても満足のこととは出来ない、英吉利歸りの當時のハイカラではあつたが、七ヶ月や八ヶ月の倫敦住

ひに、何う勉強したからつて碌なことの出来る筈がない、それを唯一の頼みの通事なり仲介人であるから随分心細い次第だ、併しそんなことに少しの頓着もなく、この大役を引受けて、美事に遣り遂げる覺悟で居る、その元氣が實に偉いのだ、この元氣が何事にも必要なものであつて、大きなことでも小さなことでも、これ一つの働きて成敗が極まるのだ。
一行に先立つて、伊藤井上は伊吉利の軍艦へ乗付けた、是れは媾和の先觸れである、所が幸ひのことには、英吉利公使の書記サトーが乗込んで居た、この人には横濱以來、面識があつて極く親切な人であるから、二人も大層都合が好かつた、このサトーが後年に公使になつた、彼の人である。

△英軍艦へ烏帽子直垂

夷人の方では固より好む戦ひでない、毛利が理不盡なことをいふて、到底平和の解決は困難しいと見たから、其所で、止むを得ず開いた戦争だ、今ま伊藤井上の兩人が来て、是非和談に仕やうといふのに、何で反對する譯があらう、直ぐに休戦することになつて、談判開始といふ段取にまで運んだのである。

高杉は井上からの通知を得て、すぐに小舟で乗出した、その時の服装が面白い、烏帽子直垂で陣刀を帯して居るのだ、小舟の動揺と風の爲めに、冠つて居た風打帽子がヒラ／＼して、大きな袖が翻へ

手紙の件は、
高杉の件は、
伊藤井上の件は、
サトーの件は、
...

る、その容姿を英國の軍艦から、サトー書記と共に見て居た、伊藤井上は何だか可笑しくて堪まらなかつたといふことだ。
さて愈々談判の一段となる、無論のこと毛利の方には、何も要求す可きことはないのだ、開戦の責任は毛利に在るのだから、要求は夷人の方からである、その箇條は澤山に在つたが、主眼ともいふ可きものは、只だ三ヶ條である、第一が償金三百萬兩、第二が下之關を開放して互市場とせよ、といふので、第三が沿岸の砲臺を取毀つて大砲を引渡せ、とのことであつた。

△解らぬを承知で國體論

この談判について、高杉の人物の非凡なことが、立派に證據立てられて居る、それは何ういふことかといふに、高杉は英語が少しも解らない、伊藤井上とても解る人とはいへない、アイラズユーかサソニー位いが關の山だ、サトー書記が少し日本語を知つて居る、といふた所で、伊藤井上が英語を知つて居る丈けのものだ、殆んど談話の大部分は、形容話でお茶を濁すの外はなかつたのである、さればお互ひに解らずに了る話が多かつた、それを高杉が一向平氣で、相手に解らうが解るまひが、そんなことには頓着なく、抑も開國の歴史から始めて、日本の國體を説いたのは、普通の人間に出来ることではない、吾人が平生のことにしても左様だ話して居る對手が解らない奴ぢや、決して話の進むものでな

い、世間に若し豊者と話を爲る者があつたら、それは非凡な人間だ、高杉の對手に仕て居る夷人は、豊者も同じことで、日本語の解らないものだ、その人に對して、國常立尊から始めて、皇室と將軍家、將軍と諸侯との關係、それ等の事情を詳しく述べて、夷人の要求を一切拒絶したのだから、實に愉快ぢやないか。

△剛情の勝利

毛利が昨年五月、この海峡に於て、英米佛蘭の商船に砲撃を加へた、これは朝廷から攘夷の勅を受けて居る爲めであつて、その砲撃から起つた今度の戦争、之れについての責任は、毛利に一切無いのである、毛利は朝廷の家來であつて、その仰せには善悪を問はず従ふ可きものであるから、即ち勅によつて砲撃を致したのだ、それが不都合であれば、宜しく朝廷へ掛合ふ可き筈である、併し、朝廷は政治向きのこと一切を、徳川將軍に委ねてあるのだから、先づ以つて徳川將軍へ掛合つて、償金でも何んでも欲しいものを取つたら可からう、といふ理窟で押して行つたものだ、夷人の方でも、種々に争つて見たが、その時分には、未だ日本の國情が、左迄よく解かつて居なかつたから、畢竟は剛情で押の強いものが、何うか斯うか勝つのだ、夷人も終に高杉のいふ通りになつて、今一應は徳川へ掛合つて見ようといふことになつた。

△美事なる高杉の談判

第二の下之關の一條は、償金よりは一層むづかしかつた、けれども、高杉は同じ理窟を繰返した。『大名といふものは朝廷から土地を預つて居るのである、その土地を毛利丈の考へで、他の自由に爲せるといふことは出来ない、朝廷の御沙汰が下れば毛利に於て異論は唱へないから、是れも償金と同じやうに徳川へ掛合つて御覽なさい』といふのであつた、この押合は却々骨が折れたけれど、高杉は遂々突ツ張つて了つた、之れについて伊藤が大層な働きをした逸話がある。

△伊藤俊輔へ大命

談判は數日に涉つたのであるから、その間には藩主へ申上げて、御沙汰を待つといふやうなことも幾度か存つたのである、殊に、下之關の件については、伊藤が度々山口へ往復して居る、夷人の方でも他の條件よりか、下之關解放には随分力を入れての掛合であつたから、高杉が頑として拒むでは居るやうなもの、是れ丈は何うも破れまい、と思ふたこともあつたのだ、伊藤が御前へ出て始終の報告を仕た時分に。

『それほど至難かしく申すなら、彼の彦島を下之關に代へたら何うぢや、この事の爲めに和議の破れるも残念ぢやに由つて、彦島ならば本土と離れた、要が海中の一孤島に過ぎんのぢや、東馬にも聞多にも、左様申聞けて可からう』

との仰せがあつた。

當時の伊藤は、前回にも鳥渡いふた通りに藩主の前に於て、彼是れ意見がましいことを申述べる丈の格式がなかつたので、只々唯々として君命を奉ずるの外はないのだ、山口から引返へして來る途中で、伊藤は熟々と考へた。

『如何に君命があつたればとて、豈夫彦島を渡すことは出來ない、二千年來の獨立國、金甌無缺の國體へ疵をつけるやうなことは出來ぬ、彦島は渺たる一孤島ではあるが、日本の領土である、之れは夷人の手に委するとなれば、假し下之關でなくとも、理合は同じことである、たとへ一寸の土地と雖、夷人へ引渡すやうのことになれば、國辱此上もない、その國辱を我藩に於て醸したとあつては、武門の名折れである、こりや寧ろそのこと、君命を傳へず置き、この儘ま談判を進めるに限ざる』
と覺悟の臍を堅めて了つた、彼れ丈けになる人は、その時分から、普通の武士とは異つた所があつたものだ。

△斯の如き大功績ありや

高杉や井上は、左様いふことは知らないから、必死になつて談判する、伊藤は背後から煽り立てるのみか、君公は。

『土地は一坪といへど、夷人の自由には爲せられぬ』
と仰せられた旨を、偽り傳へたので、さア堪まらない、高杉等の鼻息は倍々荒くなつて、何うか斯うか、此の問題も幕府へ押付けて仕舞つたのは、その時代の事として考へれば只だ偉いといふの外はない。

伊藤公が七十年の生涯に於て、日本帝國へ對する功績の、是れ以上のものがあらうか、恐らくは有るまいと思ふ、何うですか、今日になつて考へて、彼の下之關海峡の咽喉を扼して居る彦島、それが英米佛蘭の共有地になつて居たら、果して何うであつたらうか、思へば怖ろしいことであつた、然るに、世間の人は何故か、些しも此一事を語らない、嘗に語らないばかりでなく、全然知らないやうである、それから僕の猶感服して居ることは、御本人が此事を以て、左迄の功績とも思はず、自畫自贊の功名話として、餘り吹聴しなかつたのは、また一段の味のあることだ、僕は毎に此事については、獨り敬意を拂つて居るのである。

五十四
之れを有體に語れば、毛利侯なるものが甚だ平凡なものになつて了うのだ、人間の情としては、充分に油をかけて自慢を仕たいだらうが、それをいへば、君公の過失を披露することになる、藩士の一人としての伊藤公は、忍んで之れを多く語らなかつた、そのうちに何ともいへぬ情義があるではないか、公を推賞するものが何時も此事を逸して居るのは、公に對する研究の足らぬ結果で、公を貶するものが此事を知つたなら、その總べての缺點を掩ふに足る可き一大美事として、如何なる賞辭も惜まぬであらうと思ふ、下之關談判は、高杉井上の働き以外に、斯ういふ逸話もあつたのである。

△君命を辱しめず

償金と土地の談判は済むで、之れからは砲臺と大砲の一條だ、戦争は毛利が敗けて居るのだから、この一條だけは夷人の主張に従ふの外はない、併し従ふ可きものを従つて可いのなら、敢て談判を爲るまでもない、何も言はずに頭を下げて了へば、それで落着となるのだ、それぢや、高杉井上は屁のやうな人間だ、其處を何とか切抜けるのが談判委員の役で、それを美事に遣つて退けたから、二人は名を成したのである。
『海岸通りの砲臺を全部取毀して、備へつけてある大砲を残らず引渡せ』
といふのが、夷人の要求であつた。

『それは出来ない』
之れに對する高杉の答辯は、簡単な一言であつた、夷人も些さか呆れ顔で。
『それ何故不可ませぬか』
高杉は平然したものだ。

『この度の和議は藩主の御意見であつて、藩臣は悉く不服なのである、此戦ひは先きになるほど勝利の見込みで、貴下の方で上陸して來れば片ツ端から死人の山、首級を列べて御覽に入れる、といふのが、藩臣の覺悟である、されば藩主から相談があれば藩臣は一同不服を唱へるのである、それを藩主が、大英斷を以て此談判を開いたのであるから、若し、砲臺を毀すとか、大砲を引渡すとかいふことになれば、それこそ大騒動が起つて、とても和談は至難かしいのである、貴下等に於ても、藩主の苦心を御察し下さい』

△敗者が攻勢

戦さに敗けた人の談判としては、餘りに虫のよい申分であるから、夷人も少し勃然として、
『それでは、この一條も承知が出来ないのでですか』
『否、さうぢやない』

「然らば、何う仕やうといふのですか」
「斯ういふことに仕て貰ひ度い」

『ふむ』

「砲臺は仰せの通りに爲る、併し、今すぐにといふても右の事情であるから、いづれ其時機を見定めて必ず取毀すことに仕やう、大砲は彼の儘に置いて、機械の要部丈け脱して、發射ことの出来ないやうに仕て置いたら、同じことであらうと思ふ、それでも引渡せといふなら、それは相談の上その時機を定めることに仕たい、貴下の帳面へ受取つたことに認めて置いて下さつたら、何も此場合に持つて行かなければならぬといふこともあるまい、左様なれば、藩臣の不服も抑へて、事は一切圓滿く治まるといふものだ、貴下に和睦の誠意があるなら、この取計ひの出来ぬといふことはありますまい」

△下之關と霞ヶ關

受身である可き筈のものが、却つて攻勢を取つての談判は、頗る面白いではないか、夷人の方でも、和睦は飽迄も望む所で、この戦ひは止むを得ず開いたのであつて、漸々考へて見るのに毛利へ談判つたよりは、幕府の方が都合の可い見込みも立つたので、終には之れを承知することになつた、その代

り、引渡の式丈けは行ふ、それには井上伊藤のうちで、責任を以て無事に済ませる、といふことになつて、談判は一段落となつた。

毛利の代表者が、横濱まで来て、四ヶ國公使の前で、商船砲撃の謝罪を爲る、といふ一事は、何うも仕方がないから、高杉も承知したのである。

猶ほ詳しく述べたら、種々の珍談もあり、未だ言ひ度いこともあるが、下之關談判の一項は、之れ迄に仕て、話題を進めることに爲るが、彼れ丈けの騒動を起して、終に償金も土地も、渡さずに済ませた、此一系列の働きは、慥に霞ヶ關邊りの人の殷鑑になると思ふ、下之關に霞ヶ關、同じ關ではあるが、その關に大分の違ひがある、之れについても想出すのは、ボーツマウスの談判だ、戦さに敗けて償金を奪られないのは、この時分から流行つて居たものだ、而かも日本の發明なのだから面白いやないか。

△幕使來つて毛利藩へ難題

下之關の事件が形付いて、井上は政治堂詰合の役人になつた、此政治堂といふのは、今日の事にして比較して見ると、樞密院顧問官といふやうなもので、毛利藩の浮沈に關はるやうな大事は、最後に此の政治堂へ御下問になるといふ位に高い位置にあつたものである、従つて其所に詰める役人は、

自然特別な取扱ひを受けたもので、現に一度この役になると其人一代の中は、十人扶持を下し賜はるといふ位なものであつた、井上が一躍して夫になつたといふのは、慥かに破格の出生である。時に老中の小笠原壹岐守が、藝州廣島へ出張して、大膳大夫親子に對し廣島まで罷り出るといふの沙汰があつた、雖然、時が時であるから、迂濶に出る事は出来ない、評議の上、病氣の旨を申し立てると、然らば支藩の中誰にても一名家老附添いで罷り出ると云ふ沙汰であつた、雖然、之も迂濶に出す譯にならない、といふて全然出ない譯にはならぬから、乃で家老の宍戸備前が、只だ一人で廣島へ乗込んで来た、さて壹岐守に會ふて見ると、驚くべき幕命を齎らして来たのであつた、夫は何ふいふことであるかといふと、京都九門の戦鬪に於て、毛利藩士の方から放つた大砲の弾丸が、陛下の御座所間近の所に落下したのは、將に朝敵に如しきの所爲であるといふのが一ヶ條、亦下之關に於ても英米佛蘭四ヶ國の商船を砲撃し、夫が爲めに此度の戦端を開いたといふのは、幕府が開國條約に調印したにも拘はらず、恣まゝに斯くの如き事を爲したのは、公儀を慣からざるの致方であつて、之が爲めに國亂を醸したといふ事は、許し難い次第である、といふのが一ヶ條、之に依つて毛利藩は取潰すべき筈であるが、然し元就以來の名家でもあるし、旁々其の罪を許して十萬石の減地處分、大膳大夫親子は塾居隠居、幼孫興丸を以て、藩主に押す事、斯ういふ御沙汰であつたから、之は備前も御受けをして、引退るといふ譯にはならなかつた。

九門の戦ひに付て、毛利藩士の方から撃出した砲玉が、假令御所の内に落下したとした所で、夫は會薩始め、幕府方の兵に向つて發砲をしたので、其の弾丸が會薩の兵に中らずして、御所の内に落ちるといふまでの事で、毛利に朝敵の心なかつたといふ事は、今日まで朝廷へ對しての忠勤ぶりに徴して見ても明らかである、決して其の心にない事であるから、左様な御沙汰を甘んずる事はならぬ、又下之關の一條とても、朝廷よりの勅があつたればこそ行つた事で、決して毛利の一存を以て爲した事ではない、従つて此事が悪ければ、朝廷へ對して幕府からお懸合を申すべき筈である、此の二ヶ條に依つての御處分とあつては、我が藩に於ては承服を致す譯にはならぬ、併し之は自分の一存であつて藩主は何とお答へ申上げるか、一應歸藩の上、更に藩主の意見を徴してお答へを申上げやう、といふ意味の答辯を仕た。

△非戦論と開戦論

宍戸が何んなに巧みな辯解を爲しても、そりや通させるものぢやない、また宍戸の辯解たるや、頗る巧みではあるが、夷船砲撃の如き大事は、假令勅令が下つて居るにもせよ、一應幕府へ交渉の上、着手するのが當然である、然るに毛利は、勅命を蒙れりと稱して、敢て無謀なる砲撃を爲たのであるから、其曲は無論毛利に在のた、又京都の事にしても、表面にこそ哀訴だとか嘆願だとか、云つて居る

が、戦争の準備を備へ、軍令状まで發して押寄せて来る、哀訴嘆願が世間にあらうか、如何にも其辯解は巧みだが、事實は斯うであるから、小笠原閣老に於ても、充分に宍戸の辯解を駁して是非共に毛利父子が、自身に来るやうとの旨を傳へて、一時宍戸には歸國を許したのであつた。

さア、毛利の藩中は鼎の沸くやうな騒ぎになつた、或は此場合止むを得ないから、幕府の命する通り従つて置かう、數年來の失費で、藩の財政も頗る窮乏を告げて居るし、それに京都や下の關の戦後で、藩士も殊の外疲れて居る、今俄かに天下の大兵を對手に戦ふとなつても、到底勝算は立たない、十萬石の減地處分にはなつても、毛利の家名の存する限り、また回復の道もあらうから、殘念ながら幕府に屈して仕舞うといふものもあつた、或は、そんな腰抜けなことは出来ないから、寧ろ戦つて了へ、運が良ければ天下を握ることも出来るのだ、それを降参する杯とは怪しからん、それ迄にして家名を存するのが、果して武門の慣ひであらうか、如何に泰平が續いたればとて、餘りに腑甲斐ない申條である、といつて憤慨するものもある、双方ともに相譲らず、刻々に兩派の軋轢は激しくなるばかりであつた、一は非戦論で、一は開戦論、それは後に俗論黨正義派と名づけて、幕末の長防史を賑はしたものである。

△臣子の執るべき道

此に不思議なことは、恭順派には高祿を戴いて居るものが多く、正義派には却つて輕輩が多かつたことである、食祿を澤山に戴いて、先祖以來氣樂な生活を爲て居たものは、斯ういふ時こそ、多年の君恩に酬ゆる所以だ、とあつて充分の働きを爲す可き筈であるのに、降参して減地處分に甘じやうとは何事であるか、殊に君公の塾居といふ一條さへ加つて居るではないか、假令君公が左様仰せあつても、我等が遮ぎつて御馬前一時の御奉公を爲す可きである、要するに彼等は、獅子身中の蟲ぢや、といつて頻りに憤慨して、刀の柄を叩いて敦圀く、それを重役が權柄に頭から抑へつけやうと爲るから、倍々反抗して開戦論の氣は昂るばかりであつた。

△松陰の松下村塾

例の吉田松陰が、海外密航を企てた爲めに、伊豆の下田で捕へられて、江戸は傳馬町の獄に在ること幾月の後、藩主へ引渡されて謹慎の身となつた、其時に再興したのが、有名な松下村塾である、此見る蔭もなき小さな私塾から、偉の連中が續々出たのだから面白い、却つて藩營の明倫館よりは松下村塾から人物が多く出たのである、是れは松陰先生の感化の力で、教育といふものは大切なものだといふ一事は、之れでも解る、金網や土細工の稽古を爲せて、それを普通教育と心得て居る、今時の教育家なる者は、宜しく松下村塾の教育法を研究す可しである、何でも子供を仕立てるには、精神の籠つ

た教育法でなけりや駄目だ、薄ッべらな上滑りの爲る教育、それが果して何れ丈けの効果を、國家の上
に及ばすであらうか、實に昨今の教育法位い愚劣なものはないと思ふ。

松陰が謹慎を命ぜられたのは二十八歳、それから安政六年に首を斬られて、小塚原へ棄てられる迄
僅かに三年である、その間に養ふた子弟三百人、人数からいへば僅少であるが、この中から明治の元
老大臣軍將の多くを出して、それが維新革命の原動力になつたのだ、之れに由つて見ると、松陰は儘
かに偉人であると思ふ、現に井上聞多の如きも、そのうちの一人であつた。

△早朝から夜迄の論戦

重役の多くは既に恭順論である、毛利侯父子は幕命に不服だけれど、重役に恭順論が多くては
如何とも爲ることが出来ない、藩侯も泰平無事の時は、極めて氣樂なもので、その權威も思ひの儘で
あるが、一たび世が亂れて、藩論の一致を缺いた日には、權威ばかりで抑へつけることは到底出来な
いことのみならず、動もすれば、却つて藩臣の方から押付けられて往生するものである。
政治堂の役人へ、この事の御相談が下つた、幕使へ對しての返答は、恭順論と武備恭順論と、孰
れを執つて然る可きか、との御尋ねである、武備恭順論とは主戦論のことで、豈夫に表面左様もいへ
ないから、武備恭順と稱して居たのだ。

早朝から夜に入る迄の論戦も、終に決する所なくして、其日は了たのであるが、主戦論の方には、廣
澤兵介大和邦之助渡邊庫太等の連中が在つて、随分よく論じたものだが、恭順論の方には椋梨某を
始め重役派の人々が居て、却々に屈せず争ふた、獨り井上は、何と思ふてか更に意見を吐かず、その
日は沈黙の間に過して仕舞つた。

洋行から歸つて来て、未だ家を有たない、兄の幾太郎方に同居の身であつた、營火が點いてから下
城して、歸つて来たのが、既う夜の四つ刻(午後十時)であつた、直ぐ自分の部屋へはいつて、衣服を着替
へた所へ、徐かにはいつて来た兄の幾太郎。

『おう、兄上……』

『大層遅かつたのう』

『評議が長くなりましたな』

『嘸疲れたらう』

『否、格別疲れも致しませぬ』

幾太郎は膝を進めて。

『時に聞多……』

『ハイ』

「些し尋ね度いことがあるのぢや」

「何事で御座ります」

「汝へは今日の席にて、何一言も述べずに退いたといふが、そりや、全體何ういふ次第か」

聞多は容易に答へない、熟と考へ込んだ儘まである。

「これッ、何故答へぬか」

「ハッ……」

「當家は小祿でこそあれ、譜代の臣ぢや君家へ對する忠節は、人一倍の心を以て爲ねば相成ぬ、然るに今や君家の存廢にも關するといふこの場合、而かも汝へは政治堂の御役を引受けて居る身ぢや、それほどのものが、今日の評議に善惡の意見も述べず、黙して引退るとは何事ぢや、それでも五郎三郎の忤といへるか、拙者の耳へは、既う彼是れの下馬評もはいつて居る、骨肉の身としては是れほどの辛いことはない、また、汝の平生にも不似合のことではないか、それとも何か考へへのあつてかその所存を聞き度うて、汝の歸りを待ち受けて居たのぢや」

と、流石は兄弟の情として、君家への忠義は勿論ながら、實弟へ對する藩士の蔭口に、氣を腐らして居た幾太郎が、聞多の顔を見ると、もう忍耐が出来なかつたのだ。

「兄上ッ」

「何ぢや」

「今日の席に於て、不肖の意見を述べましたら、それが何と相成りませうか」

幾太郎はグッ行詰つた。

「左様さ、何とならうかの」

「採用される見込みも立たぬことに、彼れ是れと申しても、何の甲斐は御座りますまい、忠義は今日に限りませぬ、この事の定まります迄には幾何も其場合は御座りませう、まア、暫時は不肖の行動を御覽下され、井上の家名を汚すやうなことは、斷じて致しませぬ」

斯う言はれては一言もないが、幾太郎は猶も後日のことについて、頻りに聞多へ注意を爲るのであつた。

△懊惱不爲眠

幾太郎の立去つた跡で、聞多は只だ一人腕を拱んで熟と考へ込むだ、自分は心の儘を言ふたので、些しの嘘も飾もないのだ、けれども、藩論の大勢は、恭順論に傾いて居るのである、それには有力な重役の壓迫もあれば、藩士の鵬が既う軟かになつて居たのだ、政治堂の集會も矢張り同じやうなもので、たとへば如何に焦つたとて、そりや無益なことゝ見たから、黙まつて歸つて來たのである

それを兄の幾太郎に詰問されて、思ふた通り答辯は仕たやうなものゝ、さてその忠義を盡す可き時機は、何時来るであらうか、その見込みは未だ空しいのである、何分にも恭順派の勢力が強いから、之れを抑へつけて了うといふことは至難しいのだ、聞多は今や煩悶懊惱して眠ることもならず只だ徒らに氣を腐らすばかりであつた、折柄足音荒く下僕の淺吉が遣つて来て。

「旦那様……」

聞多は徐かに振返へつて。

「おう、淺吉か、何ぢや」

「正木様が見えられました、夜中で恐れ入りますが、是非御目にかゝり度い、と申して居られます」

「ふふーむ、正木が……」

少し考へて聞多は。

「正木退三殿か」

「ハイ」

「客室へお通し申せ」

「ハッ」

△意外の御沙汰

淺吉は玄關の方へ去つた、その跡で聞多は衣服を改めて、客室へ出て來ると、既う正木は席に着いて居た。

「これは正木殿、御待たせ致して、御無禮で御座つた」

「イヤ、何といたして、殊に、夜中御伺ひ申して……」

「さ、何うぞ、これへ……」

正木はグツと進み乍ら膝を整して。

「さて聞多殿、夜中に御伺ひ致したのは、餘の儀では御座らぬが、實は世子様の御沙汰でな……」

「ゑッ、何と仰せある、世子様御沙汰とか」

「左様……」

「而て、如何なる筋の御沙汰で御座る」

「之れを御覽なされ」

正木が取出した一通の書面、之れぞ疑ひもなく、世子長門守侯の御自筆であるから、聞多は再拜して封を開くと。

六八
朝廷今日の御衰運痛哭に不堪也多年の微志何の日に貫き候半かと苦慮此事に候
汝可思之。

と、書いてあつた、情の人なる井上は之れを讀むと、はや涙に暮れて了つた。

△天晴なる抱負

書面の意味から考へると、この度のやうな、幕府の壓迫に由つて、毛利家が閉息して下へば、三百諸侯のうちで、果して、誰れが皇室の爲めに盡力するであらうか、貴様も己の家臣である以上、深く此點を考へて、己の爲めに必死の働きを仕るといふのである、この究境に陥つて、猶ほ皇室の前途を憂ひ天下の重きに任せんとする、長門守の意氣は躍如として、文字の上に見えて居る。

聞多の身にして考へれば、長防三十六萬石の家中に於て、門地の高い人もあれば、名臣の數も少くはないのだ、それにも拘はらず、殊更らに、自分を斯く迄頼りに思ふて下さるか、一念此に至れば只だ難有いと思ふ外に何の感じも起らない。

『世子様御思召は、其處に御座るのちやお解りになりましたか』

『只だ難有く存じます、と宜しく申し上げ下され』

『その儀は拙者より然可申上げませう、が併し、足下は是より何となさるか』

『刻を移さず登城仕る考へで御座る』

『然らば、是より即時の登城……』

『左様……』

正木は躍り上るばかりの喜びで、一歩先に歸城した、井上は直ぐに支度を整へ、正木の跡を逐ふて登城した。

△愈々時節到來か

夜半に人知れず密と登城した井上のことは、殆んど誰れも知るものがなかつた、翌日は元治元年の九月二十五日である、

山口在住の御目見得以上の諸士は早朝から續々登城するので、事情を知らぬものは、只だ不審に思つて居た、尤も登城する御本人も、何の爲めの御召であるか、更に知らなかつたのであるから、況して御沙汰に漏れた人の知る可き筈もない、強いて想像すれば、幕使の傳へた例の一條であらう位のことには、思ひ及んで居るかも知れないが、先づ御沙汰の内容は一人も知るものがなかつたのだ。

井上は御前を退ると、すぐに廣澤兵介の家へかけつけた、廣澤も夜半のことではあるし、不意に尋

ねて来られたので、些さか不審に思はぬでもなかつた。

『やア、大層遅く、何ういふ用事か』

井上はニヤリと笑つて。

『大分面白うなつて来居つた、いよ／＼時節到来ぢや』

『はア時節到来とな』

『うむ』

『何ういふ次第ぢや』

『今ま御前から退つたのぢやよ』

『ゑッ、御前からの退りぢやと』

『實は斯ういふ事情ぢや』

是れから井上は、正木の来たことから、拜調の頭末を打明けて。

『其處で愈々明朝は御前會議ぢや』

『我等も登城か』

『無論のこと、御目見得以上は、總登城ぢや』

廣澤は思はず膝を進めて。

『左様か、そりや面白いのう』

『腰抜けの重役相手に、拙者が舌の續く限り演りまくる覺悟ぢやから。足下等は助鐵砲ぢや』

『可し、その方は引受た、立派に行れ』

『諸士の心が堅くないと君公も躊躇せられるに由つて、足下等は只だ諸士の決心を堅くさせて呉れ』

『承知いたした、その儀は心配するな』

△論戰の劈頭は侯

廣澤との相談が済むと、さらに他の同志を訪ふて、天の明けるまで同じことを繰返へした、廣澤も井上と同様に馳廻つたので、いよ／＼登城といふ時は、既に數十人の同盟は出来て了つた。

今朝の御前會議で、毛利家の存廢に關するほどの、大問題が決するといふのだから、身分や役柄に由つて、それ／＼に定まつて居る控席、それへ爪も立たぬ位にはいつて居た諸士は、思ひ／＼の意見を出して、既う多小の争ひが起きて居るほどである、廣澤を他の主戰派は、頻りに曖昧な連中を説きつけて味方に引入れやうと爲る、之れが又都合よく運んで、大分景氣が宜しいから、これなら大丈夫と、互ひに不安の胸を撫下した。

七二
聽て、時刻が来たので、一同は大廣間へ出る、しばらく控へて居る所へ、大膳太夫敬親長門守元徳の兩侯が御出座になつて、誰れ一人として私語するものさへない、さしにも廣い御座敷も、家臣で一ぱいに詰まつては居るが、寂として水を撒つたやうだ、重役の一人は、殿様へ會釋して、一同の方へ向き直つた。

「這般幕府より使者として閣老小笠原壹岐守殿、藝州廣島まで下向致され、御當家へ對して容易ならざる御咎めの條々申渡されたるに由つて、先づ一同の所存を御尋ねあり、然る後ち幕府へ御返答に及ばるゝ趣き、仰せ出されたるが爲め、我等御沙汰を奉じて、この旨相達するに依り、一同その心得を以て、所存のほど申述べて可からう」

と、今でいふ開會の趣意が終つて、それから幕府の御沙汰なるものは、一々細目を示さず、その大要を申聞かされた。

△御家の一大事

洋行を爲る前までは、藩士の間の評判も左様悪くもなかつたし、御殿山の公使館の焼打を仕たり、

武州金澤へ夷人斬に出かけたり爲るほどの、猛烈な攘夷黨であつたから、同志の氣受も頗る良かつたのが、洋行してからといふものは、真に井上の心事を知るものは別として、先づ藩士の多數は井上を罵るやうになつた、殊に攘夷を以て大和武人の氣魄の如く心得て居る、頑固な連中は一も二もなく井上を排斥したものである、然るに其の井上が、今日の大切な會議に於ての、第一の發言者だといふので何を言ふか聞かぬうちから、既う顔を反けて居るものもある、重役の多くは、是れも下之關の戰爭から何となく井上を憚らない、斯ういふ事情の含むで居るのを、熟く知り抜いて居て、その上に、藩論の大勢が、恭順といふことに傾きかけて居るのを承知して、それを不意打の御前會議に覆へさうといふのだ、剛情な横紙破りの性質が、歴々と見へ透くやうである。

「恐れ乍ら言上いたします、此度の幕命は御當家の存廢にも關するほどの大難題に御座りますれば、我々藩士に於ては固より死生を忘れて、只だ君家の安泰を謀るの外は御座らぬ、乍去、此に注意す可きことは、我々は武門の人であるといふの一事を忘れては相成らぬ、如何なる耻辱を蒙りても生を貪る、それは町人の事で御座つて、苟も武士としては、大義名分の下に、其死生を決するの外は御座らぬ、然るを只だ一時の難義を恐るゝの餘り、徒らに名を恭順に托し耻辱を忍んで、敵の陣門に兜を捧ぐるやうのことを、假りにも心懸るものがありとすれば、そは骨もなく血もなき腰抜け武士と申す可く、殊に君公蟄居の幕命を、その家臣たる者が、何として同意のなる可き、不肖の愚存

を以て申しますれば、只此一事のみにても、幕命を拒むが當然と心得まする』

△恭順派へ大刺戟

一息に是れ迄つゞけた井上は、じつと重役席の方を睨むだ、恭順派を目するに耻辱を知らぬ腰抜け武士と罵つたのであるから、列席者のうちには苦い顔を仕て居るものも大分多くあつたが、井上は更にそんなことには頓着もなく、猶ほ意見をつゞけるのであつた。

『君公蟄居の上、滅地處分に附せらるゝといふ、この耻辱を忍んでも、毛利の家名さへ残せば宜いといふものが、藩士のうちに一人でも御座つたなら、それは祿盗人で御座る』

祿盗人とは能く思切つて言ふたものだ、眼の前に左様いはれる人が、澤山に居るのである、それを睨みながら、ミシ／＼やりつけるのだから堪つたものぢやない。

『中興の藩祖元就公の一たび覇業を建てたまひてより、山陰山陽の兩道に跨りて十一箇國の領主、中國探題として大膳大夫に昇られ、殊に朝廷よりは、菊桐の御紋章を拜用することを許れたること、武門の譽此上や在る然るに、その後ち關ヶ原の一戦、端なくも西軍の敗北となり、我藩は石田三成の孤忠を憐み、豊太閤の遺言を重んじて、西軍に與したる所以を以て、領地九ヶ國を削られ、僅かに長防の二州を餘せるのみ、其遺恨と耻辱は二百七十年の長さも猶ほ綿々として盡きず、今に至るも我

等の忘れざる所で御座る、それを今ま復た十萬石の滅地處分とあつては、理非に拘はらず一先づ御謝絶いたすが當然、況してや、我藩の多年皇室へ盡し奉つりたる功蹟はいはず、却つて藩士の過失を口實に仕て、朝敵としての御取扱ひは、如何にしても我等の忍び能はぬ所で御座る』

△直言喝破滿堂動

毛利出雲は膝を進めて。

『君公へ蟄居の御沙汰は、我等身に取り此上もなき痛心の儀ながら、今日と相成つては如何とも致し難し、また幕命を拒まば必ず大兵を差向られるに相違ない、左様相成ては由々敷一大事とも存する、京都下之關の戦ひに由て我藩の疲弊も容易でない、今此際を以て幕府と戦を開くことは、實に容易ならざる儀で御座る、無謀の戦ひの爲めに、君家を危きに引入るゝは深く慎む可きことのみならず、君公へ對し奉りても恐れ多いことぢや、それを何と思ふてか井上が血氣に任せての暴論、もはや聞くにも及ぶまい』

と、美事究所を突いたつもの出雲は、息を休いて井上の態度を見詰めたが、此一喝に恐れて黙まるやうな井上ではない。

『出雲殿御仰せでは御座るが、要するに十萬石の滅地兩公の割腹、この二つを我等より幕府へ御請け致さうといふが如き不臣の言を、假りにも吐くといふ、それが抑も間違ふて居るので御座る……』

『イヤ、暫らく待たッしやい』

出雲は井上の説の終るを待ち兼ねて、先づその發言を押止めたのである。

『只今の一言聞捨てにならぬ』

『そりや、何事で御座ります』

『兩公割腹とは幕府より御沙汰の無きことぢやが、何故に左様な不祥の儀を申されたか、その理由承まはらう』

『御答へ申さう、その儀については、幕府の御沙汰にはなけれど、この度の御沙汰は、すべて無法の儀のみ故、もし蟄居の御沙汰に甘んじて、この上、割腹の御沙汰の下りたる時、蟄居に甘んじた以上、割腹の御請は出来ぬとも言はれますまい、蟄居は御道理で御座るが、割腹は不都合で御座ると苟も毛利藩主とも申さるゝ御方が、左様の御答へ致たされませうか、耻辱を知らぬ武士は格別のこと、人並の武士として、この辨別のないといふは、實に片腹痛きことで御座る』

こりや井上の申す通りで、蟄居は一時のことなれど、やがては切腹の沙汰か下らぬとも謀り難い、それを見込しての井上の意見は、此に於て多少他の心も動かしたらしい。

『猶ほ申述べ度きは、開戦の一條で御座る、拙者申しまするは、開戦の可否を言ふのでは御座りませぬ、幕府の御沙汰は不法で御座るに由つて、御請は致し兼ねる、といふまでのこと、さて其上の戦ひは成行として止むを得ざるの儀、我等死力を盡して、御馬前一時の御役に立たうの覺悟、成敗の如きは只だ天の命に待つばかりで御座る、殊に重役方は京都下之關の戦ひを引證して、御意見を述べられるが、それについて疑ひが御座る、といふものは、その敗戦は畢竟誰れの過失で御座つたらう、重役御指圖の敗戦では御座らぬか、然るに、重役方は動もすると、この一事を引いて、藩の疲弊を説かれる、思へば耻を知らざるの至り、自らの過失より大事を惹起し、且は戦ひに打負け、その上に、此度の幕府御沙汰、爲めに君家危急の難を招きしこと、萬一耻辱を知る人ならば、この席には列ならざる筈、眞に忠節の臣ならば、疾に切腹位は致し居るのぢや』

と、傍若無人の直言には、井上の同志も些さか驚いたやうである。

『まあ待たッしやい』

急言喝破尙ほ進んで論せんとする折柄、毛利主計は井上を抑へて。

乍去、それが爲めに君家の滅亡を招ぐやうのこと御座つては、愈々過失を重ぬるの道理ゆゑ、従つて、今日の席にも列り、斯く評議を致す次第ぢやよ』
井上は冷笑を漏して聞いて居る、その態度は如何にも憎々しい位であつた。

△眞に空谷の跫音

對手が家老でも重役でも、そんなことは何うでも可い。毛利の御家が安泰になることなら、多少の非理も通させやうが、今度のやうな不法の御沙汰は、假し開戦の場合に立ち到るとも、それは止むを得ないから、飽迄も、幕府の御沙汰は拒絶しやうといふ、その決心を以て、今日の會議に臨むたのである故、井上の元氣は實に素晴らしいものだ。

『我等の意見は、毛利家滅亡の端を開くものと、仰せられるので御座るか』

『左様は申さぬのぢや、幕府と開戦して打勝見込みなき以上、毛利家の御安泰なる可き筈はないと申したので御座る』

『其の仰せは甚だ奇怪千萬の儀と存じまする、我藩は何故に幕府と戦ふて、打勝見込み御座りませぬか、先づ其理由から承知致し度い』

凄しい眼を光らせて、チリ／＼と膝を進めた井上、主計は尻尾を抑へられて、ギューの音も出ない。

『古人も勝敗は天に在りと申して居りまする、幕府の兵には到底及ばぬと、主計殿定められましたも、我等は承服致し兼ねまする、先づ戦ふものとして勝敗の見込みも相立ち、それからの御意見と御座りますれば、我等に於ても、亦た再考仕る場合も御座りますれど、只不法の御沙汰を請たのみにて、直に敗るものと定ての御意見には従ひ兼ねまする、況してや、徳川の勢威漸く傾きかけて諸侯の向背も、或は此一戦に由つて、意外の儀に相成るやも計り難い、今こそ御當家は中國の一諸侯たるに過ぎずと雖も、兎に角、武門の名家で御座りまする、祖先以來の君恩に酬ひ奉るは、この一舉に在りとして、既に決死の覺悟いたしましたるものも不尠、この意氣を以て幕兵を國境に邀撃たば、大勝利を得ることは恰かも掌裡の物を採るに均しと存じまする、若し又た武運拙くして、一敗地に塗るゝことあるも、勝敗は兵家の平生、豈夫は地下の御祖先も御怒はあるまい、然るに、一丸を放たず一矢も酬いずして、降服に等しき恭順を致し、それが爲め纔かに御家名を残したればとて、先君の御喜びある可き筈も御座るまい、所詮は武門の意地を立つるか立てぬかに在る、藩士一同の決心も確め、然る後に重役方は、思ひの儘まになさるが可からう、御家老とは、代々の高祿を戴くばかりの役でも御座るまい』

突如として家老席の一人が大喝した。
『黙まらッしやい』

△兵糧攻の會議

井上の膝は聲の爲る方へ向直つた。

『何と言はるゝか、黙れとは何事で御座る、今日は御當家の存廢に關する會議、役の上下は平生のことで御座るぞ』

『小身者が我等に對して、その難言は許し難いぞ』

『たとへ、小身者でも忠義は心得て居りまする、貴下のやうな……』

『何ッ』

はや双方ともに立ち上らんとする、一座は何となく轟々きかけた。

『双方控へろッ』

長門守の一聲で、双方ともに。

『ハッ』

と、兩手をついて控へた、如何に何でも御前で、私しの争ひは悪い、時が時であるから別に御叱りはないまでも、双方の不懂慎は可くないことだ。

『既う午刻でもあらうか、一同食事の上さらに評議を續けることに致さう』
井上は急に頭を上げた。

『しばらく……』

世子を呼び止めるのは豪い、一同も驚いた。

『御家浮沈の大事、一刻も空しうは致し難い、我等食事の儀には及びませぬ』

斯う言はれたので世子も苦笑ひして席に直る、この會議で、毛利父子は兵糧攻め、藩士一同も其附合で斷食と決まつた。

△四時間の舌戦勝利

午前からの評議で、井上は殆んど四時間も舌戦を續けた、その決心も堅かつたが、正論堂々と眞向から辯じ立てたので、恭順派は終に閉息して了つた、殿様は勿論、井上の説を可しと仕て居られるのだから、猶ほ多少の押合はあつたが、井上の主張の通り、幕命を拒んで一戦に及ぶ、といふことに決して、その日は一同退出することになつた。

井上が必死の辯論を仕て居る間に、廣澤初め同志の人々が、それとなく同席の藩士を説きつけ、臨時に味方を殖やして、恭順論に傾むきかけた大勢を挽回した働きは、さらに感ず可きものがあつた

畢竟は能く一致して、反對派に肉薄したので、斯ういふ結果になつたのであるが、恭順派の不滿は謂ふ迄もない、議論には負けた、けれど井上を罵ることは非常なものである。

却説、井上は自分の計畫通りになつたので、無限量喜びの色は、その顔にも現はれて居る、殊に、世子侯の内調をさへ賜り、難有い仰せ迄も請けて御前の首尾は最上で御暇が出た、一先づ自分の控席に来て、ホツと息を吐いた。

睡眠の不足は固より在るが、此日の働きに胸を痛めたことは普通でない、兎に角、此處まで漕ぎつけて幾分か氣に緩みも出たので、流石に疲憊して了つた、折柄、前の廊下を今ま退出する人が在る、見れば大家老の宍戸備前であつた、宍戸の方でも井上を見付けて。

『おう、是れに居つたか』

『ハイ』

宍戸は案内の坊主を先きに遣つて、一人で井上の控席へはいつて來た。

『今日は御苦勞で御座つた、能く彼れ迄に勤めて下さされた、厚く御禮申す』

膝より兩手を降した井上は。

『御辭て恐れ入ります、野人禮を知らずして、重役方へ無禮の段々幾重にも御許し下さりませ』

『何の、その御挨拶には及ばぬ、君家の御爲を思ふの一念から、必死の働さちや、彼れ位のこととは

當然で御座るよ』

△大事の前の小事

此人は元來硬派の方であつたが、無理に傍から強制られて、無據く恭順論の渦中に捲込まれたのである、所へ、井上の連中が出席して、一生懸命の働きを仕て、これが爲めに此結果になつたのだから嬉れしくて堪まらないのだ。

『さて井上、今日のことは是れで可いとしてぢや、明日からのことは何と考へるか、御前の評議は何うならうと、心のうちの解けて居らぬ、それが一番に恐ろしいのぢや、君命に由つて足下が何事も指圖する役となられて、足下の命令通りに一同が従へば此上もないが、萬一左様相成らぬ時は、幕府の大兵を國境に控へて、美事の勝利を得ることは至難しからう、拙者は只だそれのみ杞憂でならぬ、之れについても何か思慮の在るか、それを聞き度いのぢや』

『その儀につきましては御心配御無用、多少の腹案も御座ります』

『ふむ、而て何ういふことに爲るつもりか』

『君命に由つて采配を御預り申す以上、拙者の指圖に従はぬものは、片端から處分致します迄のこと……』

「イヤ、それが宜しくないのちや、一人や二人なら左様もならうが、徒黨を組むで足下に従はぬとなつたら、何となさるか」

「先づ見渡す所、圓龍寺と淨榮寺に屯集いたし居りまする、彼の連中位のもの、御座りませう、一應は理解も申聞けまするが、何うあつても従はぬとなれば、止むを得ませぬ故、先づ獅子心中の虫に均しき、彼等より討つて了ふ覺悟で御座りまする」

「えッ、そりや同士討ぢやないか」

「左様……」

軽く答へた井上は平氣だが、宍戸の驚きは非常であつた。

△外其侮りを招かず

假令ば如何なる名義や事情があるにせよ、表面から見た丈では、同士討の非難は免れない、それを爲せ度くないと思ふ所から、宍戸は種々と井上を慰めて居ただけれども、井上の決心は、餘程堅いらしいので、宍戸も些さか持餘しの態で。

「互ひに行く道を異には仕て居が、いづれも御當家の御爲を思ふてのことぢやから、善と惡との別はない、それが互ひに相撃つといふ、何うあつても同士討の譏は免れぬ、所詮、他藩の笑草にもなら

うとも思ふが、左様な荒いことを爲すとも、他に良策も御座らうから、猶ほ篤と御考へ下さるまいか」

「仰せは一々御道理に存じまする、拙者に於ても、固より事は好みませぬゆゑ務めて圓滿く結局は決けるつもりで御座りますが、萬一の場合には、幾分の手心も用ゐると申す迄のことで、決して他藩の笑草になるやうの儀は仕りませぬ、殊更敵を前に控へての同士討、そりや充分に慎みますに由つて、御心配下さるな」

と、宍戸が眞面目に心配して居るので、井上も強いことばかりは言はれない、調子を合せて安心の行くやうに答へたから、宍戸も頗る喜んで、井上に先立ち退出した。

△味方警戒の兵

その跡で井上は足立太郎を招んだ、この人は數年前に朝鮮の京釜鐵道の重役になつた、彼の足立である、未だ其頃には、毛利藩に於て第四大隊の隊長を仕て居て、却々評判の良かつた人だ。

「何か御用ぢやさうで……」

「おう、足立ッ」

足立は徐かに席について。

『而て、御用の筋は……』
『他でもないが、足下の率ゐて居る隊士は、何時入用かも知れぬ故、その心得を以て充分の準備を仕
て置いて貰ひ度いのぢや』

『ふふーむ、愈よ幕府の兵と……』

『否、左様ぢやない、味方に備へる爲めぢや』

幕兵と開戦の爲めに、準備を申付けられたものとして、足立は飛立つほどに喜んだのだか、この一
言に些さか腰が折れた、それに猶ほ疑はしいのは最後の一言である。

『味方に備へると申すのは、何ういふ次第で御座るか』

『今日の御前會議にて、武備恭順と決したこと御承知ぢやらう』

『そりや心得て居ります』

『明日よりは拙者の指圖に由つて戦争の支度にかゝるのぢや、無論、君公御沙汰の下に指圖は致すの
であるが、それについて、飽迄も幕府へ降伏しやうといふ一團の徒が在つて、その指圖を妨げるや
も知れぬ故、豫め其備へを仕て置かうといふので御座る』

△猫眼の如き藩命

熟と考へて居た足立は。

『その儀は平に御免蒙り度い』

『何故か』

『此頃の藩の有様は、實に言語道斷の至りで、朝に夕に重役の心が動いて居る故、我等は安心して事
に従ふことが出来ぬ、されば只今の御申付けもさらに御役が變れば何となるや、その邊も氣遣はれ
て、充分に押切つて事が行へない、我等に於ても、後日のことを思ふと、足下の御指圖とて迂濶に
は御引受け申すこと相成りませぬ』

聞いて見れば無理もない、藩命の變ることは猫の眼に均しく、到底安心して一つのこと執着する、
といふやうなことは危なくて出来ないのだ、足立のいふ所は道理千萬である、とは思ふが、左様かと
いふて此儘止むことは猶更ら不可ない、其處で井上が、後日の責任を引受けるといふことになつて、
足立も終に井上の命する通り、反對派の詰所へ何時でも押寄せも丈けのことを承知して、自分の隊へ
歸つた、井上は之れ迄の手順を整へて、城を下つたのが既う黄昏であつた。

△穴戸備前の仲裁

穴戸備前が直ぐに、自邸へ歸つたら何事もなく、或は濟むだかも知れないのに、却つて穴戸の親切

✓
いん

と取越苦勞が、意外騒動を惹起す原因にならうとは、宍戸も後ちに驚いたに違ひない。

何う考へても井上の計畫が面白くない彼の烈しい性質の男が、今度の行掛りから、反対派のものに臨めば、冒頭から衝突するに極まつて居る、左様なつた日には、藩士の間は大騒ぎが起つて、双方に死傷者も出来やうし、それが幕兵と戦ふ時分の妨げになるのは必定である、いづれが勝つにしても、藩士の同士討は宜しくない、こりや己が仲裁役になつて圓滿く結局をつけてやらう、と實に親切な考へから仲裁する氣になつて、自邸にも歸らず、直ぐ圓龍寺の方へ遣つて來た。

藩中第一の權勢家たる、宍戸備前が突然遣つて來たので、一同驚いて出迎ひをするやら、座敷を取片付けるやら、大騒ぎを爲て案内する、そのうちの重立つたものが。

『これは大家老様には突然の御入來で恐れ入ります、何事か至急の御用でも御座りましてか』

『左様、少し取急いで御相談申上げ度い儀の御座つてな』

『はッ、何ういふ御用に御座りますか』

『他のことでもない、今日の御前會議についてちや』

『成程……』

『井上聞多の意見通りといふことに決したが、足下等はそれに異存は御座るまいな』

宍戸の前にブラリと列んで居た連中は、些さか顔の色を變へた。

『否、その儀につきましては、御尋ねに由つて御答へいたしますが、異存も異存、大異存が御座ります』

『併し、御前會議にて決したこと、異存を申し立ては可くあるまい、第一には君公の御意を犯すこととなるのちや、それでも異存を申立てる覺悟か』

『何うも止むことを得ませぬ、假令御前會議にて決しましたことでも、毛利家の御爲めに宜しくないと存じますことは、身命に代へましても拒みまする』

如何にも立派な覺悟だ、この覺悟あるものが若し一致して呉れたなら、幕兵と一戦するも左迄見苦しい敗けは爲まいと思へば、何となく仲裁を爲る甲斐もあるやうに、宍戸の心は却つて勇むのである。

『それまでの御覺悟とあれば、明日よりの井上が指圖にも従はぬのちやな』

『仰せまでも御座りませぬ、殊に、井上といふ奴、先きに脱藩越國して公儀の法度を破り、イギリス國へ渡つて彼の國の風俗に従ひ、歸國の後、下之關の戰爭に武士の自分を忘れて、君公へ和議を御勧め申し、その上に這般のことに就いては、徒らに異説を立て藩の状況も考へず開戦の議を主張し、終に君公を誤る等その罪數へ難く、憎みても餘りある賊臣、彼れの如きものが、如何なる指圖を致せばとて、我等に於ては毫も之れに従ふの考へは御座りませぬ』

先きに君命と雖、之れを拒むといふたのは、井上を排斥する心から出た言葉で、決して君公を蔑如に仕ての言葉ではなかつたのだ、宍戸は胸のうちでは、豫め左様と悟つて居たが、斯ういはれて見れば却つて話は仕易い、と思つて。

「井上の身に就いては、考へやう一つで善も悪くもなる、決して彼は悪人や賊臣でない、その心底は拙者も能く知つて居る、足下等も曾ては俱に國事に務めたのちやから、彼れの平生も知つて居らう少し氣を静め敵意を去つて考へたら何うぢや」

斯う頭から抑へるやうに言はれては、倍々不平は高くなるばかりで、更に一人が進み出で、肱を張り拳を握つて詰寄つた。

△聞捨にならぬ一言

「御辭では御座るが、井上といふ奴、幕府の法度を犯して夷國へ渡り、夷人の風俗を學びて歸つたほどなれば、俱に齒す可きものでは御座らぬ、殊に、勝つ可き見込みも立たぬ、無謀の開戦を唱へ、君家をして危き淵に引入れんと爲る坏、實に言語同斷の至り、互ひに相和して事を爲すことは、到底相成りませぬ」

噛みつくやうに言ふのを、軽く開流した宍戸は、流石に老巧なものだ。

「左迄に立腹せずとも、理否は自然と解るものぢや、互ひに意見を固執して譲らぬも、畢竟は忠義の一心からと存する、井上が夷國へ密航いたしたは、幕府の法度には背いた致方ぢやが、その爲めに下之關の和議も届いた、といふもの、悪うばかりはいへぬ、この度の一條に就いても、開戦が無謀か、恭順が非理か、そりや御前の會議で大概は定つても居らう、兎に角、藩論一決の上は、互ひに相譲つて事を執らねばならぬのぢや、井上と足下等の間に不和の點があつては、今後のことも面白くない、何卒その扱ひを拙者に任して貰ひ度いものぢや」

「折角のことでは御座りますが、その儀は平に御断り申上げまする」

「併し、井上が君命を奉じての指圖は、背けまいが」

「否、直接の君命は格別、井上が君命風を吹かせば、斬捨てる迄のことと御座る」

宍戸の前で、是れ丈けに断言するのは、熟々の決心があるに違ひない。

「足下等ばかりが武士ではない、井上も武士ぢやからな」

「何の、井上が武士とは……」

「井上の背後には、廣澤兵介も居れば、高杉晋作も居る、その他味方のもも少くはない、豈夫に左様のこともなるまいが、萬一にも、井上の方から不意を襲ふて來たら、何となさる覺悟か」

「えッ、何と仰せられる、井上が我等の不意を襲ふと……」

「比喩ぢや、まア左様いふこともあつたらば、何と爲さるかといふのぢや」
「左様のこともあらば、却つて我等の望む所で御座る、快よく一戦して、井上の呼吸の根を止めます迄のこと……」

「それが悪い了見ぢや、同士討に日を送つては……」

「たとへ同士討にもせよ、時と場合に由つては、それも止むを得ませぬ」

△歸途を待受けた三人

何事も穩當にと思ふて、種々に説いて見たが、總べて悪い方ばかり解釋して、さらに穴戸の忠告を用ひないのだ、これぢや長く話すほど害がある、今日は此邊で見切をつけるが可からうと、はやくも思案を極めた穴戸は。

「然らば、この御相談は一時退くことに致さう」

「左様願ひ度い」

「いづれ明日にも、また御尋ねいたしませう、さらば是れにて御無禮いたす」

一同も叮嚀に會釋して、穴戸を送り出した、跡では又々議論に時刻を移し、漸くに決したのは。

「何うも穴戸の話のうちに、聞き流しにならぬことがある、それは例の不意を襲ふたら云々の一言で

あつて、全く根據のないことを、彼アいふ譯はない、それには何か仔細があるに違ひない、寧ろそのこと、此方より進んで井上をぶち斬つて了つた方が可からう、彼奴生して置けばこそ、斯る騒ぎも起るのであるから、今宵の歸途を待ち受けて、ばツさり斬つて了つたら、禍害の根を絶つこともあらう」

といふのであつて、劍法の出来るものを選んで、井上の歸途を待つて暗殺することになつた、木村新中井榮之丞、周布藤吾の三人が、その選に當つて、一本松と二本松の間に待伏せして、井上の来るを今や遅しと待受けた。

△例日と違つて、油断はならぬぞ

恭順派の方に、斯ういふ計畫のあることは、神ならぬ身の井上は、さらに知る由もなく、夕方から廣澤兵介の宅へ集つて四五の同志と明日の打合せを終つて、酒肴の歡待を受けた、晝の御前會議が美事に運んで、引續き一切の手筈が都合よく届いた、幾分の安心と喜びで酒盃も存分重ねたから、井上は既う大分酔つて居る。

「これぢや、拙者は歸宅と致さう」
立ちかける井上を、廣澤は制して。

「まあ待つしやい、未だ可からうから、話して行くが可い」
 「イヤ、相談も是れ迄のことぢや、それに今日の首尾も、はやく母や兄に知らせて遣り度いでろう」
 「それも道理ぢや、然らば強て引留めは然ぬが、何れにしても猶う少焉は可からう」
 「急ぐやうぢやが、歸ると仕やう」
 「左様か、それぢや誰れか附添を……」
 「何ッ、附添ぢやと、そりや何の爲か」
 「何日と違うて、油断はならぬぞ」
 「馬鹿なことを……今日はそれでも済まうが、明日を何と爲る、武士が夜歩きを恐れては、大小捨てるの外はあるまい」

△寂しき町の夜

廣澤は萬一の場合を思つて、注意の爲めに仕やうといふのだが、井上は強ひて断るのであつた。
 「左様言出しては中々負けぬ氣の貴様が、諾とも言ふまいから、それぢや止めると仕やう、併し、充分に氣をつけて行けよ」
 「聞多の腕は、この通りぢや」

黒い腕を叩いて。
 「ハッハ、ハ、ハ、心配無用ぢや」
 「豪い元氣ぢやな」
 かくて井上は廣澤の宅を出た、従つて来た下僕の淺吉は提灯を提つて、井上の先きに立つ、夜は未だ更けたといふほどではないが、町の人通りは全く絶えて居る。
 萩の城下は、長防二州の都府として、餘りに奥詰まつて居るので、山口へ城下を移さうと仕たが、之れは幕府に拒まれて、終に目的を果さなかつたけれど、それで止む可き毛利でない、陣屋といふ申立て、その實は築城の計畫を進めて居たのだ、地勢の上からでもあらうが、萩の繁昌は日倍に、山口の方へ移つてゆく、この時分の山口は實に繁昌を極めたものであつた、所が、打つと藩命の御用金に、町人や百姓は疲勞るばかり、加之に今日の御前會議で、愈々幕府と開戦することに決したと聞いて、その恐慌は尋常ならず、人氣は頓に阻喪して、宵のうちから戸を鎖し往來の人足も絶え、町は何となく寂として犬の泣く聲にも亡國の調があるやうだ、如何に暖い國の八月でも、既う廿五日となつては、朝夕の冷氣身に沁みて、酔後の肌觸りには何ともいへぬ快よい感じが爲る、今ま井上の渡つて居るのが袖付橋、れから、直ぐに一本松へかかるのだ。

△待受る三人武士

木村周布中井の三人は、最前から一本松と二本松の間で、井上の来るを待ち受けて居るのだ、所へ一人の武士が急ぎ足で此方へ来るやうだから。

『オイ、来たぞ』

『井上ぢやあるまい』

『何故か』

『提灯も持たず一人で来るのは、可怪しいぞ』

『それも左様だな』

三人は暗いうちにも息を殺して、密と伺つて居ると、武士は近づいて来た。

『中井居るか、オイ木村は居らんか、周布は何うした』

呼ばれて驚く三人、その聲に聞覚えがあるので猶も透して見ると、これは如何に、同志の兒玉七十郎であるから。

『ヤ、兒玉か、何うして来たか』

『己れも仲間入りぢや』

三人は拒んだけれど、兒玉が聞かないので、終に仲間へ入れて了つた。

△袖付橋の暗打

現今では監獄署が建つて居るさうだが、未だ其頃は、一本松二本松の邊は墓地であつて、夜などは随分寂しかったものだ、袖付橋を渡つて一本松の所まで来た、淺吉は急に足を停めて。

『旦那様、この先きに道の毀れたところが御座いますから、お氣をつけ遊ばせ』

『己は大丈夫ぢやから、貴様氣をつけて行け、提灯持は足元の暗いものぢや』

『私是不酔ですから足元は確かだ御座いますが、旦那様は酔つておいでのやうですから、泥濘へでも履込みますと、不可せんから……』

『イヤ、大丈夫々々々』

『少し歩くと淺吉が。』

『何だか妙に寂しう御座いますな』

『うむ、此處は悪い所ぢや、墓地に松並木の續きぢやからな』

『私は平日御城下へお使に参りますのに、夜分は此處を通るので實は弱つて居ります、月の在る晩な』

とは狸の奴が腹鼓をポンポコやつて居ることが御座います』

『左様か、狸は蠟燭を奪るといふから、提灯に注意しろよ』
『何だか斯う頸元が慄々して、氣味が悪くなりました、もしや出るのちやありませんまいか』
『そりや何とも知れんぞ』

主従が話し乍ら通りかゝる、一本松と二本松の間、ばらばらと駆け出る人影、闇夜にも解る怪しの侍、聞多は一步退る刹那に。

『誰れぢや、井上かッ』

『左様、聞多ぢや』

井上の答への終るか終らぬに

『えいッ』

氣合が聞えると、ピカリ光つた、真向から斬込まれたので、井上が背後へ反るやうにして、避けたが間に合はなかつた、右の頬から顛へかけて、ざつくり割りつけられたので。

『あッ』

と叫んで、腰の刀へ手をかけた途端、二度目に現はれた侍が、大地を這ふやうにして、井上の足を捉つて曳いたから、井上はバツタリ前へ倒れる、所へ、横に拂つた一刀は美事に井上の腰車へ斬込んだ。續いて現はれたのが、また二人、井上が起上る間がないので、四這に這ひながら逃出すのを、逐討

に斬りつける。

『それッ、遁すな』

『斬れッ』

『突けッ』

と、いふ騒ぎ、逐詰め、斬りかけるので、井上も一生懸命に這廻る、そのうちに少しの隙があつたので、ぱつと刃起した、腰へ手を遣ると、南無三大刀は帯の緩かつた爲に、倒れる時脊中へ廻つて残るは脇差ばかりであつたから、止むなく脇差を抜いた、逐詰めた四人が、隙もあらせず斬込んで来るのをチャリン／＼と受流しながら横ざまに走る、その迅きこと恰も飛鳥の如くであつた。

井上が如何に剛氣で、假し幾分の手練はあつたにもせよ、闇夜に不意を襲はれては、その働きも心のまゝならず、残に數ヶ所の重傷に、神氣も亂れて足元さへ定まらぬ、この邊は通ひ馴れた道ではあるが、必死の働きを仕ながらの逃足は、誤つて小溝のうちに履込んだので、仰向に地響うつて倒れた。

『それッ、しめたぞ』

『突けッ』

真先の一人が、倒れて腕く井上の胸へ、柄も通れと大刀を刺した、無論井上は田樂刺と思ひの外、不思議にもガツチリと音が仕て刺した刀は脱て了つた。

下僕の淺吉が、聲を附りに怒鳴りながら、駈け出したので、附近の人が、それを聞きつけて、それぞれに柄物を持つて出て来る様子であるから、二度目の斷息を刺すの暇もなく、兇漢は闇夜に紛れて逃げて了つた。

△春を拒む兄の情

聞多の兄幾太郎も、淺吉の急報に由つて、現場へ駈けつけて見ると、道路から小溝を隔てた、芋畑の中に倒れて、虫の呼吸になつて居る、その惨状は二た眼と見られないほどだ。

『これは幾太郎殿か、御舎弟には意外の御災難にて、何とも申上げやうも御座らぬ』

『早速御駈つけ下されて、忝けなう存じまする』

『御挨拶痛み入ります、實は駈つけし甲斐もなく、兇徒に逃げられましてな』

『イヤ、御蔭を以て重傷ながら、絶息の一刀は助かりました』

それからそれへと、挨拶の受渡しは此場合に甚だ迷惑な次第であるが、止むを得ず一通りは済ませて、之れから重傷に呻吟く聞多を連れて歸つた。

その連れて歸るに就て、斯ういふ説がある、一本松の墓守で八藏といふ男が、城下へ買物に行つた歸途に、この騒ぎに出會したので早腰を抜いて畑の中に座つて居た、その前に聞多が倒れたので、八

藏は氣も魂も身に添はず、ぶる／＼顛へて居ると、追迫人が駈けつけて賑やかになつたから正氣づいた、さて聞多を連れ歸るといふ段になつて、全身に渡る負傷で手のつけやうがない、連れ歸るにしても、何處から手をつけて可いか、之れには集つた人も幾太郎も困つて居る、その様子を見て八藏は土を運ぶ春を持つて來て。

『旦那様、之れは如何で御座いますか』

幾太郎は振り返つて、

『そりや何ぢや』

『春で御座います』

『それを何う仕やうといふのか』

『これへ、お載せ遊ばして擔いで行つたら如何で御座いませう』

『イヤ、そりや不可よ、聞多は武士ぢやからな、春へは載せられぬ』

『へへ』

それから戸板を持つて來たものがあつて、聞多を載せて引上げたといふ話を聞いた、この場合に幾太郎が、武士の面目を思ふて春を拒んだのは、弟を想ふ情と武士氣質の半面が現はれて、實に後世へ傳ふ可き美談であると思ふ。

さて幾太郎が邸へ歸つて、すぐに醫者を迎へて療治を頼んだ、所が、未だ醫術の開けて居ない當時のことで、來た醫者も、この重傷を見ては手のつけやうがない、徒らに相談に時刻を送るばかりであつた、この儘なら聞多は死ぬ外はなかつたのだ、然るに、意外なる救ひの神が舞ひ込むで來て、聞多を助けたといふ奇談がある。

美濃國大垣の近村から出て來た人で、所都太郎といふ浪士があつた、この人は夙に勤王の志を抱いて、はやく故郷を離れ、諸國を漂流した末に、大阪へ流れついた、その時分に評判の緒方弘庵の塾にはいつて、蘭學の教授を受ける傍ら、外科の手術を手傳つて居たが、元來器用な質であるから、何事にも呑込みがよく醫術を専門に學び居る門人よりか、都太郎の方が出来るやうになつたので、緒方先生からも勸られて、自分も修業する心になつて、醫術は一通り覚えて了つた。

この人が、山口へ遣つて來て、同志の人の勤めに従ひ、之れから醫者を始めやうといふ所であつた、固より聞多とも深い交りのあつて、何時も聞多の相談相手になつて居たのが、聞多が一本松で斬られて、今虫の呼吸で居ると聞いて、早速見舞に遣つて來た所が、醫者は二人迄も來て居ながら、未だ療治にもかゝらぬ様子だ。

『先生、はやく御療治をなさらんと、生命が保ちますまい』

『左様、何うもむづかしい』

『はやく療治をなさい』

『はア……』

都太郎は堪まりかねて、羽織を脱いだ。

△疊針で創口を縫ふ

『失禮では御座るが、拙者が御引受け申す、御兩所は御手傳ひ下され』

二人の醫者は眼を圓く仕た。

『ははア、貴君が療治をなさるのかね』

『左様……』

『この療治を……』

『如何にも……』

何うして此重傷を負ふて居るものを、普通のもが手を出す杯とは、身のほどを知らぬも程度のあつたものと、心のうちには思つても、豈夫口へは出せぬ、兎に角、自分等も持餘して居たのだから。

『誰人が療治を爲さらうと、御當家でさへ御承知なら差支へは御座らぬ』

『當家に異存のあらう筈は御座らぬ、さア疵口を御洗ひ下され』

郁太郎の鼻息が荒いので、醫者も些さか面喰つて療治の手傳を始めた、愈よ疵口を縫ひにかゝると、針が役に立たぬ、是れほどの大きな疵を縫ふ針ぢやない。

『この針は不可ませんな、他に針はないのですか』

『はア』

聞多の母と兄は、心配さうに見て居る、所は幾太郎に向つて。

『何か、是れに代へるやうな針は、御持合せがありませんか』

『人間を縫ふ針といふては、他に……』

母は氣がついて幾太郎に私語た。

『さうでしたな、如何でせうか、疊屋が残して參つた針が御座りますが』

『うむ、そりや可からう、鳥渡御持下され』

やがて幾太郎が持つて來た、疊針十二本を所は手に載せて。

『これで結構……』

そのうちの一本を採つて、之れから所が縫ひはじめた、何しろ緒方の塾で習つて來たのだ、手術は正確なものである、最初は半信半疑で手傳つて居た醫者も、終には感服して恰で弟子のやうになつて、よく所の言ふことを聽いて、手傳つて居る、所も一生懸命になつて腕を揮つたから、天明までに悉皆

縫ひ了つた。

所に相當の手術があつて、美事に療治は爲たのだが、それでも半夜を費したのだ、醫術の進んだ今日から考へれば、實に馬鹿らしい位のものだ、氣の利いた女なら、一晩に單衣の五六枚は縫ふだらう。

役所へ此届けを出したが、役方の出張はなかつた、聞多は人事不省に一夜を送つて、未だ生氣に復さない、物言ふことさへ叶はぬのである、見舞の人は絶えず來るけれど、本人は少しも知らず、全く昏睡して居るのであつた、見舞に來た人は勿論、家人でさへ是れが助からうとは一人として思ふものはなかつた、況して明治四十四年の今日に、彼の頑健な老人を見て、それが袖付橋の遭難者と思ふものはなからう。

此に聞多の運が強かつた、といふについて三つの不思議がある、それを述べやう。
第一が、斬りかけられた時に、刀を抜合せる間もなく、足を持つて引倒された、それが聞多の僥幸であつたのだ、昔は武家の作法が厳正しかつたもので、假令不意討にもせよ、刀を抜合せる間がない、といふのは、武士の耻辱である、如何なる場合でも、さらに油斷のないのを以て武士の心得としてあつたのだ、暗撃に逢ふて力及ばず、その場に殺されても、刀の柄に手をかけて死んで居たら、半知行は残される、柄にも手をかけず空しく殺されて居たら、知行は取上げられて、家は取潰されるもので

ある、井上が不意を襲はれて、刀を抜く間のなかつた、それが却つて僥倖で、太刀が背中の方へ廻つた爲めに、胴切にならずに済むだといふ、不思議な運とは、斯ういふことをいふのだらう。

△祇園の花

第二は、所部太郎が駆けつけて来たので、生命が助かつたのだ、若し、彼の時に所が来ないで、療治に手後れがあつたら、恐らく井上は、その時に死んだらう真物の醫者が驚いて居て手を下さぬのを所は自ら進んで療治を仕て呉れたので、僥倖に生命拾ひを仕たのだ、尤も、井上の身體が、特別に丈夫に出来て居たのは、彼れ丈の負傷を仕て居て、生命を取止めた一因には相違ない。

所は、その後ち山口で死んだ、不幸にして實子がなかつたので、友人が集つて葬儀は済ませた、間もなく徳川が倒れて明治政府が起り、井上も出世して大臣となつた、然るに、井上は極めて義理堅い人であるから、昔のことを追憶して、袖付橋の遭難を想ふと所の恩は忘れぬ、本人は既に現世のものでないとしても、その遺族は何として居るであらうか、自分は遺族に對して、亡き人の恩に酬ゆる丈けのことを仕なければ、人間としての義務が濟まぬ、といふので、他人の手を煩はして迄、苦心の末漸く所の甥が、只つた一人居たのを捜出して、今は之れを自分が引取つて、千葉の醫學校に入れてある、井上の隠れたる美しい點は、斯ういふ點にあるのだ。

第三が何かといふに、之れに就ては、彼アいふ風の人に、不似合な艶ッばい物語があるのだ、それは何んなことかといふに、畢竟は女の御蔭で助かつた、といふのだから、鳥渡妙な話だと思ふ。

文久の昔、井上が未だ漸く廿七八といふ男振り、攘夷勤王で頻りに騒いで居た時分のことだ、京都の祇園に、君尾といふ藝妓があつて、歳は鬼も笑ふといふ十六七、容貌も並優れて祇園に評判の名花一輪、曳手數多の客のうちで、この人ならばと打込んだ對手が聞多であつた、左様なれば、聞多の方でも逆上せて来る、互ひに逢瀬の繁くなるにつれて、はや、祇園へ足を入れるほどのものへ、二人の交情は知れ渡つた、時に文久三年の春、例の英吉利密航について、聞多は同志のものと京都を離れることになつた、固より生命を賭けての密航であるから、生きて復び京都の土を履むことの十に八九は至難しい、といふので、夢寐の間も忘れぬ君尾の許へ、それとなく別れを告げに来た。

馴染の酒亭から迎ひにやると、直ぐに君尾は遣つて来た、さて顔を見ると、流石にそれと發言しかねて、聞多は何となく逡巡して居る、君尾は疾くもそれを視て取つた、歳は弱いが花柳の巷に人と爲つたものは、他の氣色や態度を視ることが速い。

『郎君の御顔色の悪いこと、それに最前からの御様子といひ、今日は何か仔細のあるやうに思はれますが、御遠慮なう御話し下さりませ』

斯ういはれては最早躊躇ふこともならぬ、聞多は膝を進めて。

『實は少し語度いことがあつてのう』

『はア……………』

『己は遠い國へ行くよ』

『ゑッ、遠い國とは、そりや何邊で御座いますか』

『蝦夷の方ぢや』

『蝦夷ッ、それでは彼の追分節の松前の方なのですか』

『左様ぢや』

『殿様の御用でも御座いまして……………』

『うむ、殿様御沙汰ぢや、が少し長い逗留になるから、事に依ると是れが生別になるかも知れんよ』

君尾は驚いて。

『それは又た何ういふ理由で……………』

『人間は老生不定といふから、何ういふ災難で、生命を失ふかも知れんからな』

『御用の御都合で遠い國へおいで遊ばすのは、そりや可いとしても、左様な心細いこと仰しやッては、何だか妾しは悲しいやうな氣が仕まして、跡に残るのは厭ですから、何卒一途に伴れて行つて下さいませ』

芝居なら膝に取付いて、大向を唸らせる所だ、井上先生彼んな濼い面を仕て居て、却々隅に置けない人だ。

その別れる時に、紀念として君尾から貰つた鏡を懐中して居たのだ、その上を突かれたから、ガチンと音が仕ても、身體には少しの疵も附かなかつたのである、藝妓買の功能も斯ういふ點に在る、と思つたら世間の細君たる者決して嫉妬ぬに限る。

△瀕死の枕頭

高杉晋作は秋へ歸つて、同士の糾合にかゝつて居た、所へ、山口から急報があつて、井上が暗撃されたといふので、すぐに馬に乗つて駆けつけた、山口へ着いて聞くと、幸ひに井上は生命を取留めたらしいが、開戦論の同志は既に閉門謹慎を命せられ、重きは入獄させられて居る、さては井上が暗撃も、愈よ恭順派の所爲であると覺つて、その憤慨は非常であつた。

幾太郎の宅へ來たのが、既う黄昏の刻であつた、門前でバツタリ出合つたのが伊藤俊輔である。

『やッ、伊藤か』

『おう、高杉ッ』

『何日歸つたか』

『三四日前に下の關へ着いて、今ま漸く此處まで來たのぢや』

『聞多の斬られたのを知つて居るか』

『うむ聞いた、途中で聞いて、實は半信半疑で居たが、今ま所都太郎に逢つて聞いたら、意外の重傷ぢやといふのでまた驚いたが、全體何ういふ事情か』

『己れも變を聞いて駆けつけたばかりぢやから、未だ詳しいことは知らん、がいづれ恭順派の奴等の所爲に違ひないさ』

『まア、兎に角、はいらう』

『その上の話と仕やうか』

『それが可い』

兩人は連れ立つてはいつて來た、幾太郎は見るからに、胸も迫つて疾や涙に暮れて居る。

『やア、意外の事變で……聞多は重傷を仕たさうぢやね』

『而て、その後の容子は、何うであらうか』

幾太郎は兩人から質かれて元氣もなく。

『何分にも、十數ヶ所の深傷ぢやから、本復のほども計り難い』

『ゑッ、そんな重態か』

『何は兎に角、聞多に逢つて見やうぢやないか』

『うむ、左様仕やう』

これから兩人は、幾太郎の案内で、聞多の枕頭へ坐つた。

△親友の聲

大概な人ならば疾くに死んで居る可き筈の、この大負傷にそんな様子もない、けれども、流石に出

血が多かつたので、只だ昏々として眠るばかりである。

『オーイ、聞多ッ、已れは晋作ぢや、シツかり仕て居れよ』

『うーむ、うーむ』

交情の善かつた俊輔は、この有様を視て泣いて居るのだ。

『伊藤ッ、貴様も呼んで見ろ、耳が大分遠いやうだ』

高杉に代つて、今度は俊輔が。

『オーイ、聞多ッ、オーイ』

と、重ねて呼ぶ、高杉も聲を限りに呼んだ、その心の通じてか、聞多は少し眼を開いて四邊を見廻したが、兩人の姿は見えないものか、その儘ま何の辭もなく、再び静かに眠つて了つた。

兄の幾太郎は、この様子を見て居て、思はず聞多の肩に手をかけた。

「聞多ッ、氣を確かに仕て聞けよ、今高杉伊藤の御兩所が見えたのちや、如何に重傷とはいひ乍ら、貴様も武士ではないか、心を靜かに御兩所へ申上げることのあるならば、はやく申さぬか」
骨肉の情は恐ろしいものだ、聞多はバツと眼を開いて、デロリ／＼見て居たが、ニヤリと笑つた、兩人は均しく膝を進めて。

「おう、晋作ちや」

「己れは俊輔ちやよ、しツかり仕て呉れ」

聞多は軽く首肯した。

「貴様の復讐は、己れが引受けるから、心を丈夫に有つて居れよ」

「この俊輔も、高杉と共に貴様の仇討は必と爲るぞ」

昏昏として復た眠りに入つた聞多には、それが聞えたか何うか、まことに心細い限りである。

△苦しき息の下に遁の字

眠つて居るといふよりは、半分死んで居るといふた方が至當なのだ、生れついて身體が丈夫であつたのと、剛情な勝氣の多い人であつたから、それで生命が保つて居るのだ、これほどの重傷で、萬一

膝を立直すと、例の一刀持變へて、ぶツつり鯉口を切つて居合腰になつて、今や聞多を斬らうといふ身の構へだ。

間の襖を押開ひて、ばら／＼と走せ出たのは、兩人の爲めには生の母。

「お待ちなさい」

思ひも寄らぬ母の一聲に、幾太郎も些さか力が弛んで、刀は抜き得なかつた。

「ヤッ、母上……」

「何を爲さる」

「ハイ」

「この聞多は、妾が悴ちや、お前何と爲さる覺悟か」

流石に返辭が直ぐ出なかつた。

「さ、その理由聞かう」

△武士の意氣地

幾太郎は母の前に兩手をついて、しばらくは黙まつて居たが。

「何とも相済みませぬ、貴母の御許しも受けず、聞多を殺さうといたしましたのは、私が悪う御座り

ました』

『あッ、聞多を殺すとは、そりや、何ういふ理由で……』

『この負傷では生命も保ちますまい、所詮は死ぬ可き聞多の、この苦痛を見るに忍びず、寧ろ兄の私
が手にかけて一と思ひに苦痛を除いて遣さうと存じまして……』

『そりや、何といふ馬鹿なことを、假し無い生命と見究めが決かうとも、兄のお前が手にかけやうと
は何事ぢや、いゝや、そりや、妾が爲せませぬ、たとへ何れほどの負傷であらうとも、妾の一心は
神や佛も見そなはず、必と一度は本復させまする』

息を喘ませての母の辭を聞いて、幾太郎は倍々恐縮するの外はない。

『恐れ入りました、この上は、及ばぬまでも看護を仕り、弓矢八幡に祈つて聞多の本復に力を致し
ませう』

『何うか左様して下さい、妾も是れで安心いたしました』

幾太郎は聞多の耳へ口を寄せて。

『母上の御心配に對しても、お前は一たび舊の體にならねば、相濟まんぞ、お前の今日までは、君公
に對してこそ忠義も盡したが、親に對しては不孝至極であるぞ、何うぢや、解つたか』

聞多は軽く點頭いた、後年になつてから、聞多の語る所に依れば、この時の兄の一言は、微かにそれ

と聞へて、心には母へ對して相濟まぬと、思つたが、何うしても口が利けなかつたとのことである。
昔の武士は妙に意地の在つたもので、弟が可愛想だから殺してやる杯は、今時の人情を以て解す
ることの出来ないことだ、それにしても、聞多の母は、實に偉かつたと思ふ、聞多の今日あるは、全
く母の賜といふても不可はなからう。

△未だ生きて居る

遭難の届は直ぐに出したのだから、早速に検視の役人が來なければならぬ筈であるのに、二日三日
と經つて、四日目に漸く其沙汰があつた、これは何ういふ次第かといふに、井上が袖付橋で斬られた
と聞いて、平生から井上を憎むで居る連中は、密かに手を拍つて相祝したのだ、殊に、恭順派の重役
は、之れを聞いて。

『彼奴が斬られたとは實に愉快だ、最う死んだらうか、何うか、烏渡覗かせてやらう』

と、いつたやうな調子で、ひそかに状況を見せにやると、未だ生きて居るといふ報告があつたから、
うツかり検視役を遣つて、萬一にも下手人のこと杯を、詳しく言はれると、後日に面倒が起る故、可
成くは死んでから、臨檢させやうといふ下心があつて、それで逡巡して居たのである、所が、漸次快
癒なるといふので、最早この上引き延ばすことは出来ない、此に於て、無據く役人を出すことに仕

たのである。

誰れが視ても助かる見込みのない、といふのに、本人の聞多は、日増に良くなつて来て、三日目の晩には、自ら水を求めるやうになつた、四日目の朝には、苦しい息を吐き乍ら、微かな聲で一言二言は何か言へるやうになつたので、母と兄の喜びは喩ふるに物もない位である、今日も丁度、所郁太郎が来て、診察を了つた所だ。

「如何で御座います、御見込のほどは……」

母は幾分の安心はあるやうなもの、未だ心配の方が多い。

「イヤ、この分では見込みがありますぞ」

「ゑッ、助かりませうか」

兄も膝を進めて。

「回復しがつきませうかな」

所は沈着いた調子で。

「實に不思議といふの外は御座らぬ、彼れほどに斬られて、即死も爲すに今日まで保越すばかりか、追々脈も良くなつて、元氣も出て來るとは、こりや醫者の力ぢや御座らぬ、弓矢神の御加護と申す外はない」

之れを聞いては、母も兄も大安心、最初から至難しく診て居たのに、所が斯ういふやうでは確に見込みがあるに違ひないと、今は兩人ともに嬉れし涙に咽ぶほどであつた。

△検視の役人

折柄、検視の役人が見えたといふので、母と所は別室へ退つて、兄の幾太郎が出迎へると、兼て懇意の國司四郎福原實であつた。

「これは御兩所、御役御苦勞に存じまする」

「御挨拶痛み入る、當家にては意外の珍事、定めて御心配の儀と存じ申す」

「さ、何卒御通り下さい」

「御免下さい」

是れから二人は幾太郎に案内されて、聞多の負傷を検視の上、幾太郎に就て當夜のすることを聴取つた。

「聞多儀、御覽の如き重傷にて、物言ふことすら思ふに任せず、今朝より自分へ對して、途絶れ〜に申聞けましたる始終、是れにて申述べ度う考へまするが、御許し下さりませうや、伺ひまする」
「そりや差岡へない、何事か承まはらう」

「御許し下さりまして難有う存じまする、聞多申しまするには、撃つも撃たるも、君家を思ふ、忠義の心から起りまじたる、この度の事變、自分に於ては更に仇とも怨とも存じませぬ故、下手人の儀は、この儘ま御打捨置き下さるやう頭ひ度き旨、私へ申聞けましたるに由つて、此儀重役御掛へ可然く御取次ぎのほど、願ひ上げまする」

役人も此申出には、只だ感服して引取つた、何うです昔の武士は、斯ういふ心を有つて居たものだ、今の世の人は、尻を放つたやうなこと迄も、裁判沙汰に爲るぢやないか、時代が異ふなどの負惜みを言はずと、少しは男子らしい氣を有つたら何うだらう。

△晋作の博多着

話頭を變へて高杉のことを少し述べ度い、晋作は井上の宅を出て、伊藤に別れた後には、只だ一人となつて下之關へ乗込むで来た、何う考へて見ても、暫時は長防を離れた方が可い、それにしても何邊へ行つたものか、その行先に由つては却つて災害を招くやうなものだから、流石の晋作も之には一時弱つたが、僥倖にも筑前の中村圓太と請ふ人に邂逅して、山口に於ての事變を物語つたので、中村も大に同情を仕て。
「宜しい、拙者が筑前へ御伴れ申さう」

「それは忝けないが、筑前の何方へ……」

「博多が可からう」

「アツハ、……、馬鹿なことを言はッしやるな、足下は藩牢を破つて来たのぢやないか、そんな人に案内されるのは、薪を抱いて火に飛込むやうなものぢや、駄目々々」

中村は手を振つて。

「イヤ、その御心配は御無用ぢや、拙者には別に考へも御座れば、御懸念なく御任せ下され」

「何ういふ御考へがあるか、それ聞かう」

「同じ藩士には、拙者の同志も多く御座る、豈夫に死地へ導くやうなことは爲ぬつもりぢや」

快活にして大膽な晋作、この一言を聞いて、その上に疑惑を挟むやうな女々しい男ぢやない。

「それぢや、百事御任せ申さう」

「御引受け申した」

斯う決まれば誰れにしても、すぐにも出かけやうといふのが、まづ一般の人情である、所が、晋作は思ひの外に平氣で、稻荷新地の馴染の樓で、また一と晩遊んで、それから船を仕立て、海路を博多へ向つて出帆に及んだ。

△亦英雄の一癖

松陰門下の二俊と謂はれたのが、久阪玄瑞と高杉である、久阪は既に京都の變で斃れて了つた、残るは晋作一人、今日で謂ふ肺結核のやうな病氣があつて、到底長命は出來ないといふことは、自分でも覺悟して居たらしい、ただ元氣一つで、その弱い身體を強く働かせて居たのだ、酒も飲めば女も買ふ、放蕩は随分行つたものだといふ、奇兵隊の全盛時代に、晋作の勢力は非常であつたが、下之關の花柳社會でも、高杉隊長といつたら、飛鳥を落す勢ひがあつて、さかんに豪遊を仕たものだ、それが他のやうに、隠して密々やつた後の口を拭いて、何喰はぬ面をして居る、といふやうな、變な遣方は仕なかつた、晋作の遊びは何時も正々堂々で、この點は伊藤公と少しも違はなかつた。義經袴にぶつ裂羽織、長い刀を落差に仕して、熟柿のやうな呼吸を吐きながら、繪日傘を高く掲げて、狭い下之關の市街をゾロ／＼藝妓を引連れながら、横行闊歩して少しも憚らなかつた位で、何事につけても磊落落洒脱な調子の、それが俗人の心を引付けて、晋作の人氣は實に偉いものであつた。

△長襦袢の前で獨酌

さればとて、晉に俗受けばかりぢやない、同志の間に於ても、その生々した舉動が、何となく他に

快感を與へて、高杉高杉と言つて、大層持囃されたものだ。

陣屋へ詰めて居る時は、女の臭ひも嗅ぐことが出來ない、如何に高杉でも、陣屋の規則は破れないから、雨の夜の徒然などには、随分弱ることもあつて、苦し紛れの究策から、馴染の藝妓の長襦袢を持つて来て、之れを衣紋掛にかけ、その前で獨酌に心を慰することも屢次であつたといふ。

松陰先生の門に入つてから、何うしても久阪に及ばぬことがあつた、それは讀書の一事であるが、晋作は一向平氣で居たのを、先生から懇々論されたので終に屈して書に親むだから、終に久坂を凌ぐほどの人物になつた、俗論黨の人々が、聞多を斃すことにはかり熱中して、この晋作を等閑に附したのは、全く策を得た者とは言へぬ、晋作も機を見て筑前に去つたのは、自分の爲めには勿論可かつたのだが、また藩の爲めにも可かつたのである。

△一片の俠氣

昔は町人でも却々豪いものがあつた、赤穂義士傳の引合に出る、例の天野屋利兵衛のやうなのは、幾何もあつたのだ、只だ世間に知られたのと、全く知られずに濟むだのと、その相違こそあれ、堂々たる武士でも猶且つ及ばぬほどの町人は、決して少なくはなかつたのである。

博多の魚問屋に、石藏屋卯兵衛といふものがあつて、能く勤王の志士の爲めに、骨身を惜まず盡し

たものであるが、中村圓太も博多を脱走する時分に、この人に容易ならぬ厄介をかけて、卯兵衛が一片の義侠心は、この圓太を救ふたのである、それを頼つて高杉の身を托さう、といふつもりで、圓太から打明話を爲ると。

『町人風情の私を見込んで、秘密なことまで打明けての御頼みでは、私も男子で御座へやすから、御引受け申しませう』

『それは千萬忝けない、實は足下のごときは高杉にも話してあるのぢや、然らば何分ともに御願ひ致す』
『幸ひ奥二階が空いて居りますから、高杉様を隠匿ふには此上もない都合、他視にかゝらぬやう、今夜遅く御伴れなせへ』

『それでは、一先づ引取らう』

『併し、旦那も危ねへ身の上ですから、出入には随分御心を……』

『御信切は忝けない、充分要領は致して居る』
之れで圓太は引取つた、卯兵衛はそれとなく奥二階の掃除を爲せて、心待ちに高杉の來るのを待つて居る。

△金で買へぬ氣合

約束を破つたり、他を陥れたり爲ることを平氣で行つて居る、當世の紳士に、卯兵衛の爪の垢でも吞ませて見たい、少しは人間らしくなるであらう、國家の大事に任ずるものでも、この氣節は是非有つて居て貫ひ度い、卯兵衛が一諾を重んじて、高杉の爲めに盡したことは、却々に立派なものであつた、そればかりでなく、終には奇兵隊の一人となつて、武士も及ばぬ最期を遂げた、その顛末を述べたら面白いこともあるが、餘り長くなるから、それは略すことに爲るが、兎に角、卯兵衛は豪い人であつた。

却説、高杉は他視を忍び、船のうちで待つて居る所へ、中村が歸つて來て、卯兵衛の快諾して呉れた旨を告げたから。

『何から何まで御配慮の段は、厚く御禮申す、その卯兵衛とやら申す町人、我等身の上を承知で寄宿を許し呉るゝとは、實に驚き入つたる丈夫の魂、腰拔武士の手下ともなる可きものぢや』

『要が魚問屋の主人ではあるが、之れは全くの俠客で御座るよ』
夜に入るを待つて、兩人は石藏屋へやつて來た、要領深い卯兵衛は、街の入口に待つて居て、密かに裏の木戸から二階へ忍ばせた。

『この御方が、高杉氏ぢや』
卯兵衛は席を下つて。

『はッ、お初に御目通りいたします、私は卯兵衛と申しまして、鯛や鯛の世話を致して居りますもの、何分ともに御引立てのほどを願ひ上げまする』

『拙者は高杉ぢや、中村氏から御願ひ申せし所、早速の御承知で忝けない、今日からは拙者も、その鯛や鯛の仲間入りぢや、ハッハ、、、』

人間といふものは、氣合一つの交際だ、イヤ己れは金の方だといふものがあるかも知れないが、そんな奴は人間の屑だ、金なんでもものは、百萬兩あつても千萬兩あつても、人間の價値にや少しも關係はない、金で賣買の出来ないのが、人間の氣合といふものだ、金で豪さうに仕て居る奴は、金が無くなりや零になる、氣合ひで立つ人は何時見ても尊いものだ、一つ二つの應接のうちに高杉と卯兵衛の氣合がすっかりはまつたから、高杉は心から卯兵衛を信する、卯兵衛は高杉を心から尊ぶ、これが則ち心友といふものだ。

△石藏屋の蟄居

卯兵衛の心底を見込むで、高杉から國元の變事を物語つた、それを聞いてからの卯兵衛は、一層の深切を以て、飽迄も高杉の爲めに盡さうといふ考へになつた。

この時分の黒田藩は、未だ佐幕派の勢力が強かつたので、勤王派は何時も其壓迫を受けて居た、併

し、勤王派の人々は深く信する所があつたことだから、佐幕派から加られる壓迫の強くなるほど、その決心は倍々堅くなるばかりで、少數ながらも能く反抗を續けて居る、そのうちでも、早川勇月形洗藏の二人は、非常な覺悟を以て常に東西に奔走して、勤王の大義を唱へて居たのだ、之れが爲めに幾度か長州へも往復して、高杉とは曾て相許したこともある、中村圓太が不意に歸つて来て、高杉を同行したことを告げたので二人は早速石藏屋へ高杉を訪ねた、斯いふことは秘密に爲るほど漏れるもので、追々勤王派の人へ傳つて、それからそれへと知るに従つて訪ねて来る、終には石藏屋の奥二階は、勤王派の密會所といふやうになつた。

秘密といふことは絶対に保ち難いもので、二人以上の關係になれば、もう秘密は破れて居るのだ。

『これは秘密だよ、汝へだから話すが』
といふ冒頭で、秘密を聞いた奴が、また他へ行つて。

『實は君だから話すが』

と、同じことを繰返す、それが三人より四人、四人より五人と、漸次擴がつて行くもので、何が秘密なのか殆んど解らないことになつて了ふものだ、高杉のことが則ちそれと同じで、固より悪い考へからではないが、知る人の多くなる丈け、來訪するものも殖える道理であるから、自然高杉の評判が、佐幕派の方へも知れるのが當然である、其處で、藩論は必ず佐幕と決まつて居るのではないが、その

側の人が多いのだから、何うしても藩の方針は、勤王派を忌むことに傾く、これは勢ひで止むを得ない、従つて、高杉の滞博についても、大分喧ましいことを言ふものがあるので、この儘まに高杉を石蔵屋へ置くのは、頗る危険であるといふことになつて、早川月形の二人は、非常な苦心を以て、高杉の隠匿場を捜しに着手つた。

所が、本人の方は、他で心配するほどでもなく、有つて生れた性質の、却々座敷の隅に小さくなつて居ることは、固より出来る筈がない、最初は同志の勧告に従つて、一向外出も仕なかつたが、この頃では、夜になるとぶら／＼出かける、柳町の遊廊へも、足を入れるやうになつて来たので、誰れよりか一番に心配を始めたのが、主人の卯兵衛である。

『御免下さいませ』

聲をかけながら障子を開けた卯兵衛、見るより晋作は。

『やア、卯兵衛殿か』

『さぞ、御退屈で御座いませう』

『浮世を忍ぶ身の、斯うして居るはこれも勤務の一つでな、ハツハ、、、』

『その勤務を怠つては、第一が御身の不爲で御座りませう、第二には國元の御同志にも濟みますまい、卯兵衛は席に着いた。』

この頃は、大分悪所通ひもなさるやうに承はりますすが萬一のことでもありません、私の不念にもあります、何卒外出はなさらぬやうに願ひ度い、町人風情の私が斯う申上ましては如何にも失禮とは存じますれど、中村様から御引受致しましたる上は、生命にかけても貴下の御無事を謀らねばなりません。

赤心から出た忠告には、負けぬ氣の晋作も、只管謝するの外はない。

『イヤ、拙者が悪かつた、今後は大に慎むことに致す』

『左様相成りますれば、同志の御方も御喜びで御座りませう』

△女傑望東尼

黒田藩の大勢が、佐幕に傾いて居た丈けに、高杉を隠匿にしても困難が多い。それに、幕府では征長の議を決して、尾張大納言が其總督になる、といふやうな次第で、毛利に對して幾分の同情を仕て居る藩も、幕府を憚かつて容易に毛利の爲めに辯ずるものがないのみならず、却へつて、表面には征長御道理と、同意を爲ねばならぬ運になつて居るのだ、従つて、少しでも佐幕派の鼻息の荒い藩では勤王派の頭の擧る瀬はないのである、黒田藩も其一つであつたのだから、高杉に對する同情は充分に在つても、自ら進んで之れを救はうといふものは、極めて少くないのだ、幕府が之れから征伐しやう

といふ、長州藩の高杉とあつては、鳥渡手も出し難い譯だ。然るに、博多を離れること一里許の平尾山、その麓に庵をつくつて、浮世の塵を避けて居た、女傑野村望東尼といふ人があつた、良夫の新三郎に死なれてからは髪を落して寡婦生活、この時は既に五十路の坂を越えて居たが、それまでには随分辛いこともあつて、幾度か再縁を勧められたけれど、一たび斯うと覺悟した上は復び夫は迎へませぬと、斷然いふて、親類や知己に腹立たれたこともあつたが、年を経るに従つて、その貞操の堅固なるには誰とて感心せぬものはないほどで、前に腹を立つたものも、終には自分の不明を耻ぢて、望東尼の爲めに力を添へるやうになつた。

△棘の中の蓮花

時代と土地の關係も、無論在つたには相違ないが、九州には女傑が多かつた、併し、望東尼のやうな、男に淡泊な女傑は少くなかつた、多くの女傑は、偉いほど男と秘密の關係を有つて、随分淫奔なのがよくあつた、一例を挙げると、肥前大浦のお慶のやうなので、文久から慶應へかけて、長崎へ出入した浪士の、この女に世話を爲れない者は殆どない位だ、阪本龍馬陸奥宗光は固よりいふまでもないが、多くは秘密の關係を有つて居た、何も彼も豪いから、之れを女傑と稱するかも知れないが、餘んまり其方が豪すぎると、美しい方の偉い點が隠れて了うから困る、左様いふ女傑の多い中で、望東

尼はそれがなかつた、まことに美しい女傑である、殊に、歌よむ道にも秀いで、勤王の志は厚く、それが爲めに京都へも二三度は往復して居る位であるから、四方の志士にも相應に知られて居た。

△至誠未だ天に通ぜず

早川月形の二人は、この望東尼を頼むで、高杉を隠匿ふて貰はう、といふ考へになつて、早速その山莊へ訪ねて來た。

かねて知己の間柄として、望東尼は直ぐに二人を客室へ通して。

『能う御訪ね下されました、この頃は、城下へも絶えて参りませず、貴君方にもお目にかへりませぬでしたが、皆様にも相變らず御壯健でムリまするか』

『イヤ、我等は只だ頑健な丈で、何事も心の儘まにはならず、空しく日を送るばかりで御座るよ』
『昨今の取汰沙に由りますれば、毛利様御藩も大層に御困難の趣き、勤王無二の毛利藩の、斯かる有様になりましたるも、畢竟は勤王同志の誠が天に通せぬ爲めと、ふかく耻入る次第で御座りまする』

と、女ながらも天下の重きに任ずる志は自然に其人を男に化して居るのだ、この憤慨を聞いた、二人は共に膝を進めて。

『左様仰せられては何共汗顔の至りで御座る、全く我等の熱誠が未だ足らぬに違ひない、この上は、只だ一死以て皇室の御爲め相盡さねばなりません』

早川の答へは斯うであつた、月形も均しく口を開いて。

『早川の申す通り、拙者の覺悟も其所に在りまするぢや』

そのうちも望東尼は、遙かに東の方を拜して、心に皇室の御安體を祈るのであつた。

△高杉嬉しさに泣く

實は斯ういふ次第で、高杉晋作が長州から遁れて来た、今は石藏屋に居るが、漸く人の知る所となつて、何分にも危険であるから、那邊かへ隠匿はねばならぬ、それについて同志の考へでは、貴女にお頼み致し度い、とのことで、我等が代つて御依頼に來たのぢやが、御引受け下さることは出来まいか、と折入つての頼みを聞いた望東尼は。

『始めて承はりました高杉様の事、それまでの御頼みとありましては、御引受けいたす外はありませぬ、なれども足らはぬ勝ちの女住ひ、それさへ御不承下さるなら、妾に異存はふりませぬ』

『その御懸念は御無用、唯だ高杉の危急を救ふの御心を以て、暫時御世話を願ひ上げまする』

『宜しう御座います、及ばずながら御世話申上げませう』

望東尼の快諾を得て、早川と月形の喜びは尋常でない、すぐに平尾山莊を辭して飛ぶが如く石藏屋へ歸つて来た。

『漸く良い場所を見付けて来たよ』

座り乍らに早川は斯ういふた。

『やア』

寝轉んで居た晋作は、起き上つて兩人に向つた。

『野村望東尼といふ婦人があることは、兼て話して置たが、その婦人は大概の武士も及ばぬ女丈夫ぢや、今ま兩人で足下のことを頼んだ所、潔よい返辭で承知して呉れたから、今夜にも移つたら可からう』

『それは千萬忝けない、當家主にも其事を明かして、兎に角移ることに仕よう』

『それぢや、卯兵衛を呼ばう』

『うむ』

是れから卯兵衛を呼んで、月形から事情を打明けた、卯兵衛には固より異存のある可き筈もない。

『それは何よりの事でした、何うも昨今の様子では、私も不安心に思つて居りましたので、左様ありますれば高杉様の御安體、私も共に御送り申ませう』

晋作は手をついて頭を下げた。

「何から何まで、御世話に預つて御禮の申さうやうもない、平尾山へ立退いても、また機會を見ては御訪ねいたすから、何分宜しくお頼み申す」

「御挨拶で痛み入ります、まことに不行届で御座りました」

「さ、御兩所參らうか」

はや晋作は立上つた、早川月形も共に、跡から卯兵衛もついでいた。

その晩から、晋作は平尾山莊の人となつた、望東尼が心からの款待には、流石の晋作も嬉し泣きに泣いた。

斯るうちに、長州征伐の幕軍は、尾張大納言が總督として、藝備の國境へ迫つて来た、大納言の本

營は、廣島城下へ設けられる、閑老の小笠原壹岐守も来て居る、戦機は刻一刻と迫つて来た。

之れに對する毛利藩は何うか、といふに、聞多の斬られた晩から、また藩論は一變して、武備恭順

派は閉息して了つて恭順派の方が勢力を得たから堪まらない、聞多は疵の全癒せざるうちに、野山の

獄へ繋がれた、かくて幕府へ對する申譯としては、大膳大夫親子を寺へ押籠め、上下服装までも改め

て、ふかく謹慎の意を表した、全然降参の支度であつたのは、實に不甲斐ないことである。

この時に、薩藩の西郷吉之助が、何とかして毛利を救ひ度いの心から、奔走頗る勗めて、終に吉川

監物を設きつけた、元治元年の境町御門の一戦については、國司信濃益田彈正福原越後の三國老、それに周布政之助(平實父)中村九郎外數名ものが切腹して、謝罪毛利侯父子は謹慎して後ちの御沙汰を待つ、といふ仲裁案が成立つて、いよいよ左様と決したので、長防二州は恰で火の消えた跡のやうな、哀れな寂しい状況になつた。

△長州征伐の逡巡

文久三年の京都の政變とは、薩藩が長州藩の専横を憤つて會津藩と結び、一夜にして毛利派を朝廷から斥けて了つたことをいふのであるが、之れに對する長州藩士の怨みは、容易に忘れることの出来ぬほどに深いものであつた、薩賊會奸の語が、一時流行つたのも即ちそれが爲めである、西郷は流石に遠い前途を視るの眼があるから、長く毛利と反目して居るのは良くない、文久の事は、只だ其時丈けのことで、互ひに感情から來た衝突であるから、今日となつては忘れて仕舞うが可い、けれども、その悪感情は薩藩の方から挑發したのだから、従つて、長州藩士の心を和げるのは、薩藩の責任であるといふ考へを以て、征長問題について西郷の盡力は非常であつた。

然るに、征長總督の尾張大納言が、最初から征長の事を喜ばないで、只だ押付けられて止むを得ず請けた總督の役目であるから、敢て毛利に同情して居るといふほどでもないが、可成くは平和に局を

結び度いと思つて居たのだ、されば、開戦もそれが爲めに氣乗が仕ないで、何となく逡巡して居たのであつた。

所へ、西郷から内談を受けたので、總督も喜んで其盡力を待つことになつた、當時の事情は斯うであつたが、第一には西郷の人格が、總督を首肯させたのである、西郷は島津齊彬の寵を得て、その御蔭で諸侯の間に知られたのだ、齊彬といふ御方が、諸侯のうちに於て、一番に抜けて居た名君であつた、その人の信用が深いといふ所から、自然と諸侯の間にも信用を受ける、齊彬も多く自分の代人として、西郷を諸侯へ使者としたのである、加ふるに、西郷の人格が、彼の通りであつたから、齊彬の亡き後ちも、諸侯から受けて居た信用に動きはなかつた、殊に尾張大納言は最も西郷を信用して居たから、一も二もなく西郷の意見を容れて、その取り扱ひを待つて居たのである。

△日本武士の龜鑑

この時代の武士は實に偉いものであつて、元來京都の戦ひは、世子長門守の意を受けて起つたことで、謂はゞ君命に由つて、君家の事に盡したのであつた、それを自分等の責任として、事局の解決をつける爲めに、一言の苦情も言はず、速かに腹を切つて死ぬ杯は、今時の薄ッべらなハイカラ紳士には鳥渡解らないことだらう、國司、益田、福原の三國老はいふ迄もなく、中村、周布の連中は、毛利

家の危急を救うた、眞に武士の模範であると思ふ。

その他にも二三の條件はあつたが、大體は事變の責任者が切腹したので、一先づ落着となつて、征長軍は引上げといふことに決した、併し、毛利父子は猶ほ寺院に入つて、幕府よりの沙汰がある迄、謹慎を爲て居るのである。

袖付橋の遭難に、既に危ふかつた生命を助かつて、疵も大概癒えたが、今は獄中の人となつた井上聞多、如何に負けぬ氣の剛情者も、籠の鳥では如何とも仕やうがない、固より詳しいことは判明らないが、三國老の切腹は、それとなく聞かせて呉れたものがあつて知つた、その時の憤慨は非常で、空しく一夜を眠らずに過した位である、けれども、それは只だ徒らに憤慨するばかりで、何とすることも出来なかつた。

『ア、高杉や伊藤が、安體で居て呉れたら、斯ういふことにもなるまいが、全體二人は何うしたか、罪もなき重臣に切腹まで爲せるといふ、それを黙つて見て居る筈はないが、斯うなつた所から考へるに、二人の身も、或は己と同じやうなことになつて居るのではなからうか、返へすくも殘念なは、長防三十六萬石の家中に、一人の義人もなく、この始末になつたかと思へば、ア、己は彼の時に、寧ろ殺された方が可かつたか知れない』
と、思はず纏言の出ることもある。

望東尼が親身も及ばぬ信切に、その日は氣樂に送つて居るもの、片時も忘れぬは故郷のこと、流石に快活洒脱の高杉も、時には鬱々として、家人に口さへ利かぬこともあつた。

△直ぐ歸國致さう

望東尼が親身も及ばぬ信切に、その日は氣樂に送つて居るもの、片時も忘れぬは故郷のこと、流石に快活洒脱の高杉も、時には鬱々として、家人に口さへ利かぬこともあつた。彼是れするうちに、元治元年も愈よ押詰つて、既う極月に近い霜月の中旬過であつた、此處は城下を離れた片山里のことだから、冬になつての淋しさは、又格別である、而かも、それが夜に入つては見渡す限り人影もなく、聞えるものは名も知れぬ怪鳥の聲と、庵主の望東尼が、頻りに咳入る苦しさうな、呼吸遣ひばかりである。

高杉は讀みかけた書物を伏せて、思はず太い息を吐いた。

「アー辛らんのう、斯うして何時まで居ることが、自分ながら一寸先きは闇黒ぢや、時に國元では、同志の人々も定めて苦勞のことぢやらうが、罪もないのに他國へ通れて、今では目的もない日蔭者、徒らに手を束ねてまた來る春を待つ身も辛いものぢや」

と、獨り嘆息の折柄、門の戸を烈しく叩くものがある、はて今頃に何者だらうと思つて居る所へ。

「高杉様、御客に御座ります」

「誰れかな」

「早川様に月形様が見えました」

「おう、左様か」

「お通し申ませうか」

「うむ、左様して呉れ」

執次の小女は立つて行く、間もなく二人は這入つて來た。

「やア」

「これは、能く來られたのう」

「何うぢや、退屈らしいが、少しは外へでも出るか」

「イヤ、この頃では一步も外へは出んよ」

「その方が安全で可からう」

「併し、無聊に苦むで人間を止め度くなることもあるが、左様も行かんでなハツハ、、、」

「時に、高杉ッ……………」

「うむ」

「些と懇談を遂げ度いことがあつて、二人揃うて參つたのぢや」

「何事か」

「貴下の御國元一條について……」

片時も忘れぬ國元のこと、さては異變でもあつてのことかと、高杉も少し焦り氣味で。

「而て、何ういふことか」

「國司益田福原の三國老は、切腹して相果て申した」

「やッ、何といはるゝか、三國老は切腹致したか、そ、そ、それは如何なる次第で御座るか」

月形も語を添へて、是れから事の顛末を物語つた。

「斯ういふ次第で御座つたが、さて、貴下へ懇談と申すは、この際、熟と虫を抑へて、徐かに時刻の

來るを待つて貰ひ度いのちや、若し輕舉事を誤るやうのことがあつては、それこそ一大事ぢやに由

つて、實は此事は深く秘しく今暫らくは語るまい、といふ説もあつたのちやが、イヤ、他の事とは

違ふから、一應は知らせた方が可いといふことになつて、我等兩人斯うして御訪ねいたした次第で

御座る」

眼を閉ぢ腕を組んで、熟と考へ込んで居た高杉は。

「よく御知らせ下された、藩侯御身の上は、何と相成つたらうか」

「その儀は、未だ決まらぬやうぢやが、目下は寺院に退いて謹慎中とのことで御座る」

高杉は威儀を整して。

「拙者は是より歸國いたさう」

「ゑッ、歸國せられると」

「左様」

斯ういふだらうと思つて、二人は同志から頼まれて、引留める役になつて居たのだ。

△望東尼に訣別

高杉の性質を能く知つて居る丈けに、この顛末を話したら、すぐ歸國するといふに違ひない、若し歸國すれば、反對のものが多いのだから、何うせ安穩に濟む譯はない、この際、高杉を殺して了ふのは、如何にも惜む可きことだ、寧ろ此事は暫らく秘して、いづれ機會を見てから打明けることに仕やうとなつたのを、また早川月形の二人から。

「それは只だ高杉の身を案じてのことだ、友誼は當さに左様なければならぬ、けれども毛利藩にそれだけの事變があつたことを、我等が知つて居て之れを告げずに置く、それが後日の故障にでもなつては、却つて相濟まぬことになるから、一應は本人の耳へも入れたが可い、その上で、本人が何ういふ手段を執るか、その手段に由つては、充分に注告も仕やう、如何に性急の高杉でも左迄無謀の

事を爲るとも思へぬ、これは二人で引受けて、高杉へ談じやう」といふことになつて、二人は夜を侵して平尾山莊へ遣つて來たのだ、所が、高杉は始終を聞いて、直ぐに歸國することになり、二人も些さか驚いて。

『その御覺悟は御道理ちやが、今ま此場合に歸國せらるゝは、薪を抱いて火を掻はんとするに均しく、實に危いことで御座るに由つて、猶ほ一應の御思慮を煩はし度い』と、二人が交々意見を爲るのを、高杉は頭を振つて。

『他のことは格別、君公の御身の上に、萬一の變でもあつては、それこそ一大事ちや、假し力は及ばずとも一たびは歸國いたさう、その事情を聞いて、他國に潜むで居ては、臣たるものゝ道が立ちますまい、兎に角、出立いたすことに決めやう』

一たび斯と決心したら、楨杆でも動ぬ晋作、それに、君公の危急と聞いて、自分は他國に潜で居ことは出來ない、と云ふのは全く君臣の情誼を能く汲だことで、苟も武士としては斯う在る可きである、と二人も此一言には反對が出來なかつた。

『イヤ、それ迄の御覺悟とあつては、もはや御引留申さぬ、足下の思ひ通りになさるが可い』

『御同意下されて千萬添けない』

『併し、暴虎憑河の勇は、飽迄も慎んで下され』

『そりや御心配には及ばぬ、自分も多少の見込みあつての歸國で御座る』

相談は決まつて高杉は出立することになつた、それについては、庵主の望東尼へ挨拶して行かねばならぬ、この事情を打明けたものか、それとも、一時遁れのことを言ふて、取敢へず出立して了はうか、何方に仕たものであらうと、之れも烏渡面倒な相談だ。

『こりやア、一切を打明けた方が可からう』

と發言したのは晋作、早川は聲をひそめて。

『庵主は女丈夫に相違ないが、併し、如何豪くも女子ぢやからな』

晋作は之れを抑へるやうに。

『そりや違ふ、女子にもせよ、是迄の厚意、殊に拙者の身の上を承知の上で、今日まで隠匿ふて呉れたのは、堂々たる五尺の男子も猶ほ容易に仕て呉れることでない、斯うして居るうちに、よく庵主の心は解つて居る、如何に祕密を打明けても、決して他へ漏らすやうのことは御座るまい、然るに、何事も打明けずに出立して、他日これを知つてから、咎立てされた時分に、一言の申譯けもならま

い、寧ろのこと何も彼も言ふて行かう』

『貴下が、その御考へなら、強ては申さぬ、御隨意になされた方が可からう』

『それでは、御立會ひ下され』

「宜しい、承知いたしました」
風邪の心地で引籠つて居た望東尼は、何か知らぬが、三人で是非逢ひ度いといふから、衣服を改め徐かに出て来た。

△餞別の旅装束

望東尼は偉い女であるから、高杉の人物を看破いて、必ず長州藩の浮沈を存負つて立つ人であると思つて居たのだ、夜中に早川と月形が来て高杉と三人で、自分を呼ぶから座敷へ来て見ると、高杉は両手をついて。

「さて、この度は不思議の御縁にて、長長の御厄介、御禮は言で盡されませぬが、實は國元に事變有之、一刻も猶豫相成らず、之れより直に出立いたしまする」

「何ッ、之れより直に……」

「左様」

「國元の事變とは、何事に御座りまするか」

「一と通り申述べませう」

と、是れから晋作が、兩人から聞いたことを打明けると、望東尼は。

「それは意外なことで御座りました、貴下の御心配は御察し申しまする、左様いふことでありますな

ら、一刻もはやく御出立が宜う御座りませう」

「その御辭を承り快よく出立いたしまする」

「鳥渡御待ち下されませ」

何か知らぬが、望東尼は席を立つて、自分の室へはいつた、少焉すると風呂敷包みを持つて来て。

「まことに失禮ながら、是れを御受取り下され、御出立の餞別といふほどのものでは、御座りませぬが、僅の妾の志、思ふ心の萬分一で御座ります」

「それは何とも恐入る、是迄の厚い御世話、それさへ御禮は辭に盡されぬ、その上に、この御心配を

受けては」

「否々、左様仰せられましたは、却つて耻入りまする」

晋作は包みを押戴いて、やがて之れを開けると、意外にも旅支度が一通りはいつて居る、木綿でこそ

あるが黒紋付、それに義經袴、脚絆草鞋掛けまでも揃つて居るのは、今ま俄かに調へたのではない、

豫め支度を仕て置たものに相違ない。

「貴下が御出遊ばした時から、一度は斯ういふ機會もあるものと、その時に心付いて用意は致して置

きました、足らぬ勝ちの寂しい生活のうちより致しますこと故、何事も心に任せず、まことに御

恥かしいことで御座ります』

△生命長かれ櫻花

望東尼の心掛けは、何う考へても普通の女子にないことだ、三人は互ひに顔を見合せて、只だ感心するの外はない、不圖氣がつくと、短冊が一枚載つて居る、晋作が之れを採つて見ると。

まこゝろをつくしの衣は君か爲め

たちかるへきころもてにせん

と書いてあつた。

『貴女が厚い御思召は、決して忘れはいたしませぬ』

『只だ此上は立派に忠義を御立て遊ばすやう、乍蔭祈りまする』

折柄遠い山寺の鐘の音が聞える、既う夜半に近いのだ。

何時まで居ても際限はない、晋作は直ぐに、望東尼の心の籠つた旅支度を爲る、そのうちに望東尼は、また一枚の短冊を取上げて、さらさらと認めた。

『妾の心は、之れにて御承知下されませ』

晋作が之れを見ると。

惜からの生命長かれさくら花

雲井にさかむ春をまつへき

思はずハラ〜と涙を流した晋作は、その短冊を戴いた儘ま、自然と頭の下るを覺えなかつた。

この門出に此歌は、晋作の心をはげますこと、實に容易ならぬものがあつたらう、と思はれる、現代の所謂貴婦人なるものが、國家の爲めと稱して、美服盛装のみに心を勞し、集會や宴席に、その虚榮心を充たすものとは、全く同一の比でない、望東尼は眞に女丈夫といふ可きである、晋作が歸國の後ちの發奮は、慥かに此生別の利那に受けた、感化の力もあつたものと見て可からう。

△獄中から月見

却説、井上聞多の身は、何ういふことになつて居たらうか、高杉の筑前から密かに歸國した事情を述べた上は、聞多が其後の消息も、少し説いて置かねばならぬ。

一度は野山の獄に入れられたが、間もなく親族預けとなつて、坐敷牢へはいることになつた、併し、一般の坐敷牢から見ると、頗る嚴重なものであつた、牢番の役人は、無論藩の方から附けられて居たので、取締りは實に酷かつたのである、食事の如きも、麥飯に梅干一つといふことに定まつて居て、内外の通信は全く絶えて了つたから、その後、藩の形勢は何うなつたかといふやうなことも、更らに

解らないのである、只だ空しく生命を永らへて居るといふ丈のことだ、それに何時嚴命が下つて、切腹を申し付けられるのか、豫め知することは出来ないのだから、考へて見れば實に心細い境遇である。

元治元年の十二月十五日、世間では歳の暮とて大分忙しいことであらうが、牢の中に居る井上は、別に正月を迎へる支度が要るといふでもなく、明日をも知れぬ露の生命の、今の果敢ない身の上には歳の暮も始もあつたものぢやない、二三日續いた雨の漸く晴れて、今日は素晴らしい天気になつた、夜になつてからは、十五日の月影清く、空には一點の雲もない、牢格子の間から射し込んで来る月の光りに、萬感交々胸を壓して井上は熟と格子の間から空を仰いで居た。

『オイ、何を見て居るか』

執るにも足らぬ牢番の如き卑しいものにも頭から抑へられるやうに言はれる、それが又た疔癩の強い井上には、何となく堪忍が出来ないのだ。

『月を見て居ります、今夜は近頃になく静かな良い空ですな』

『月見かね』

『ハイ』

『ハッハ、、、牢の中で月見でもあるまいに……………』

『併し月の方では牢の人でも、同じやうに照して呉れますからな』

『ふーむ』

『世の中で一番に正しいものは、日と月ですよ、悪人でも善人でも、同じやうに照らして居る所を見ますると、日と月ほど正直なものはありませんまい』

『成程』

不圖井上の膝元を見ると、二尺餘りの黒い棒のやうなものがあるから。

『それは何かな』

『之れで御座るか』

『うむ』

『之れは望遠鏡と申して、月を見る眼鏡です』

『ふふーむ、月を見るのか』

『左様』

『月を見て何が面白いかな、眼で見ても眼鏡で見ても、矢張光々して居る丈のことだらう』

『否この、眼鏡で見ますと、月の中の物が歴々と判明なのです』

『馬鹿なことをッ……月の中に何かあるものか』

井上は膝を立直して。

『月といふものは矢張り世界のひとつで、彼の中には人間も在れば動物も居る、決して光つて居るばかりでは御座らぬ』

『はア、月は世界かね』

『勿論のことです』

『その眼鏡で見えるかな』

『よく見えます』

『ふふーむ』

『山も川も皆な見えまする』

『山や川もあるのか』

『そりやあります』

『川の水が何して落ちて来いだらうか』

『それは神様の力です』

牢番は頻りに首を傾げて聞いて居るから、井上は興に入つて猶ほ話しかける。

△月世界が見える

肉眼では見られないが、この眼鏡を用ゐれば、月の世界が悉皆見へるといふ、嘘らしくはあるが、現に今見て居ながら斯ういはれると、眞實らしくも聞かれる、牢番の心では、その眼鏡を鳥渡用ゐて見度いのだ。

『オイ井上、その眼鏡を鳥渡之れへ……………』

『御覧になるのか』

『うむ』

『宜しい、さア御覧なさい』

格子の間から出した眼鏡を、密と受取つて熱く見ると、日本に有觸れたのとは、少し異つて居る。

『ふーむ、成程』

何を感じたか、斯ういひながら眼鏡を空の方へ向けて、頻りに月を眺めて居るのだ。

『何うです解りましたか』

『まア、待ちなさい、何だかピカ／＼するばかりで、何も見へんやうだ』

『熱く御覧なさい、富士山に似た山が在る筈です、それに川の流れも見えてせう』

「ははア……………」

「人間のやうなものが歩いて居ませう」

「ふふーむ」

「象のやうな動物も居れば、犬の驅廻るのも見えるでせう」

左も自分にも見えるやうに、井上が言ふので、牢番は頻りに首を振りながら、眼鏡を右に左りに廻して、一生懸命に見て居るが、更に何も見へない、只だピカ／＼光つて居るばかりだ。

「何だ詰らん、何も見えんぢやないか」
眼鏡を井上に渡し乍ら。

「汝へは他を馬鹿に爲すから不可よ、何うも、不思議だとは思つた、眼鏡で月の中が見えるなんて、ソナ馬鹿らしいことのある筈がない、汝へは實に不都合な男だ」

井上は可笑さを堪えて。

「さう御立腹では恐入る」

「餘んまり馬鹿々々しい」

「足下は見えないと仰せられるが、拙者には能く見える」
眼鏡を執つて空を見て居る。

「や、人も通れば犬も驅ける、月の世界も繁昌ですな」

「へへー」

「何處の世界も變りはありませんな」

「オイ／＼、馬鹿に仕なさんな、汝へはそれだから他に憎まれるのだ」

「でも見えますから妙ですな」

「同じ眼で同じ眼鏡から見ると、汝へに見えて、己に見えんといふ理由はない」

「それは如何にも御道理です」

「御道理なら、汝へにも見える筈がない」

「左様……………」

「何が左様だ、他を馬鹿に爲るにも程度がある」

ブン／＼怒つてる牢番の顔を見て、可笑しいが笑ふこともならず、井上は頻りに何か考へて居る様子であつたが。

「こりやア拙者が悪かつた、足下に月の世界の見える筈がなかつたのぢや」

「それを見えるから見ろ、といふたのは不都合ぢやないか」

「併し、拙者には能く見える」

「未だ左様いふことを申すか、汝へに見えるものが、己に何うして見えない」
「其處に理由がある」

「何ういふ理由か」

「これは切支丹の信者でなければ、駄目ぢや」

「ゑッ、切支丹ぢやと」

「左様です」

「切支丹の信者なら見えるのか」

「ヤンの神様が考へた眼鏡であるから、信者でなければ見えんのが、先づ當然でせう」

「何ぢや、汝へは切支丹宗の信者か」

「無論……」

「何が無論ぢや、怪しからん」

顔色を變へて牢番は怒つた、井上はニヤリ／＼笑つて居る。

△出任せの法螺

耶蘇教を切支丹と稱して、深く之れを邪教と思ひ込んで居た時代、而かも、長崎の附近を限つて、

纒かに許されて居たのだ、若し其以外の土地で、之れを信するものが在つたら、それこそ大變になるのだ、耶蘇教を信することは、極端に禁せられて居たのである、それを井上が信じて居ると、自ら發言したので、牢番は頗る驚いた、また天帝を拜んで信者になつて居れば、この眼鏡で月の世界が見えるといふものだから、切支丹は愈よ邪教である、と決めて了つた。

「汝へは左様いふものを信仰しては、宜しくあるまいから、心を改めて矢張り在來の神佛を信したら何うだね」

「左様はなり兼ね、一たん信仰した上は、飽迄も止める次第にはならぬ」

「併し、それを止めなければ、天下の大法を犯すことになつて、その罪は、九族に迄及ぶのだが、それでも可のか」

「何うも止むを得ませぬ」

「ははア、大層な決心だが、何うして左様いふものを信仰するやうになつたのか」

「郷に入つては郷に従へといふ諺の通り、最初は僅の當座免れに、その信徒になつたのが、漸次説教を聞いて見ると、實に難有いもので、却々日本の神道や佛敎の及ぶ所でない、拙者も今では全くの耶蘇信者で御座るよ」

と口から出任せにヤツつけたから牢番は呆れ返つて。

「汝へは生命知らずだ、そんなことを言つて居るうちに殺されるのだから、その時になつて後悔せぬ
が可い」

「早く死ねば早く天帝の前に行ける、少しも悔む所はない」

「ふふーむ」

「足下も、信徒になつては何うちや」

「馬鹿なことを言はッしやるな」

「同じ人間でありながら、月の世界が見えないとは、實に情けないことぢや」

「そんなことは何うでも可い、月の世界なんぞ見んでも可いよ」

「未だ他にも功德がある、月の世界にも時々遊びに行けるからね」

「ゑッ、何ぢやと、月の世界へ遊びに行ける」

「左様」

「そりや何うして………」

「この間から出るのぢや」

△一 奇 策

格子の間へ手を出した、牢番は吃驚して。

「オイ、冗談を言ふな、そんなことを爲れて堪まるか」

「倦怠すれば仕方がない」

「真正に出られるのか」

少し心配になつて来たものか、牢番の顔には不安の色が見える。

「今宵は鳥渡出かけやうと思つて居る」

「そりや困る、出かけた限り歸るのを忘れられたら、己は無事に済まない」

「何うも止むを得ない」

「止むを得ないとは怪しからん、そんなことになるらと困る」

「足下の困るのは、拙者の知つたことぢやない、御随意ぢや」

牢番は泣ッ面を仕て。

「そんな意地の悪いことを言はんで、何うか出かけるのだけは止めて呉れ」

「然らば、此方からも相談がある」

「ふん」

「筆墨を貸して下さるか」

『そりやならぬ』
 『ならぬといふ上は、止むを得ないから徐々出かける』
 『ま、ま、待つて呉れ』
 『それでは貸して下さるか』
 『弱つたなア………』
 遂々牢番を抑へつけて、筆墨を借りることに仕た、今日から考へると馬鹿々々しいが、文久元治の昔は、未だ斯なものであつた。

△奇兵隊の奇襲

慶應元年の正月三日、突如として下之關に、一團の義軍が起つた、降りしきる大雪を侵して、陸路を眞一文字に萩へ向ふたは、例の奇兵の一隊である、今の公爵山縣有朋、當時の狂介は寶藏院流の長槍を提げて、その兵に將として進んだのであつた、別に藩船を奪うて海路から暴風狂瀾を物ともせず、遮二無二に押進んで、萩の城へ肉薄したのは、高杉晋作の率ゆる奇兵の別隊であつた。
 高杉は筑前から歸つて來ると、巧みに踪跡を晦まして、各處に出没し、頻りに同志を説いて、將に大に爲す所あらんとして居たのだ、それを知らなかつたものか、恭順派の人々が、高杉を抑へずに置

たのは、甚だ不注意の至りではあつたが併し、毛利藩の爲めには、その方が却つて可かつたのである。もはや機會が來たと見て、第一に山縣狂介を説いた、最初は大分至難かしかつたが、漸く山縣も承知したので、山縣が預かつて居る奇兵隊を以て、先づ事を興すといふことになつた、その頃の山縣は、頗る快活な人であつて、今のやうな沈着な人ではなかつた、自分の惚れた女を連れ出すのに、抜刀で其女の親を嚇して承知させた、といふ位ゝの奇抜なことも、時には行つたものである、三條や東久世を始め七人の公卿が、長州から逐はれる時、最後まで踏張つたのはこの人である、元就公の木像を擁して、假令藩命と雖も、七卿を逐ふことは不可なり、と絶叫して容易に藩命に従はなかつたのも此人である、また、攘夷について對岸の小倉藩の動靜が、甚だ曖昧であつたといふ所から、單身小倉へ乗り込んで、嚴重な談判を開いて、小倉藩の重役を頼へさせたのは、萩原鹿之助といふ一壯士で、今の山縣が則ち其人である。
 奇兵隊の名は、維新史の上に頗る異彩を放つて居るが、その組織は全く藩兵とは違つて居る、今所謂義勇兵といふやうなもので、農工商のうちから志あるものを招いて、成立つたものが奇兵隊であるから、元氣は實に盛んな連中だ、苗字帯刀を許されて、武士の仲間入りが出来るといふ所で、自ら進んで隊にはいるのだから、皆な多少の志は有つて居る、されば奇兵隊の名が、維新史の一頁を彩つたのも無理はない。

萩の城外には、變を聞いて粟屋隼人が二千の藩兵を以て陣を張つて居るのだ、其處へ、高杉と山縣が、海陸一時に攻め込んで来て、随分酷い闘であつたが結局は粟屋が討死して、奇兵隊の大勝利となつた。

毛利侯父子は寺院から救出される、井上も牢屋から出された、伊藤は山の中から出て来る、その他正義派の人々は皆な藩政に與かることになつて、恭順派は全く閉息して了つた、然る上は、幕府と一戦を試みることになるのであるから、その準備に、かねばならぬ、藝備の國境に防戦の用意を爲るや、山口城の條理を爲るや、公然幕府へ反抗の氣勢を示すやうになつた。

幕府の方では、その報告を得て大に驚いたといふものは、尾張大納言の取計らひで、藩主に代る責任者が、切腹の上謝罪したから、軍を收めて引上げたのだ、然るに、今度は公然開戦の支度を仕て、殆んど幕府を蔑視した致方であつて、この調子で進んだら、何んなことを爲るかも知れない、また、毛利侯の罪は、全然消えて居るものではない、それに肝腎の滅地處分も終はつて居ないのに、寺院にはいつて謹慎して居たものが、ノソノソ城へ歸へつて、開戦の支度を爲るとは怪しからん、兎に角一應は談判に及ぶのが宜からう、とあつて、使者を長州へ差向けた、所が、亂暴にも使者を斬つて了つた、この上は、もはや勘辨相成らぬ、速かに攻め潰せ、といふ所から、いよいよ大兵が長州へ向ふことになつた、是れが二度目の長州征伐であつて、幕府の威信は、この一戦に由つて全く地に落

ちたのである、その次第は、追々に説くことに爲るが、高杉と井上の舞臺は、之れから開くのである。

△困難なる長州再征

九州から出て来るものも、中國から九州へ渡るものも、必ず通らねばならぬ土地が、下之關であるから、自然と四方の志士が集つて来て、何時もゴタ／＼やつて居たものだ、その頃の習慣として、少し秘密の話は酒席で行はれたものである、一方の座敷でドンチャン騒ぎを行つて居ると、別室に何事かの相談が必ず行はれて居る、といったやうな次第で、斯ういふ風の遣方は、他の注意も避けることが出来るのみならず、下地は好なり御意は可しの連中が、何うしても多く集つて来ることになつて、遊里の繁昌は非常であつた、明治の今日になる迄も、下之關といへば地勢の上から、人の知つて居るばかりでなく、藝妓遊びの方でも知られて居る位だ。

殊に、毛利藩が多年の間、勤王の爲めに盡したといふ、その關係から諸藩の志士と、長防の志士とは、随分因縁の深いものになつて居る、それ等の事情は矢張り下之關へ志士の集まつて来る原因となつて、大きくいへば勤王討幕の策源地となつて居たのだ。

文久の政變で毛利が、一時勢力を失つて閉息した、その上に、藩論が一變して幕府へ降参と決した